

---

# ガーデン

月宮永遠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ガーデン

### 【Nコード】

N8423Q

### 【作者名】

月宮永遠

### 【あらすじ】

平凡な三十路過ぎのOLが異世界トリップ！

幻想的な庭園で出会った可憐な少女と美しい男性は、ローズの精霊と精霊世界の皇帝だという。ロマンティックだけど何処か歪で恐ろしい世界に生きる、人間と精霊と異世界人・道子の恋愛ファンタジ

！

その日、宮田道子<sup>みやたとおこ</sup>は朝からついていなかった。

予定より早くめぐって来た生理痛に目を覚まし、カーテンを開けてみれば東京では今年初めての雪が降っていた。寒さに弱い道子にとって、ましてや生理初日に大寒波に襲われるなんてついていない。ぬくいお布団に戻りたいところだが、朝9時から始まる会議の為に重い腰を上げて、何とか電車に乗り込んでみれば、人身事故のせいで山手線は中途半端に沿線で止まった。

よっぽど家に引き返そうかと思ったが、昨夜の残業は今朝の会議の為にあったと思い直して、人で溢れかえるホームの真ん中で寒風に耐えていた。

（寒いなあ、暖かいお茶飲みたいなあ・・・）

道子はマフラーに隠れるように顔をうずめて、寒さに耐えるようにぎゅっと体を強張らせた。

目を閉じて、脳裏に暖かいお茶を思い浮かべた。快適な自分の部屋で、あんずジャムを湯で溶かして啜<sup>すす</sup>りたい。かじかんだ指先を暖めたかった。

（・・・あれ？）

ふわっと暖かい空気が流れて、道子は思わず目を開いた。

「えっ」

道子は驚愕の表情を浮かべて辺りを見渡した。たった今、立ち尽くしていた駅のホームが、一瞬にして童話の世界のような、幻想的な緑色の庭園ガーデンに変わっていた。

『・・・リリイ？』

幼い少女の声に、道子は視線を落とした。少女と目が合うと、その可憐さに状況を忘れて思わず見惚れてしまった。

少女は波打つ豪華な金髪を背中までおろして、クリーム色のベビードールに身を包んでいた。両手でウサギのぬいぐるみを抱える様は、童話の世界のお姫様のように可憐だった。しかもよく見れば、驚きに見開かれた瞳は、嘘みたいなルビー色をしている。

「・・・」

道子が声も無く少女を見下ろしていると、少女が歩み寄ろうと身じろいだ。それをさえぎるように、少女の肩に大きな手が回された。道子は少女の他にもう一人いた事に気付いて、少女の肩に回された腕を視線で辿るように顔を上げた。

長身の男性と目が合うと、またしても状況を忘れて思わず見惚れてしまった。男性はよく出来たCGのように端正な顔立ちをしている。少女の真紅の瞳にも驚いたが、こちらの男性は白銀の髪に、不思議な光彩を放つロイヤルブルーの瞳をしていた。うつすらとした光彩を放つ瞳は綺麗過ぎて異様だった。

道子はある可能性に思い当たり、ハッと息を呑んだ。

「私・・・、ひょっとして・・・死んだ？」

童話の世界のような美しい庭園<sup>ガーデン</sup>、目の前の天使と見紛う麗しい男女。ここはもしかして、天国ではないだろうか？

呆然と呟く道子の様子を、美しい男性はじつと見つめた。

『貴方は何者です？』

鼓膜に響く美声に道子は年柄もなく頬を染めた。しかし発せられた言葉は何と言っているのか分からなかった。口調から何かを問われた事だけは分かるのだが・・・。

『リリイなの？』

一方、可憐な少女は泣きそうに顔を歪めて、縋るように道子を見上げた。やはり言葉は聞き取れなかったが、潤んだ瞳で少女に見上げられて、道子は思わず慰めてあげたくなった。傍に近寄ろうと足を踏み出したところで、

ザクッ

足元に槍のような形状の枝が不自然に突き刺さった。道子が目を丸くして足を止めると、少女がうなり声を上げて、男性の手を払いのけた。あっという間に道子の前にやって来ると、その小さな体で道子を守るように腕を広げて男性と対峙<sup>たいじ</sup>した。

『我が君！ リリイに何をするんですか！？』

少女は激昂<sup>げっこう</sup>したように男性に向かって喚<sup>わめ</sup>いた。道子は疑問符を顔中に浮かべて、少女と男性を交互に見比べた。

『落ち着きなさい。どうやらリリーの輪廻に在る者のようですが・  
・、別人でしょう。まさかお前の魔力エーテルがこのように開花するとは思  
いませんでした』

『ロゼには分かりますっ！リリーだって！』

道子は激昂する少女をなだめるように、そつと肩に手を置いた。少女はびくりと肩を揺らして道子を振り返った。瞬く間に真紅の瞳に涙が盛り上がって、ぽろりと零れた。

「ねえ、どうしたの？」

道子は困ったように問いかけた。

『・・・だって、リリーの、リリーの欠片が見えるから。帰ってきてくれたんでしょう・・・？』

少女はわんわんと泣きながら、道子のウェストに両腕を回して抱きついた。道子は戸惑いながらも、慰めるように小さな背中に腕を回した。

『・・・離れなさい。その人間がリリーのわけがないでしょう。あの子はもう死にました。少し片鱗が見えたところで、全くの別人ですよ』

男性は滑るように移動すると、道子にしがみついている少女を引き剥がそうとした。少女はイヤイヤと頭を振りながら、背後に迫る手を払いのけた。冷たい表情の男性から少女を守るように、道子は小さな体を抱きしめたまま後ずさった。

道子の庇護するような素振りを見て、男性は手を下ろした。

『その子から手を離してください』

「な、何？」

道子が不安そうに顔を顰めると、男性はしばし無言で道子を見つめた。

不思議な光彩の瞳に見つめられると、何もかも見透かされそうで怖くなる。道子は緊張した面持ちで男性を見上げた。

男性の神秘的な瞳を見つめていると、ロイヤル・ブルーの瞳がいつそう煌<sup>めい</sup>いた気がして道子はドキリとした。鼓動が跳ねるのを感じながら視線を逸らせずにいると、不思議な現象が起きた。

道子の脳裏に見知らぬ光景が幾つも浮かび上がったのだ。まるで映画のフィルムを早送りで鑑賞しているようだ。

映像の中の庭園<sup>ガーデン</sup>は非常に広大で、そのうちの一角に可憐なローズ・ガーデン見えた。まさに今道子がいる場所によく似ていた。そこへ麦わら帽子を深く被って庭仕事をする年若い女性が現れた。彼女の傍で嬉しそうに笑い声を上げている少女は、道子にしがみついている少女だった。

映像の中で少女が『リリイ』と呼ぶと、女性は優しい笑みを浮かべて『ロザリア』、時には『ロゼ』と応えた。

そういえば、この可憐な少女は先程から何度か「リリイ」と口にしていた。人の名前だったのかと道子は一つ納得したところで、しかしこの不思議な映像は一体・・・と問いかけるように男性を見つめた。

男性は何も言わずに道子を見つめ続けた。道子の中に洪水のように流れ込む映像は、目の前の男性が何か作用しているとしたか考えられなかった。強力な引力でも働いているかのように、道子はどうしても男性から視線を離す事が出来なかった。

映像の中で、リリイは何度も少女のことを親しみを込めて『ロゼ』

と呼んだ。少女の名前は『ロザリア』で、愛称を『ロゼ』と言うのだろう。それから『アシュレイ』という名前もよく出てきた。その名を口にする時、不思議とリリイは真正面を向いている事が多かった。何となく見詰め合っているような気がして、相手は映像の産物なのに少し恥ずかしかった。

猛スピードで駆け巡る映像の中で、年若いリリイは少しずつ年を経te行った。最初は女子学生のような幼さだったが、次第に二十代後半に見えるようになった。

（あれ、でも・・・、この子は？）

流れる映像の中で、成長を続けるリリイの側で、ロザリアが少しも成長していない事に道子は気がついた。疑問に思ったがすぐに意識が逸れた。明るい光景の映像が、少しずつ綻んで行くのが分かったからだ。

映像の中で、少女が必死に何かを見上げて訴えている・・・。  
悔しそうに、悲しそうに、何に激昂しているのだろう。

少女の必死な様子は、先程道子を背にかばうように激昂した光景によく似ていて、その既視感に道子は閃いた。

（あ、そうか・・・！ この映像ってこの人の・・・！ この人の視点で見た光景を、私見ているんだ。この人の名前きつと「アシュレイ」なんだ。だからリリイは「アシュレイ」って呼ぶ時、よく真正面を向いているんだ）

道子の閃きを肯定するかのようになり、脳裏を駆け巡る情報量が一気に増えた。

「待つて、早い」

道子が顔を顰めると、映像の流れる速度は識別出来る程度に緩やかになった。かけ巡る映像の中で、ロザリアの慕うリリーの身に不幸が起きた。

（酷い・・・）

大勢の人間が力なく倒れるリリーを取り囲んでいた。うつ伏せに倒れている彼女はぴくりとも動かない。小さなロザリアは周りの人に両手足を取り押さえられながら、必死にリリーの名前を呼び続けている。しかし、取り囲んでいる一人が、ロザリアに松明をかざした・・・。

「やめて！」

道子は悲鳴を上げてきつく目を閉じた。それでも洪水のように流れる映像は止まらなかった。見たくもない光景が脳裏に広がる。

遠くにあった光景がぐんぐん近くなって行く。映像の視点がアシュレイなら、きつとこの時彼は少女を助けようとしていたのだろう。映像を通じて、焦燥感のような・・・、怒りにも似た感情が道子の中に流れて来た。当然だ。こんな光景を目の当たりにすれば誰だって戦慄する。年端も行かない子供に火をつけるなんて狂気の沙汰としか思えない。

少女は見る間に炎にくるまれたが、燃えることなく炎の中から呪詛のような悲鳴を上げた。凄まじい爆発が起きて、何もかもが一瞬で消えてしまった。アシュレイがロザリアの体を抱きしめた時には、

もう辺り一面焼け野原になっていた。

道子は額に汗を浮かべて、瞳を開けた。

道子の困惑をよそに、映像はそれでも流れ続けた。

様々な角度から焼け野原を見ているようだった。その視点はまるで空から見下ろしているようだ。しばらく爛れた大地を惜しむように、映像はゆっくりと流れていたが、次第に映像の流れる速度が上がって行った。

映像の中で、泣きじゃくる少女の姿に道子の胸は痛んだ。

少女の悲しみが手に取るように分かる。あの穏やかな笑みを浮かべていたリリイがいなくなつて悲しいのだ……。

アシュレイがロザリアを慰めても、少女の憂いは晴れない。

焼け爛れた大地は風に吹かれ、雨に濡れて、雪が積もり……、やがて新芽が顔を出した。少しずつ庭園<sup>ガーデン</sup>は蘇って行った。

アシュレイの差し伸べる手を、ロザリアはいつも拒んだ。会話の意味は分からないけれど、映像と共にアシュレイの感情がうつすら流れる時がある。この時も、アシュレイは少し齒がゆい思いをしていたようだ。

アシュレイは……、

小さなロザリアを自分の領土へ連れて行きたいと思っている。けれど、ロザリアはリリイと過ごしたこの土地を離れたくなくて……。

アシュレイがロザリアを説得しようとすればする程、少女は頑なに心を閉ざして行く。リリイに会いたい一心で、ロザリアは何か、目

に見えない力を進はなませたのだ。アシュレイの感情からその様子が尋常ではない事が分かる。驚愕と、賞賛。ロザリアのした事に感心しているようだった。

そしてロザリアとアシュレイの視線の先に、道子のよく見慣れた顔が現れた。

彼等の視線の先にいたのは、道子自身だった。

洪水のように流れる映像は止まったが、今度は問いかけるような映像が道子の中に流れてきた。

ロザリアの笑顔、泣き顔、リリイの笑顔、そして立ち尽くす道子の姿が順番に脳裏に浮かんだ。リリイの姿と道子の姿が交互に映り、最後に何かを期待するようなロザリアの表情が映った。・・・言いたいことは伝わった。

（この子、何でか分からないけど、私のこと「リリイ」だと思っているんだ・・・）

道子はぐずぐずと泣いている少女の小さな背中を撫でた。少女はぎゅゅと道子にしがみついている。痛いぐらいの力が、少女の慟哭の深さを表しているようだった。

「それで・・・結局ここは、何処なの？」

困惑の表情を浮かべる道子を、アシュレイはじっと見つめた。何となく道子の疑問を読み取っているように感じて、道子もじっと見つめ返した。

（あ・・・！）

映像の視点が道子自身に切り替わった。道子の今朝の様子が脳裏に流れ出した。

生理痛に眉を顰めて、のろのろと布団を剥ぐ手が映る。

(そんな記憶読み取らないでよ・・・)

道子が羞恥を感じている間に映像は流れた。

山手線の駅のホームが脳裏に浮かぶ。道子は映像に集中した。確かに今朝は駅のホームにいたはずなのだ。駅のホームとロザリアの立っている庭園ガーデンがシンクロするように重なって見えた。

ロザリアは必死な様子で何事か口にしている。それは先程の映像で見た光景だった。何て言っているのか分からないが、映像に合わせて流れる仄かな感情で、ロザリアがリリイを求めてそうしているという事だけは分かった。

そして、駅のホームからこの庭園に映像が切り替わる。アシュレイの視点に戻ったようだ。呆然と立ち尽くす道子を見て、驚いているような感情が伝わって来る。

そこで一方的に流れこむ映像は止んだ。

「待つて・・・、嘘でしょ。つまり、ロザリアが私をここに連れて来たっていの？」

道子の呟きは小さなものだったが、ロザリアは名を呼ばれて勢いよく顔を上げた。涙で潤んだルビーの瞳は宝石のように綺麗だった。

『リリイ、会いたかった』

ロザリアは顔をくしゃっとさせて新たな涙を零した。

「私はリリイじゃない」

道子はロザリアとアシュレイを交互に見つめた。アシュレイは道子の疑問に応えるように、首を振った。

「どういうこと？ 意味分らないよー・・・」

『我が君、リリイは何て言っているのですか？』

『知りません。大陸の言葉は通じないようなので、思念で情報交換しているところです。人間には負担が大きいから、お前はやめておきなさい。まだ未熟なだから』

ロザリアは拗ねたように、アシュレイを見上げた。

「何？」

道子が問いかけるようにロザリアとアシュレイを見つめると、ロザリアは涙をぬぐって笑みを浮かべた。出会ってから初めて見せる天使のような笑顔に、道子の心臓が跳ねた。

（超かわいいっ！）

『私の名前、ロザリアって言うの。リリイがつけてくれたんだよ。いつもロゼって呼ばれていたの。さっき呼んでくれて嬉しかった。ありがとう』

ロザリアは自分を指しながらロゼ、と何度か繰り返し口にした。道子は頷いて微笑んだ。

「ロゼ、私は宮田道子<sup>みやたみちこ</sup>って言うの。はじめまして」

道子は何度か自分を指して道子と繰り返した。

『ト・ウ・コ？』

ロザリアは首を傾げて道子を見つめた。その拙い<sup>つたない</sup>様子は胸がときめく程可愛らしかった。

『道子』

驚く程日本的な発音に、はっとして道子は顔を上げた。今確かにアシュレイがそう口にしたのだ。慌てて肯定するように何度も頷いた。

「はい、道子です。アシュレイ」

道子も名を呼び返すと、アシュレイは微かに笑みを浮かべた。初めて柔らかい眼差しを向けられて、道子は全身が熱くなるのを感じた。

（私、何反応してるの・・・！ 何でもないってば！）

アシュレイは、動揺して硬直する道子との距離を一步詰めた。それだけでドクンと道子の鼓動が跳ねた。たった一步距離を詰められただけなのに、煩いくらい鼓動が高鳴る。

（これだけ綺麗なんだもん、仕方ないよね・・・、えっ）

アシュレイはさっと道子の膝下に手を入れると、道子の体を赤子のように持ち上げた。

「ちょっと！何！？」

道子は背を仰け反らせて、アシュレイと距離を取ろうとした。し

かし危ないよ、と言うように彼は宙をさ迷う道子の腕を掴んだ。そのほっそりした体軀からは想像がつかないが、アシュレイはしっかりと片腕だけで道子を支えていた。

『我が君！？』

ロザリアが目丸くして道子とアシュレイを見上げていた。

『お望み通り、リリイを手に入れたのだから、もう此処に用はないでしょう？』

『……でもこの庭園<sup>ガーデン</sup>を元に戻してあげたいし』

『何度も言いましたが、それは精霊界<sup>ハイレイスファア</sup>でも出来る事でしょう。リリイの愛した庭園<sup>ガーデン</sup>をあちらに築けばいいではありませんか』

『私はリリイと一緒に、ここにいたいんです。リリイは、リリイはもういないけど、離れたくない』

ロザリアは辛そうに眉を寄せた。アシュレイは無言でその様子を見ていたが、やがてぼつりと呟いた。

『なら、私は道子を連れて行こうかな』

『……っ！』

ロザリアは驚いて真紅の瞳を見開いた。

『ねえ、道子。貴方も精霊界<sup>ハイレイスファア</sup>に行きたいと思いませんか？』

道子は不安そうにアシュレイを見つめた。優雅な長い指がそつと道子の頬を撫でる。何も言えずにしていると、ロザリアの悲鳴にも似た声が聞こえた。

『嫌です！・・・置いて行かないでっ！！』

道子に向かって手を伸ばすロザリアの姿を見て、道子はたまらず身じろいだ。離してとアシュレイに視線で訴えるが無視された。強靱な腕で道子をしっかりと抱いたまま、ふわりと宙に浮かび上がった。

「えええ！？」

『トウコー！』

道子とロザリアは驚いて声を上げた。思わずアシュレイの肩にぎゅっとしがみつくと、安心させるように腕を撫でられた。

「待ってよ、ロゼが・・・」

ゆっくり遠ざかる地上にぽつんと残されたロザリアを見て、道子は困惑してアシュレイを見つめた。アシュレイは無表情でロザリアを見下ろしている。

（え、置いて行くの？ 何で？）

道子は地上に残されたロザリアを指して、ぱしぱしとアシュレイの肩を叩いた。言わんとする事は伝わっているはずだ。しかしアシュレイは宥めるように道子の腕を撫でるだけで、地上に戻るうとはなかった。

どんどん小さくなるロザリアに向かって道子は叫んだ。

「..ロゼ」

『トウコー!』

ロザリアは上空に向かって叫ぶと、本能に従って大地を蹴った。その瞬間、庭園<sup>ガーデン</sup>を守るように隅々まで張り巡らせていた根が、メリッと悲鳴を上げるように剥がれ落ちて行った。それでも夢中で空へと舞い上がった。

早くしないと、アシュレイが道子を連れて行ってしまう!

『待って、トウコー!』

ロザリアは道子に向かって手を伸ばした。道子もその手を取ろうと腕を伸ばす。

「ロゼ!」

道子はロザリアの小さな手を掴んだ。

「アシュレイ、待って! ロゼが来た」

道子がアシュレイを振り仰ぐと、青年は透き通ったロイヤル・ブルーの瞳を嬉しそうに細めてロザリアを見つめていた。

『ようやく来る気になりましたね』

『.....』

ロザリアは思い出しように眉を寄せて俯くと、無言で道子の両手

をぎゅっと握り締めた。アシュレイはその幼い様をじっと見つめると、慰めるように声を掛けた。

『お前は十分尽くしました。何も悔やむ事はありません。・・・もう忘れなさい』

『・・・いつかまた、生まれ変わるリリイに会えるなら、あの庭園<sup>ガーデン</sup>ですと待っていていても良いと思っていました。待っていてくれるって思っていたのに・・・それなのに・・・』

はらはらと涙を落とすロザリアの頬を、道子は心配そうに撫でた。目元を優しく拭われると、ロザリアは凍った心がふわりと溶けて行くのを感じた。

『ごめんなさい、寂しかったの。待っていらなくて、ごめんなさい。リリイじゃないと駄目だと思っていたのに、トウコに出会えて本当に本当に嬉しい』

「泣かないで」

道子は小さな頭を抱き寄せると、優しく髪を撫でた。小さな手が絶るように道子の手になった。

『トウコと一緒にいたいです』

ロザリアはぽつりと呟くと、ゆるゆると顔を上げてアシュレイを見つめた。

『いいでしょう。お前の慰めになるのなら、道子を精霊界<sup>ハイレースフィア</sup>に連れて行きます。

さて、そうと決まれば灰海まで転移しますよ。ハロリアン地上もこれで見納めですからね。よく眺めておきなさい』

アシュレイに言われて、ロザリアはしみじみと住み慣れたアプリティカの大地を見下ろした。

かつて典雅な古城として知られたローゼン・サンジュエル城の姿は見る影もなく、自然に帰化した廃墟と化しているが、ロザリアの記憶の中では今も色褪せる事なく燦然さんぜんと輝いている。此处で宝物のような日々を過ごした。

古城を取り巻く豊かな庭園ガーデンの一角、美しいローズ・ガーデンで初めてリリイと言葉を交わした日の事。

真っ白なランブラー・ローズの木陰で、時にはアシュレイを交えてお茶会を楽しんだ事。

リリイの作る花びらの砂糖菓子クリスタライズドローズが大好きで、毎日のようにねだった事。

流れ星を数えながら、一緒に眠りに落ちた夜の事。

こっそりローゼン・サンジュエル城に忍び込んで、工房で働くリリイの姿を飽くことなく眺めた日々。草花を扱う、リリイの優しい手が大好きだった。

生まれてから、ロザリアの他に精霊を見かけた事は一度もなかったけれど、リリイさえいれば幸せだった。リリイがいてくれるなら永遠に庭園ガーデンの中でだけ生きていても良かった・・・！

『・・・さようなら、リリイ』

ロザリアの決別に満ちた囁きを聞くと、アシュレイは空いている片腕で宙に紋様を描いた。不安そうにその様子を眺める道子の手を、

安心させるようにロザリアは握った。視線が合うと、「大丈夫」と安心させるようにしっかりと頷いて見せた。

『今度こそ、絶対に守ってあげる』

音も無く一瞬で景色が変わった。

先程まで、道子の眼下には緑豊かな大地が広がっていたが、今は暗雲立ち込める空の下、荒波の海上にいた。

「きゃああ！」

荒れ狂う海は獰猛な生き物のように恐ろしかった。道子は悲鳴を上げてアシュレイにしがみ付いた。

『トウコ！ 大丈夫！？』

ロザリアは心配そうに道子に声を掛けた。

「もう、もう・・・何なの・・・」

涙目で呟く道子の焦点がぼやけ始めた。非日常の連続に心が限界に達しようとしていた。

『我が君、トウコは大丈夫ですか？』

『そうですね・・・怯えているようです。随分と遠い場所の出自のようですし、このような出来事に慣れていないのでしょう。ましてや我々は精霊なのですから』

アシュレイはそつと道子の頭を撫でた。柔らかな黒髪の質感を楽

しむように撫でていると、腕の中で道子が小さく呟いた。

「もういいから夢なら覚めて」

道子は五感を切り離すように、目を閉じて耳を塞いでいた。わが身に何が起きているのか分からず不安でたまらなかった。特にアシユレイに抱き上げられて空を飛んだ辺りから、心が限界を訴えて悲鳴を上げていた。

「人が飛ぶわけないじゃん。夢だから、夢」

道子がぶつぶつ呟いているうちに、潮騒の香りから清涼な新緑の香りに空気が変わった。

「はい、着きましたよ」

アシユレイは道子の体を大地に下ろした。しかし「きゃっ」と悲鳴を上げてよろめいたので、さっと腰に腕を回して支えてやった。

「トウコ、大丈夫？」

「ようこそ、ハーレイスフィア精霊界へ」

「は、はーれい・・・？」

「ハーレイスフィア精霊界ですよ。綺麗な所でしょう？」

道子は疲れた表情で辺りを見渡した。一瞬で景色が変わるのは、これで何度目だろうか？今度は神秘的な森の中にいるようだ。辺りには見た事もないような大木が幾つも聳そびえていた。まるでダイヤモンド

ンド・ダストのように、空気が煌いて見える。すがすが 清<sup>すがすが</sup>しい空気が、道子の体の隅々まで行き渡ると、精神的な疲労が幾らか和らいだ気がした。

しかし次の瞬間、道子はあるものを視界に留めて今度こそ倒れそうになった。

「な、なんで……。アレ、浮かんでるの？ ラピユタ？」

道子は空に浮かぶ大陸を見つめると、ふると体を震わせた。

アシュレイは道子の視線を追いかけて驚きの原因を認めると、説明しようと道子の脳裏に映像を与えた。しかし道子は嫌がるように激しく頭を振った。

「やめてやめてやめて。もういい、見せないで」

『トウコ？』

ロザリアは心配そうに道子の顔を覗き込んだ。しかし何もかも拒絶するように目を閉じる道子を見て、ロザリアはアシュレイを振り返った。

『我が君、トウコの様子が』

『……。ひどく混乱しているようです。感情が荒れていて読みづらい。とにかく宮殿に連れて行きましょう。その前に、ロザリア。お前にも休息が必要です』

『……。！』

ロザリアはびくりと体を揺らして後ずさった。

『分かっているでしょう。地上で暮らして来たお前の魔力はもう枯  
ハローアン  
 渴寸前です。一度光体になって、母なる世界樹アンフルラージュの御許に還りなさい』

エーテル  
 魔力が著しく落ちている事はロザリア自身よく分かっているので、  
 アシュレイの指摘はその通りだと思うのだが、怯えている道子の傍  
 を離れるのは嫌だった。

『・・・・・・・・』

『道子の事は心配いりません。信頼出来る者に任せると約束しまし  
 よう』

アシュレイの言葉にロザリアはぱっと顔をあげた。

『いいえ、他の誰にも任せたりしないでください！ 私が傍にいら  
 れないのなら、せめて我が君が傍にいてあげてください！』

『・・・・・・・・』

今度はアシュレイが沈黙した。否定的な感情を読み取って、ロザ  
 リアは必死に言い募った。

『トウコは此処へ来てから、私と我が君以外の精霊に会った事があ  
 りません。私達が共に傍を離れたりしたらトウコが不安になります  
 ！ 私だって他の精霊にトウコの事を任せるなんて心配で出来ませ  
 ん』

『この広大な精霊界で、<sup>ハイレイスファイア</sup>宮殿程安全な場所はありません。お前は私を何だと思っているのですか？ 精霊の王たる私に子守をする暇はありません』

『では私がトウコの傍にいます！ 力の限り傍にいます！』

ロザリアが声を張り上げると、道子は固く閉じていた目を開けて、窺うようにロザリアとアシュレイを見つめた。

「・・・どうしたの？」

『心配しないで、トウコ。私が傍にいてあげる』

トウコの手を握り締めるロザリアを見て、アシュレイはため息をついた。

『いいから、早く光体になりなさい』

『嫌です！ トウコの傍にいます！』

『全く、私が何の為に地上に出向いたと思っているのです・・・。<sup>ハロヒアン</sup>もういいから行きなさい』

アシュレイは淡々と呟くと、道子の腕にしがみついているリリイの額に手を当てた。その指先から絶対的な魔力<sup>エーテル</sup>の支配を感じると、ロザリアは瞬く間に輪郭を失い魔力<sup>エーテル</sup>そのものである光体に転じた。

「ロゼ!?!」

道子は姿を消したロザリアに驚いて声を上げた。ロザリアは目に

見えぬ光体となって、道子の周りを旋回しているのだが、人の身である道子には分からなかった。

無理やり光体にさせられたロザリアは、憤慨するように明滅した。しかしアシュレイが魔力エーテルの流れる光脈へと軌道を作ると、ロザリアは押し流されるように光脈へと消えて行った。

「ロゼ？」

不安そうに辺りを見渡す道子の腕を取ると、アシュレイは再び赤子のように抱き上げた。

「ちよつと！」

『次は貴方です。私もいささか疲れしました。早く行きましょう』

宮殿に向う途中、王の帰還を出迎えるように眷族達の方々から集まって来た。小さな妖精エルフ、麗しい古代精霊ディタニア、聖獣達の歓迎を受けて、アシュレイは鷹揚に片手を挙げた。しかし道子が真っ青になっている様を見て、思わず周囲に牽制するような覇気を解放した。近寄り難いびりびりとした覇気を感じて、周囲の眷属達はぴたりを足を止めた。

『私の眷属達です。怖がる事はありません』

恐々と周囲を見渡す道子の頬を撫でると、道子はぴくりと反応してアシュレイを見つめた。ロイヤル・ブルーの瞳と黒い瞳と視線がぶつかる。精霊の習性で、アシュレイは道子の心を読み取るうとした。

(・・・怖い)

道子とはにかく怖かった。不安定な足元も、消えてしまった口ゼの行方も、空を埋め尽くすような異形の群れも、夢か現か区別のない状況の何もかもが怖かった。

『・・・どうすれば安心するのでしょうかね』

哀れになる程怯えている道子の心を読んで、アシュレイの中からしくもない人間を案じる気持ちが芽生えた。

道子が震えている間にアシュレイは空に浮かぶ宮殿の、幾何学的な紋様の中央庭園に舞い降りた。フォーマル・サンクン・ガーデン腕に抱いた道子をそつと下ろすと、テイタニア跪いて出迎える古代精霊達を見渡した。

ハロレアン『地上の幼い眷属を保護しました。先程母なる世界樹の御許に送ったので、もう安心して良いでしょう。忌々しいガ口の人間共も、もはやこれまで。私はもう地上を守護する気はありません。』

さて・・・彼女ですが、幼い眷属の抛り所です。遙か遠い地からやって来た人の子ですが、ガ口とは無縁ですから丁重にもてなして下さい』

平伏する精霊達は一言も発せず、アシュレイの言葉に耳を傾けていた。アシュレイは隣で萎縮して小さくなっている道子の背を優しく押した。

『シエヘラザード』

名を呼ばれて、水色の長髪の美しい精霊が顔を上げた。

『彼女の名は道子です。さぞ疲れているでしょうから、休ませてあげてください』

『我が君のおっしゃる通りに』

アシュレイは優雅な仕草で歩み寄る精霊に道子を引き合わせた。道子は困惑してシェヘラザードとアシュレイを見比べた。

『恐れる事はありません。彼は四精霊の一つ、水を統べるウィンデイーネの公爵です。穏やかな気性ですから、良く面倒を見てくれるでしょう』

『トウコ様、ウィンデイーネの眷属、シェヘラザードと申します。どうぞ宜しくお願い致します』

「あの・・・」

『そうでした。道子は大陸の言葉を解しません。思念は通じますが、過ぎると不安を与えるようなので、あまり無理はしないように』

『かしこまりました』

シェヘラザードは優しく微笑んで道子の手を取った。道子はなすがままだったが、回廊へ促すように手を引かれると、慌てて手を振り払った。不思議そうにこちらを見つめるアシュレイの腕を掴むと、ロイヤル・ブルーの瞳を見つめて困ったように首を左右に振った。

「アシュレイと一緒にいてはダメですか？」

『トウコ様？』

言葉が通じないと分かっている、つい日本語で話しかけてしまう。道子がかんがしい気持ちでアシュレイを見つめていると、やっぱり腕が外された。そしてがっかりする道子の手をもう一度シェヘラザードに取らせた。

『道子、安心してついて行きなさい』

思念による交信は嫌がられた経緯があるので躊躇われたが、アシュレイは道子を安心させる為に幾つかの情報を映像で送った。

(ま、また・・・！)

道子は顔を顰めたが、大人しくアシュレイからの映像によるメッセージを受け取った。美しい宮殿内の様子や、豪華な食卓、湯浴みの映像が脳裏に浮かび、最後にシェヘラザードの優しい佇まいが見えた。・・・察するに、彼が道子の世話をしてくれようとしているのだらう。それでも道子はアシュレイの傍を離れる事にどうしても不安を感じてしまった。

シェヘラザードの手をそっと放して、今度は明確な意思を持ってアシュレイの腕を掴んだ。いっそ感情が伝わればいいと、ロイヤル・ブルーの瞳をじっと見つめた。

(もうこれ以上、トンデモな展開はイヤ。貴方がロゼ以外の人について行くのもイヤ)

『・・・・・・・・』

アシュレイは道子のはっきりとした意思を読み取り、しばし沈黙

した。説得することも出来るだろうが、「まあいいか」という苦笑じみた気持ちが沸き起こり、自然と笑みが浮かんだ。ほんの少し口角を上げる程度の変化だったが、シェヘラザードは驚いたように瞳目した。そんな周囲の様子には気づかず、アシユレイは道子の手を取った。

「……ロゼにも頼まれた事ですしね。貴方の面倒は私が見る事にしましょう」

こうして、道子の精霊界ハーレイスファイアでの生活は幕を開けた。

「・・・ん？」

道子は眩しさに耐えられずそつと目を開いた。目覚まし時計を探して右手をさまよわせると、驚く程滑らかな感触が手に伝わる。

（なんだこれ・・・）

ゆっくり上半身を起こしてこぼれる前髪をかきあげると、袖についた豪華なフリルが視界に映ってぎょつとした。慌ててシーツをめぐってみると見た事もないナイトドレスを着ていた。

「え・・・」

シーツをめくった体勢のまま固まった。ぎこちなく左右を見渡すと、見た事もない広々とした室内が視界に映る。室内にはキヤメルカラーで統一された女性向きのアンティークの調度品が置かれており、テラスに続く硝子扉は少しだけ開いていた。

「え・・・？」

訳が分からず更に辺りを見渡し、天上を見上げてみると繊細なレースの垂れ下がる天蓋が目に入った。アーチを描く天井は硝子張り、陽の光に煌く新緑の梢が揺れていた。

（何処、ここ・・・）

キングサイズのベッドを這って降りると、備え付けたように置か

れている羽毛のルームシューズに足を通した。道子はその極楽のような肌触りに状況を忘れて身悶えた。

「ひゃあゝゝ気持ちいいー」

道子のもこもこふわふわした感触の部屋着やスリッパをこよなく愛していた。足元の感触に癒されながら、見慣れない部屋をゆっくり見て回った。

テラスの外は柔らかかそうな芝生で一面敷き詰められていた。四方を囲むレンガの壁面にはロマンティックな色合いのクレマチスやクライミング・ローズが絡まっている。この部屋の持ち主だけが楽しめる素敵なプライベート・ガーデンだ。

まるで不思議の国に迷い込んだアリスになった気分で、道子はルーム・シューズを脱いでテラスの外に出た。柔らかかそうな芝生の感触が心地よい。

（すつごく素敵だけど・・・ここ何処だっけ。昨日、昨日・・・？  
あ、なんか嫌な予感）

道子は両腕で体を抱きしめて、襲い来る衝撃に耐えた。

「夢じゃなかったんだ！」

天使のように愛らしいロザリアと、彫刻のように美しい青年アシユレイに連れられてここへやって来た事を鮮明に思い出した。最後にこの部屋に連れて来られて、柔らかかそうなベッドに惹かれて横になっただけのまま・・・朝になってしまったのだ。

寝起きでぼんやりとしていた思考が一瞬で冷えた。

（いやいやいや……。やっぱり夢でしょ。人間が空飛ぶラピュタな世界とか、どんなハリー・ポッターだよ）

道子は室内に戻ると昨夜身につけていたコートやバッグを探し始めた。これが現実だと言うのなら、昨日身につけていた衣類があるはずだ。

ベッドに戻ってシーツやクッションをめくり、すぐ傍のチェストを開けた後、きよろきよろしながらソファーに移動した。整頓された室内には道子の私物らしきものは見当たらないようだった。目に留まるところに見つからず、しばし部屋の真ん中で立ち尽くした。

やがて室内の扉の存在に気がつく、期待を込めてノブを回した。

「わぁ……。素敵」

広々としたドレッサールームの壁面は、何でも収納出来そうなクロゼットがずらりと並んでいた。しかも陳列用のショーケースには、思わずはしゃぎたくなるようなお洒落でかわいい靴やバッグ達が並べられている。

「これは夢でも嬉しいわぁ」

道子は目的を忘れてケースを一つ一つ眺めた。どれも非常に精巧な作りで、アンティークを思わせるデザインが可愛らしい。特にクロスに編み上げるブーツが気に入る、思わずドレッサーの前でいそいそと履き替えてしまった。

「って、違うし。コート探さない」と

道子は自分でツツコミを入れると、目的のコートを探してクロ-

ゼットを開け始めた。期待通り、クローゼットの中も様々な衣装でいっぱいだった。はしゃぎ出しそうになる心を抑えてコート探しに集中していると、三つ目のクローゼットで目的のバッグと一緒にコートを見つけた。

見慣れたコートとバッグを手にとると、急に現実感が戻って来た。これが手元にあると言う事は、やはり道子は昨日此处へ来たのだ。アシュレイにこの部屋に案内されて、恭しく跪くメイドにコートとマフラーを渡して・・・。

道子はバッグの中から携帯を出してパチンと開いた。案の定、圏外になっている。未読のメールに気付いて開いてみると、昨日同僚に送った遅刻の連絡に対する返信が届いていた。

（え！？）

慌ててメールを確認してみると、受信日時が「2011年2月10日8:40」と表示されていた。道子がメールを送信したのは「2011年2月10日7:55」で、この直後にあの摩訶不思議な庭園に着いたのだ。同僚のメールを受信した時は既に此处へ来たことになる。

ということは、あの庭園ガーデンなら電波が届くのかもしれない。解決の糸口が見えた気がして、道子は目を輝かせた。

充電95%

携帯の充電ケーブルは常に携帯しているが、肝心の供給口が無ければ意味がない。少しでも消耗を減らす為に携帯の電源を落とす事にした。それにしてもメールをくれた同僚には盛大な喝采を送りたい。此处が電波の届く範囲にあるのなら、公共機関に連絡も出来る。脳みそがねじれそうな未知との遭遇オンパレードだったが、「地球

は広がった……」の一言でまとめられるかもしれない。

しかしあの庭園<sup>ガーデン</sup>にはどうやって行けばいいのだろう。

道子は此処に來た経緯をさっぱり理解していなかった。アシュレイに抱っこされて、宙に浮いた足元に氣を取られているうちに、ぽんぽん景色が変わって行つたのだ。最初は庭園<sup>ガーデン</sup>、その次は海の上、それから森に出て、最後はアシュレイが飛んで此処まで運んで来てくれたのだ。

（そうだよ。ここ空に浮いてるんだよね？ 私一人じゃ絶対降りれないじゃん）

とにかくアシュレイに相談してみようと、道子はクローゼットを漁つて昨日の服に着替えた。ホテルのようにサービスの行き届いたバスルームは最高だった。時間があれば後で猫足のバスタブでゆっくりしたいものだ。

手際よくメイクを済ませると、「アシュレイを探しに行きます」とチェストの上にメモを残して扉を開いた。よく考えたら、文字も伝わらないかもしれないと思いつたが、気にしない事にした。

「……お早うございまーす」

扉から顔だけ出して左右を見渡しても、人影は見当たらなかった。道子のいた部屋は吹き抜けの回廊に面しており、回廊は天まで延びそうな大樹をコの字で囲むように続いていた。

「大きい……」

道子はしみじみと手をかざして空を見上げた。豊かな新緑を揺らす、生命力に満ちた大樹はこの上なく美しかった。きらきらとダイ

ヤモンド・ダストのような煌きが大樹の周りに充満しており、美しい大樹をいつそう神秘的に見せていた。

（何か果てしなく地球外にいるような気がするんだけど……いやいやいや、同僚のメールを信じよう。こんな所だけど、電波の届く地球だから。この間チリの炭鉱労働者達だってミラクルな生還を果たしたんだ。私だって帰れる）

道子は大樹に圧倒されながらも、気を引き締めて回廊を歩き出した。

しかし回廊は広く、しかも軽く数十階はあるように見える。しらみ潰しに歩いて行っても会える可能性は少ないだろう。誰かにアシユレイの居場所を聞けないだろうか。

道子はしばらく人影を探しながら回廊を真っ直ぐ進んでいたが、やがて疲れて立ち止まった。

「無理。アシユレイ何処」

道子は投げやりに呟くと膝に手をついて腰を落とした。ヒールを履いているので足が疲れてきた。動き回る前に一度部屋に戻ろうかと考え直していると、視界に影が落ちた。

『呼びました?』

道子はぎょつとして顔を上げた。

相変わらず麗しい顔立ちの皇帝がそこにいた。涼やかなロイヤル・ブルーの瞳と視線がぶつかり、道子は思わず声を上げた。

「アシユレイ!」

「ちょうど良かった。探していたんです」

顔を輝かせる道子に釣られてアシュレイは思わず微笑んだ。

『よく休めましたか？』

アシュレイの穏やかな口調から、何となく朝の挨拶をされているような気がして、道子はぺこりとお辞儀した。

「素敵なお部屋に泊めて頂いて、ありがとうございました。おかげで疲れが取れました」

アシュレイは急に頭を下げられて驚いた。何かと思い道子の心を読むと、どうやら与えた客室に満足しているらしいと分かり、謝礼を受け止めるように微笑んだ。

『気に入って頂けたようですね。何しろ人間を招くのは初めての事ですから、勝手が分からず……。思いつく限りの配慮はしたつもりでしたが、衣装棚はお気に召しませんでしたか？』

アシュレイは顎に手を当てながら道子の全身を眺めた。昨日は丈の長いコートを始終羽織っていたので気付かなかったが、今日は随分と変わった格好をしている。

タートルネックのニットセーターにラインストーンをあしらったタイトなデニムは道子のいつものスタイルだが、アシュレイの目には一風変わった格好に映った。古代精霊テイタニアの女性は裾の長いドレスを

身につける事が多く、道子のように脚線のはっきりする衣装を身につける事は少ないのだ。

アシュレイの視線がつま先から頭まで這うのを感じて、道子はいもじと居心地悪そうに身じろいだ。

「どこがおかしいですか？」

不安になり身をよじって腕や足を見ていると、アシュレイの手がずっと伸びて道子の首周りに触れた。

「何!？」

『伸びる・・・』

アシュレイは感心したように、道子の首周りのニット生地を摘んだ。

「何?何?」

道子は困惑した表情でアシュレイを見つめた。青年は興味深そうに道子のセーターを引っ張っている。

（この人顔に似合わず奇行が激しくない？）

道子の困惑を悟ったのか、アシュレイはようやく手を離れた。手が離れて思わず道子は首元を押さえてぱっと飛びのいた。心なし顔が赤く染まっている。

『失礼。驚かせましたか？ 面白い感触でしたのでつい・・・。ところで、先程名を呼ばれたのですが、どうかしましたか?』

アシュレイの問いたげな瞳を見て、道子はふうと一息ついてバッグから携帯を取り出した。

「これ携帯・・・、と言っても分からないだろうけど、電波さえ入れば何処にいても連絡出来る便利な端末なんです。昨日私達が初めて会った所のなら、電波が入るかもしれないんです」

『何ですか？』

「私元いた場所に帰りたいです。携帯さえ繋がれば、此処がどんな僻地へきちでも救助を呼ぶ事が出来ると思うんです。だから昨日の場所に連れて行ってくれませんか？」

道子は心を読めと言わんばかりに、アシュレイの手を取って自分の額にくっつけた。

『・・・道子？ 何をしているのですか？』

アシュレイには道子の意図が分からなかった。額に置かれた手をどうして良いか分からず、何となく撫でるように目じりと前髪に触れてみた。道子は驚いたように飛び退いた。

「何っ!？」

『・・・・・・・・』

落ち着きのない道子の様子が不思議で、図らずもアシュレイは道子の心を読んだ。混乱した感情が本来の伝えたい情報をばかしてしまっているが、何となく庭園ガーデンに行きたいという意味は伝わった。

『・・・ああ、外を歩いてみたいのですか？』

アシュレイは宮殿の外を指して首を傾げた。道子は意思が通じたと喜び、大きく何度も頷いた。

「そうです！ 連れて行ってくれますか！？」

両手を胸の前で組んで懇願する道子の様子に、アシュレイはくすりと微笑んだ。

（わ……。今のくらつときた。笑顔すっごい素敵）

アシュレイは胸を押さえている道子の隣に並ぶと、先導するように歩き出した。

『そんなに必死にならなくても、フォーマル・サンクン・ガーデン中央庭園に降りるくらいなら誰も止めたりしませんよ。何か分からない事があれば、今度から女官を呼んでください。そういえば昨日は説明しませんでしたね。ベルの使い方は分かりますか？』

アシュレイが何を言っているのかさっぱり分からなかったが、道子は愛想よくにこにこしていた。しかし脳裏に映像が映ると「またか！」と呟いて盛大に顔を顰めた。コロコロ変わる道子の表情に、アシュレイは可笑しそうに笑った。

「ああ・・・呼び鈴みたいなものか。なるほど」

道子はアシュレイによって、映像からベルの使い方や、水周りの使い方を学んだ。道子の知っているエネルギーとは全く異なるよう

だが、宮殿内の設備は非常に洗練されていた。例えばあのお姫様仕様の天蓋付ベッドが、必要とあればドーム状の医療ポッドに変わるのだ。

映像が途切れると道子はほっとして息を吐いた。アシュレイはその様子をじっと見つめて、氣遣うように背を撫でてくれた。

『無理をさせましたか？ 思念を使う際はなるべく手短に済ませますね』

「大丈夫です、ありがとう」

道子は安心させるように、背を撫でてくれる腕をぽんぽんと叩いた。そんな親しみに溢れた仕草を普段された事のないアシュレイは、本人も無意識だが少し照れくさそうに視線を逸らした。

「アシュレイ、ロゼは何処にいるんですか？」

ロザリアの名を聞かれてアシュレイはすつと大樹を指した。

「え？」

道子はアシュレイの指と大樹を交互に眺めて、戸惑ったように首を傾げた。

『母なる世界樹アンフルラージュの元で眠っています。魔力が戻れば貴方かたどの前で象る事も出来るようになるでしょう。そう長くはかかりません』

「え？ 何ですか？」

道子は少し迷った末、再びアシュレイの手を取って額にくっつけ

た。この行為は精霊にとって何ら意味はないのだが、道子は触れ合えば交信しやすくなると思い込んでいた。

『道子?・・・ああ、なるほど。思念で交信したいのですね。さつきもそういう意図で・・・』

アシュレイは納得したように頷くと、くすりと笑って道子のおでこを指で優しくつついた。

「アシュレイって結構笑うんですね。もっとクールな人かと思っていました。あ、今の方がずっと良いですよ。笑顔、素敵ですねー・・・」

アシュレイの麗しい顔に道子がぼーっとなっていると、急に脳裏に映像が浮かびあがりひっくり返りそうになった。

「びっくりしたー！ 心臓に悪いから、いきなり見せないで」

もつと文句を言いたかったが、ロザリアの映像が脳裏に浮かんだので口を噤んで瞳を閉じた。その方が疲れない事に気付いたのだ。

ロザリアの姿が透けるように大樹に消えた後、再び大樹の中から明るい笑顔でロザリアが出て来た。その光景を繰り返し見ているうちに何となく意味が分かった。この大きな樹木の中でロザリアは今休んでいるのだろう。そして目が覚めれば、元気な姿で大樹の外に出て来るのだ。

「・・・ひよつとしたらもう会えないかもしれないけど」

道子はぼつりと呟いた。携帯で救助を呼ぶ事が出来れば、ロザリアの目覚めを待たずに帰ってしまうかもしれない。一瞬の間に、救

助隊員に助けられて未知の世界から生還を果たし、世界中のメディアに向って「ありがとうございます」と涙する自分を連想した。そして平凡な生活に戻った後は、この魅力的な場所を求める権力者達に連れられて、彼らとの橋渡し役を頼まれるのだ・・・と、妄想したところで我に返った。

今までずっと真っ直ぐ回廊を歩いて来たが、ふいにアシュレイは横を向いて壁に手を当てた。そしてそのまま吸い込まれるように消えたのだ。

「へっ!？」

道子は呆然とアシュレイの消えた壁面を見つめた。壁面には金色の不思議な紋様が描かれている。恐る恐る手を伸ばすと、壁からぬつと手が突き出て道子の腕を掴んだ。

「あわあわああああ!!」

道子は絶叫と共に、壁の中に消えた。

「何ーっ!？」

『道子、落ち着いてください』

道子は恐怖に硬直したが、冷静なアシュレイの声に恐々と目を開けてみた。目の前にはアシュレイが立っている。ほっとして左右を見渡すと、高い壁に囲まれた通路にいる事が分かった。

「わー・・・隠し通路？」

道子は興味深そうに、たった今突き抜けて来た壁に触れた。しかし予想に反して壁の感触は本物だった。

「あれ？」

首を傾げる道子の背後から、アシュレイはすっと腕を伸ばすと壁に触れた。その腕が壁を貫通する様を見て、道子は驚きの声を上げた。

「え、何で？」

『・・・眷属にしか進入を許さない仕掛けになっています。人の身である道子を通る為には、精霊の手を借りるか、守護石の類を身につけないといけません。道子には必需品になりそうですね。後程用意させましょう』

道子は説明を求めてアシュレイの手を取ると額にくっつけた。け

れどやんわりと解かれて、あとでね、と言うように額をつつかれたので大人しく頷いて見せた。あまり尋ね過ぎても煩いかもれない。その後も幾度か金模様の描かれた壁を潜り抜けた。通り抜ける度にアシュレイに腕を掴まれるので、必要なプロセスなのだろうと道子はやがて理解した。

（何かベネチアの小路みたいで楽しい〜）

通路はかなり複雑な作りになっており、道子は途中で道順を覚える事を放棄していた。壁を通り抜ける感覚にも慣れてきて、紋様のある壁面に近づくと自分からアシュレイの手を取った。ちよつとした冒険をしているようで次第に気分が高揚して来た。

『もうすぐですよ。今回は歩いて案内しましたが、石を使えば道標に転移出来るので、簡単に来れますよ』

道子は首を傾げたが、アシュレイがそれ以上言わないので、気にせず前を向いて歩き出した。また紋様のある壁前に来ると、アシュレイの手を取って足を踏み入れた。

「おお！」

道子は慣れた動作で壁を突き抜けると、目の前に広がる光景に思わず感嘆の声を上げた。其処には整然とした美しいウォーター・ガーデンが広がっていた。刈り込まれた針葉樹が左右に続いており、中央には水路が敷かれている。煌く水面で小さな妖精や泉の妖精達が踊る様は、この世のものとは思えない程幻想的だった。煌く光の粒子のように小さい者もいれば、人魚のような尾ひれを持つ等身大の妖精もいる。彼等はアシュレイに忠誠を誓うように優雅にお辞儀をして見せた。

「信じられない……。まるでお伽の国の世界だよ」

『少し歩いてみますか？』

アシュレイに促されて、道子は呆然としながら歩き出した。

『この水路はぐるつと宮殿を囲んでいるんです。庭園ガーデンの区分けになるようにも設計されていて、中央庭園フォーマル・サンクン・ガーデンにも通じているんですよ。見た方が早いですね……。』

アシュレイは道子に向き直ると、さつと膝下に腕を差し入れて赤子のように持ち上げた。

「ま、また！」

道子は身をよじって抵抗しようとしたが、あっという間に上空に舞い上がるので大人しくせざるをえなかった。アシュレイは道子を抱えたまま宮殿の上空で停滞した。

『水路が宮殿を囲んでいるのが分かりますか？』

アシュレイは指で水路をなぞって見せた。道子はその意図に気付くと大きく頷いた。

「宮殿の外周を囲んでいるんですね。それにしても宮殿めちやくちや広いですね……。なんかデイズニーランドみたい」

『ウォーター・ガーデン  
水上庭園の内側なら、自由に歩いて構いません。何処にいても安全ですから。ですが、此处から外へ出る時は気をつけて下さい。』

エニテル  
魔力を持たない人の身である道子には危険が多い』

道子は水路の外側に手を伸ばして、問いかけるように首を傾げた。  
アシュレイが首を横に振ると、がっかりしたように手を下ろした。

「外には行けないの？ でも昨日の庭園ガーデンに連れて行って欲しいんだけど」

もう一度外を指すと、アシュレイは言い聞かせるように首を横に振った。道子は諦めきれずに目いっぱい手を伸ばして外を指した。

『精霊界ハイレイスファイアに慣れないうちは止めておいた方がいいでしょう。そのうち機会を設けますから、暫くは宮殿内で我慢してください』

アシュレイは宥めるように道子の手を取ると、優しく手の甲を撫でた。それでも不安そうにしている道子を見かねて、そっと額に手を当てた。思念を使う合図だ。道子が頷いたのを見て、怖がらせない程度に広大な精霊界ハイレイスファイアの一部を見せる事にした。

道子は瞳を閉じてアシュレイから送られる映像に集中した。

宮殿を囲む水路は最終的に大陸の外へ滝となって流れ落ちていた。あまりの落差に水滴は霧散して大気に溶けていた。まるでベネズエラのエンジェルフォールのようだ。空に浮かぶ宮殿の下には深い森が広がっていた。森の上を巨大な飛竜が遊泳して行く映像に、道子は飛び上がる程驚いた。

「ドラゴンいるの！？」

『宮殿の周囲には風を操るシルフィードの眷属が大勢います。彼等は森の秩序を監視しています。中でも輝石メタリシアを身につけている精霊は、

各ブロックの司令塔を勤めています』

映像の中で、ローズ・クォーツのはめ込まれた装飾品を身につけた飛竜が、木々をなぎ倒して暴れている影のような生き物を鋭い爪で薙ぎ払った。相手は恐ろしい怪力で暴れていたにも関わらず、飛竜の一薙ぎで跡形もなく霧散した。またある場面では、真つ赤に塗りこめた瞳を持つ恐ろしい形相の小人を、頭からバリバリと食べていた。

あまりぞつとしない光景だ。本物のホラー映画を見ているようで怖くなり、道子は思わず瞳を開けた。

『・・・怖がらせてしまいましたか？　ですが輝石の番人は道子を襲ったりしませんから、安心して下さい』  
メタリア

「・・・外は危険だって事ですか？」

道子が考え込むように俯くと、アシュレイは安心させるように前髪を撫でた。

『宮殿の中にいれば安全ですよ。・・・怖いのは、世界樹の輪廻から外れた一部の精霊だけです。彼等には私の支配が完全には及ばないので、場合によっては跡形もなく消すしかないのです。もう少し見てみますか？』  
アンフルラージュ

アシュレイが再び手を伸ばすと道子はびくりと震えた。

『・・・やめておきましょうか』

「もういいです。見せないで。・・・でも私、昨日の庭園にどうしても行きたいんです。何とかありませんか？　昨日だって私を抱い

ガーデン

てあの場所から此処まで連れて来てくれたじゃないですか」

道子は懇願するようにアシュレイのロイヤル・ブルーの瞳を見つめた。アシュレイは道子の瞳をじつと覗き込んだ。漆黒と思っていた瞳は、間近で見ると陽に透けて柔らかな焦げ茶色に見える。道子は土を操るノーム達と気が合いそうだなと思った。

心を読んでみると、昨日降りた庭園<sup>ガーデン</sup>を渴望するような感情が見えた。

『ひよつとして、其処へ行きたいのですか？』

「お願いします。家に帰りたいんです。昨日の場所に連れて行ってくれませんか？」

『外に行きたいのではなくて、其処に行きたいのですか？』

アシュレイは道子の額に触れて、初めて道子と出会った庭園<sup>ガーデン</sup>の様子を問いかけるように思念で送った。道子は激しく頷いて、「お願い」と言うように両手を組み合わせた。

『・・・？ 何故其処へ行きたいのですか？』

アシュレイは思案するように顎を手で撫でた。なるべく負担をかけないよう、慎重に道子の心を読むと、道子の日常の様子が断片的に伝わってきた。どうやらかつての日常が恋しいようだ。しかし、道子がいなくなればロザリアが悲しむだろう・・・。アシュレイは試すように、ロザリアの笑顔を道子に思念で見せた。道子は悲しそうに、少し気まずそうに首を横に振った。

『一応、ロザリアから貴方の面倒を任されていますから・・・。少

なくともロザリアが目を覚ますまでは道子を故郷に帰すわけには行  
きません』

アシユレイが申し訳なさそうに首を振るのを見て、道子は深いた  
め息をついた。

「ロゼの事は確かに気になるけど、ごめんなさい。私にも都合があるんです」

『・・・・・・・・』

「せめて携帯で連絡出来るかだけでも確かめさせてもらえませんか？ 充電があるうちに試しておきたいんです」

道子は懇願するような眼差しでアシュレイを見つめた。どうにか聞き入れてくれないものかと思案していると、アシュレイはゆつくり水上庭園に下降し始めた。  
ウォーター・ガーデン

「ま、待つてください。お願い、連れて行ってください」

『すみません、そろそろ仕事に戻らなければ……。急に抜け出して来たものですから』

「アシュレイ！」

とうとう地上に足が着くと、道子は掴みかかる勢いでアシュレイに詰め寄った。しかし子供に接するように、よしよしと頭を撫でられて絶句してしまう。

「撫でないでください」

道子は撫でられるのが嫌で首を逸らしたのだが、アシュレイにはいまいち伝わっていないのか、大きな手が再び道子の髪に触れてき

た。

『道子？　いろいろ目にして疲れましたか？』

「撫でないでくださいってば」

『ところでお腹は空いていませんか？　宮殿に来てから何も口にしていけないでしょう』

アシュレイはお腹に手を当てて首を傾げた。道子はその仕草を見て直ぐにピンときた。

「食事の事ですか？　すいてます、すいてます。喉も渴きました。お水が欲しい」

手でコップを掴んだふりをして唇に当てると、アシュレイは納得したように頷いた。すっと手を伸ばして道子の手を掴むと、次の瞬間には景色ががらりと変わっていた。

一瞬で景色が明るいグレート・ホールの室内に変わり、道子は目を丸くした。

「ええ！？」

アシュレイの超人じみた瞬間移動にも大分慣れて来たが、今のは不意打ち過ぎてかなり驚いた。手足から力が抜けて崩れ落ちそうになると、すかさずアシュレイが支えてくれた。

『大丈夫ですか？』

「あ、すみません。急に場所が変わったからびっくりしちゃって」

アシュレイの手を借りて体制を整えると、道子は改めて室内を見渡した。ざっと数百人は収容出来そうな大きなホールだ。優美な長テーブルが等間隔で列に並んでいる。室内はがらんとしていたが、直ぐに宮殿に仕える精霊達が姿を現した。

『我が君、いかがされましたか？』

精霊達はアシュレイから少し離れたところで跪いて頭を垂れた。

『道子に何か食事を用意してあげてください。人間用の食事ですから、食材には十分気をつけるように。僅かな毒性でも人の身では生死を分けかねません』

『かしこまりました』

『道子、直ぐに食事を用意させます。どうぞゆっくりしていただきます。私はそろそろ仕事に戻らないといけないので、これで失礼します』

「アシュレイ？」

道子は引き返そうとするアシュレイを慌てて呼び止めた。こんな状況で放って行かれてもどうして良いか分からない。道子の不安な気持ちを察したのか、アシュレイは安心させるように頭を撫でた。

『また後ほど様子を見に来ます。それまで庭園ガーデンでも散歩しながら、のんびり過ごして下さい』

道子は身をよじって頭を撫でてくる手から逃れると、少し考えて

から手のひらをアシュレイのお腹に当てて首を傾げて見せた。貴方はお腹はすいていないのか、というジェスチャーのつもりだ。アシュレイはクスリと綺麗な顔で笑うと、からかうように道子の額をついた。

『私は平気です。天下始祖精霊ケブラーホーンですから、原動力は全て世界樹アンフルラージュから吸収出来るんですよ。

人間は毎日養分を摂取するんですよ。我々には人間の正確な摂取間隔は分からないので、遠慮せずに空腹になればいつでも宮殿の者に伝えてください』

「何ですか？」

道子は言葉の意味が分からず首を傾げたが、アシュレイは淡く微笑むだけで、今度こそ姿を消してしまった。

道子がどうしようかと背後を振り返ると、相変わらず精霊達は跪いたままだった。

「えーと……」

『……』

道子は居心地悪そうに彼等を見渡した。アシュレイがいなくなった後も、彼等は無言で頭を上げる気配もなかった。

(……え、何、どうすりゃいいの……。いつか。好きにしよう。お腹すいたし)

「あの、頭を上げて下さい」

道子が一步近づくと、彼等は一步後退した。

「・・・・・・・・」

『・・・・・・・・』

「え？ 何で離れるの？」

道子がまた一步近づくと、彼等はまた一步後退した。

「えいつ」

道子は勢いよく距離を詰めると、一番手前にいた青年の肩を叩いた。ようやく青年は顔を上げて、淡いグリーンの瞳に道子の姿を映した。間近で麗しい顔立ちを見つめて、道子は動揺したようにはつと離れた。

「その、ごめんなさい。あの、立ってくださいませんか？ お腹がすいて・・・、食事を分けて欲しいのですが」

青年はじつと道子を見つめている。周りにいる精霊もちらほら顔を上げ始めた。それでもまだ跪いたままにいる彼等を見て、道子は勇気を振り絞って手前の青年の手を取った。

「立ってください」

青年は道子にされるがまま、腕を引かれてゆっくり立ち上がった。道子はほっとして、周りの精霊達にも声を掛けた。

「皆さん、立ってください。食事を分けて欲しいんです。お願いし

ます」

道子はお腹を撫でた後、食事をとる仕草をして見せた。すると彼等は急にときばきと動き始めた。美しい女性が道子の手を引いて、テーブルの上座に案内してくれた。また別の女性が道子の前にグラスを置いて水を注いでくれた。道子は顔を輝かせて、あっという間にグラスを空にした。

「美味しい〜〜〜！ ただの水とは思えない！」

目を丸くしている道子を見て、女性はにこつと微笑むと、またグラスに水を注いでくれた。思っていた以上に喉が渴いていたようで、道子はあっという間に三杯飲み干した。

美しい精霊達は甲斐甲斐しく道子の世話を焼いてくれた。瑞々しい果物や、狐色の香草のスープ、香ばしい焼きたてのパンを次々に運んで来てくれる。何の肉が分からなかったが、薄い輪切りにしたローストハムは思わず唸る程美味しかった。

「美味しい……。皆さん、本当にありがとう」

道子が感動して涙目になりながらお礼を言うと、彼等は瞳をぱちくりと瞬かせて、優しく微笑んでくれた。皆物静かで無口だが冷たい印象はなかった。彼等が傍にいと、穏やかな空気や暖かさに包まれているような気分になるのだ。

（言葉は通じないけど、皆親切だな……。ていうかアシュレイが凄いのかな。何者なんだろう……。）

いたせりつくせりの待遇は、アシュレイのおかげなのだろうという事は道子にも分かっていた。初めて此処へ来た時からアシュレイ

の立場は一目瞭然だった。もしかしたらこの広大な宮殿の主なのかもしれない。

（・・・状況はさっぱり分からないけど、アシュレイの世話になりっぱなしだな。此処での生活が長くなるようなら、いろいろ考えないといけないのかな・・・。うーん。止めよう、今は考えない）

道子が食事を終えてぼーっとしていると、傍にいた精霊が紅茶を淹れてくれた。ハーブティーだろうか。優しい狐色をしている。

「ありがとうございます」

道子がつこり笑うと、相手も微笑み返してくれた。言葉はないけれど、好意的な雰囲気伝わって来る。道子は気持ちをほぐす様に暖かいカップに口をつけた。

道子が紅茶を飲みながら寛いでいると、昨日顔を合わせた精霊が訪ねて来た。

（えーと・・・、名前なんだっけ）

『ごきげんよう、道子様。先日我が君よりご紹介頂いた、シエヘラザードです』

シエヘラザードが優雅に膝を折って挨拶すると、道子も席を立ててお辞儀を返した。

「シエヘラザードさん。こんにちは」

シエヘラザードは深く頭を下げる道子を見て、不思議そうに瞳を瞬いたが直ぐに優しくそんな笑みを浮かべた。

『こちらでお食事を取られていると聞きましたが、もうお済みになりましたか？』

道子にはここにこしながら首を傾げて、観察するようにシエヘラザードの全身を眺めた。昨日はあまり観察する余裕がなかったが、今日は幾らか余裕をもって接する事が出来る。此処へ来てから美男美女にしか会っていないが、中でもシエヘラザードは特別美しい容姿をしていた。ドレスシーな白地のロングコートもよく似合っている。回りの精霊達も煌びやかな格好をしているが、シエヘラザードは更に肩から背中にかけてマントをつけていた。装飾の類も他の者より

重厚に見える。

『道子様、我が君から庭園ガーデンをご案内するよう仕りました。良ければ外をご覧になりますか？』

道子は庭園ガーデンという言葉にぴくりと反応した。

「外に連れて行ってくれるんですか？　ぜひお願いします」

乗り気な様子の道子を見て、シェヘラザードは微笑を浮かべるとそつと手を差し伸べた。道子がおずおずと手を預けると、恭しくテラスへと連れ出した。美しい異性に傳かれて、道子の胸は優越感に高揚した。

（いいわー・・・、このシチュエーション。癖になりそう）

『道子様、何処を見て回りたいか希望はありますか？』

「何ですか？」

道子が首を傾げると、シェヘラザードは思案するように沈黙した。やがて宙に円を描くように手をかざすと、薄い膜の水鏡が現れた。

「えー！？　何これー！　すごい」

『水面鏡に宮殿の様子を映しています。行きたい場所があれば教えてください』

「これってひょっとして、此処の映像ですか？」

道子は興奮したように水面鏡を指した。シエヘラザードは問いかけるように水面鏡を指すと、映し出す光景を切り替えて行った。

「このお城の外の様子は見れませんか？」

道子が問いかけると、シエヘラザードは不思議そうに首を傾げた。道子の心が何かを期待して明るく輝いているのが感じられる。何を期待しているのか心を読むと、ハロレアン ガーデン地上の庭園が見えてきた。

ハロレアン『地上に・・・行きたいのですか？』

シエヘラザードは不思議そうに問いかけると、水面鏡に道子の渴望する庭園ガーデンの様子を映し出した。激しく頷く道子を見て、シエヘラザードは申し訳なさそうに首を左右に振った。

ハロレアン『地上は禁忌ですから・・・。申し訳ありませんが、お連れする事は出来ません』

否定的なシエヘラザードの振る舞いを見て、道子はがつくりと肩を落とした。アシュレイにダメと言われるくらいだから、彼よりも立場が下であるだろうシエヘラザードが願いを聞いてくれるか疑問だったのだが、やはりダメなようだ。アシュレイに直接交渉するしかないのだろうか。

気落ちする道子を見て、シエヘラザードは水鏡に美しい水辺の鳥小屋を見せた。喜ばそうとしてくれている気持ちが伝わり、道子は沈んだ気持ちを拭うように微笑んだ。

『此処は昔、我が君の姉君である幽玄の君が、ウォーター・ガーデン水上庭園に建てられたのです。東西から可愛らしい小鳥達を集めて、よくさえず囀りを楽しんでおられました』

「綺麗な所ですね」

お世辞ではなく心からそう呟くと、シエヘラザードはすつと道子に手を差し伸べた。もしかして連れて行ってくれるのだろうか。そう思い手を取った瞬間にはもう着いていた。

「わお。便利だけど、体がなまりそうだな・・・」

『普段は立ち入る事を禁じられているのですが、我が君から宮殿内であれば何処へでもご案内して良いとお許しを頂いているのです。大変珍しい事なんですよ』

シエヘラザードはふふ、と優しい笑みを浮かべた。控えめな笑みだが、声に出して笑ったところを始めて見て、道子は思わず赤くなつて見蕩れていた。神秘的な銀色の瞳が細められて、好ましそうに道子を眺めているのが分かる。グレート・ホールでもそうだったが、美しい彼等が何故ここまで従順で献身的に道子に接してくれるのか分からなかった。

アシユレイは一体、彼等に道子をどんな風に説明したのだろうか？

（せめて言葉を交わせればなあ・・・）

『近くでご覧になりますか？』

「ん？ 何ですか？」

道子が首を傾げると、エスコートするように手を引かれて鳥小屋の近くまで連れて来られた。

「わー・・・綺麗な鳥。目の覚めるようなブルー。幸福の青い鳥みたい」

『あれはキャノメラナです。泣き声も可憐ですよ』

「きゃの・・・？」

『キャノメラナです』

「きゃのめな」

『キャノメラナ』

「きゃのめるな」

シエヘラザードは肯定するように微笑んだ。道子は瞳を輝かせると、口の中で覚えたばかりの単語を繰り返して呟いた。

（・・・言葉が通じるって嬉しいものなんだ）

それから道子は目をひいた小鳥達を指しては、シエヘラザードに名前を尋ねた。同じ事を繰り返す道子に、彼は快く教えてくれた。最初はシエヘラザードに気を遣って此処へ来る事に同意したが、いつの間にかこの穏やかな時間を心から楽しんでいた。可憐な小鳥達の姿や声も道子を慰めてくれる。

『・・・道子様？』

ふと静かになった道子を見ると、シエヘラザードの隣で道子は座ったまま眠そうに船を漕いでいた。

「あ、ごめんなさい……。転寝しちゃった」

『お部屋に戻りますか?』

指しのべられた手を見て道子は首を振った。その手を取れば、室内に連れて行ってくれそうな気がしたが、この穏やかな庭園ガーデンにまだいたかった。

「もう少し此処にいます」

『お部屋には戻らなくてよろしいのですか?』

「私、しばらくここにいても良いですか? 後で誰か迎えに来てくれると嬉しいんですけど」

『・・・・・・・・』

戸惑うように首を傾げるシェヘラザードを見て、道子は大きな手を掴むと額にくっつけた。心を読んで欲しいと思ったのだが、シェヘラザードはぎょっとしたように手を引いた。

「あれ?」

道子が首を傾げると、シェヘラザードも困惑したように首を傾げた。

『すみません、驚いて……。どうされたのですか?』

「あれ、アシュレイにはいつもこれで伝わるんだけど……」

（シェヘラザードさんには通用しないのかな）

『我が君？ 我が君にお会いになりたいのですか？』

「何ですか？」

お互いに意図が読めず首を傾げる。

「・・・・・・・・」

『・・・・・・・・』

無言でしばし見詰め合っていたが、耐え切れないように道子は口元を歪めた。

「あは、言葉が分かればいいんですけどね」

『おや、楽しそうですね』

『我が君』

「アシュレイ」

道子が声のした方を振り向くと、給仕の者を従えたアシュレイが立っていた。

『お茶会をしようと思って、準備させました』

ぽかんとする道子の前で、精霊達の手により瞬く間にお茶会の準備が整って行った。芳しい紅茶の香りと、焼きたてのビスケットの香りが道子の食欲を刺激する。

「わあ美味しそう・・・」

美しい女性が道子の前にそっとカップを置いて、中に熱い紅茶を注いでくれた。硝子細工のティーカップに銀細工のティースプーンが添えてある。可愛らしいデザインに、道子は思わず携帯カメラで撮影したくなった。

ふとアシュレイに遠慮して立ち上がろうとするシェヘラザードに気付いた。さっと裾を掴むと、銀色の瞳と視線がぶつかる。行かなくていいよと言うように首を左右に振ると、窺うようにアシュレイを見つめるので、道子もつられて視線を向ける。アシュレイは無表情でこちらを見つめていた。

（こういう場面でも上下関係とか関係あるのかな・・・）

「・・・最初から其処にいたんだから、わざわざ退かなくても」

道子が戸惑ったように呟くと、アシュレイも構わないと言うように頷いた。シェヘラザードはゆっくりと腰を下ろしたが、少し緊張しているようだ。

「素敵なところですね」

道子は場を和まそうと、その場にいる全員の顔を見渡しながら笑いかけた。アシュレイに視線を戻すと、乾杯するようにカップを持ち上げて見せた。

「いい香りですね。いただきます」

道子が美味しそうに紅茶を口にすると、アシュレイも微かに微笑んでくれた。そうして自身もカップに口をつける。それを見ていたシェハラザードもようやく口をつけた。

紅茶を飲んでいるのは道子とアシュレイ、シェハラザードだけで、他の者達は給仕に徹している。道子はデザートプレートを彼等に勧めてみたが、やんわりと断られてしまった。

「こんなに食べきれません」

お腹いっぱいと言うように、道子は満足そうにお腹をさすって見せた。

『もうお腹いっぱいですか？ 人間の女性は甘いものに目がないと聞きました。お茶会には甘いお菓子がかせないのだと。道子は何が好きですか？』

「もう十分です、食べられません」

道子は手を振って満腹であることをアピールしたが、アシュレイはデザート・プレートを傾けてもう一度同じ言葉を繰り返した。

『これは好きですか？』

「スキ？」

『これは好きですか？』

アシユレイは順番にお菓子を指しながら、同じ言葉を繰り返した。道子は集中して耳を傾けると、語尾が若干上がっている事に気付いた。口調も優しい。恐らく簡単な意味合いのポジティブな言葉なのだろうと想像がついた。

『これは好きですか？』

「スキ」

『これは好きですか？』

「スキ。スキ？」

答えた後に、道子もお菓子を指して同じ言葉を返してみた。アシユレイは少し考えるように沈黙すると、別のプレートにのっている果物を指した。

『私はこれが好きです』

『ワタシ、コ・・・、スキデス』

道子がたどたどしい言葉を返すと、アシユレイもシェヘラザードも嬉しそうに微笑んだ。

『そうそう。上手です』

褒められて道子は嬉しそうに微笑んだ。もつと彼等を驚かせたくなり、先程シエヘラザードから教えてもらった鳥の名を次々と口にしてみせた。

『短時間で随分と言葉を覚えましたね。きっと道子なら直ぐに覚えられますよ』

（えへへ、褒められた気がする）

道子はニコニコしながらアシュレイを見つめた。宝石のようなロイヤル・ブルーの瞳を見つめて、その瞳の色が好きだと伝えたくなったが、何と言えいいのか分からなかった。少し考えてから、鳥小屋で囀る青いキャノメラナを指した。それから自分の目を指してアシュレイの瞳を見つめながら、覚えただけの言葉を口にした。

『アシュレイ……、スキです』

（通じたかな？ ……あれ、変な顔してるな）

『我が君……、恐らく道子様はキャノメラナのような、我が君の青い瞳を褒められているのですよ』

少しばかり動揺している我が皇帝に対して、シエヘラザードはそつと助言した。アシュレイは道子の言葉を正しく理解すると、無表情をふわりと溶かして優しい笑みを浮かべた。

『ありがとうございます。私も暖かい大地のような、道子の瞳が好きですよ。普段は穏やかな夜空を思わせるのに、陽に透けると大地のようなこげ茶色に見える。』

今度ノームを統べるヴェルグハルトを紹介しましょう。気が合う

と思います』

アシュレイは道子の目元を優しく撫でながら囁いた。会話の流れから道子の瞳を褒めてくれているのは分かる。けれど言葉を伝えるだけにしては仕草が甘過ぎる気がする。

「ちょっと、アシュレイ」

『うん？』

「……………」

覗きこむように首を傾けられて、道子は一瞬呼吸が止まりそうになった。

逃げるように視線を逸らすと、嬉しそうにこちらを見ているシェヘラザードと視線がぶつかった。微笑ましいものでも見るかのような視線が、道子の中でいたたまれなさを増幅させた。

「……ありがとうございます」

恥ずかしい気持ちを必死で我慢して、どうにか笑顔を浮かべた。

「アリガトウゴザイマス？」

アシュレイの口から予想外の日本語を聞いて、道子は目を丸くした。

『意味が違いますか？ 嬉しい時に使う言葉で合っていましたか？』

「すごい！ アシュレイ、今の日本語!!」

手を叩いて喜ぶ道子を見て、アシュレイも嬉しそうに目元を和ませた。その後シェヘラザードも同じ言葉を口にして道子を更に喜ばせた。

（いや〜グローバル・コミュニケーションだわー）

道子はすっかり彼等と言葉を交わす事に夢中になり、次々と言葉を教わっては逆に教えた。用紙とペンをもらってからは、忘れないように全ての言葉を日本語で書き記して行った。

手が痛くなる程書き記すと、道子は満足そうに綴った言葉を眺めた。

「二人ともありがとうございました。すごく勉強になりました」

『もういいんですか？』

アシュレイは満足そうにしている道子を眺めると、くすりと微笑した。

「結構時間も経ったし、そろそろお部屋に戻っても良いですか？」

道子は口に手を当てて、欠伸する仕草をした。眠いわけではなかったが、部屋に戻りたいという意思表示のつもりだ。

『疲れたようですね。部屋に戻りますか？』

アシュレイが手を差し伸べると、道子は迷わずその手を取った。その姿勢のまま周囲を見渡すと、お茶会のお礼をアシュレイ達の言

葉で告げた。シェヘラザードを含め、皆が微笑みを返してくれた。アシュレイに視線を戻すと、一瞬無言で意思を確認し合い、直ぐに道子の部屋まで移動した。

『アリガトウゴザイマス、アシュレイ』

道子はたどたどしい言葉で礼を告げると、ぺこりと頭を下げた。

『どういたしまして。こちらこそいい気晴らしが出来ました。後で女官をよこしますから、それまでゆっくり休んでいてください』

アシュレイは道子の前髪を撫でた後、こめかみに柔らかく唇を押し当てた。思わぬ感触に道子が震えると、今度は目尻に唇が落とされた。

「ちょ」

道子がこめかみを抑えて抗議しようとする、アシュレイはぱつと都合よく消えてしまった。最後に見た横顔が可笑しそうに笑っていたのは果たして気のせいだろうか。

道子は体を投げ出すようにベッドに倒れこんだ。何だかんだで、日中いろいろ目にしたせいも少し疲れていた。ふと時間が気になり、視線を彷徨わせて時計を探してみたが見当たらなかった。

（・・・見当たらないけど、ないって事はないよね。何処だろう）

しかし起き上がってまで探す気力はなかったもので、とりあえず携帯の電源を入れる事にした。外はまだまだ明るいようだが、携帯の時刻は既に18時を回っていた。

充電92%

まだ充電は残っているが、いつかは切れるのだ。それまでに早く連絡を取らなければいけない。一人になると急に先行きの見えない不安に襲われた。先程まで楽しく笑っていた事が嘘のように、道子は重たい気持ちで瞼を閉じた。

うとうとしていると、控えめに扉をノックする音が聞こえた。

「・・・あ、はい」

慌てて扉を開けてみると、美しい女性が立っていた。淡い水色の髪に、アメシストの瞳が印象的だ。デコルテの大きく開いた繊細なマーマイド・ドレスがよく似合っている。女神のような佇まいの女性性は、両手にデカンタとグラスを載せた銀トレイを持っていた。

『お飲み物をご用意しました』

「下さるんですか？」

トレイに載せられたグラスを見つめてから女性を見上げると、どうぞ、と差し出すようにトレイを下げて道子に微笑みかけた。

「ありがとうございます」

道子が受け取ろうとすると、女性はやりわり首を振った。どうやら中まで運んでくれるようだ。道子は扉を大きく開くと、笑顔で女性を招き入れた。

「ありがとうございます。ちょうど喉が渴いていたところでした」

持ってきてくれた柑橘系のジュースは、少しグレープフルーツに味が似ていて、さっぱりとしていて美味しかった。

給仕してくれている女性にも同席を勧めてみたが、あっさり断られてしまった。気を取り直してバスルームの説明を求めると、分かりやすく実演で教えてくれた。一度アシユレイから思念で浴場の説明は受けていたが、お湯の出し方等まだ分からない事も多かったのだ。

女性はゴルフボールくらいの透き通った水晶を手にとると、バスタブの底にはずみをつけて落とした。床にぶつかり、砕け散った・・  
・と思いきや、衝突と同時にバスタブを満たすお湯へと変貌した。

「へっえー！ 便利」

道子は感心しながらお湯に手を差し入れた。道子好みの少し熱めの温度だ。シャワーは天井と床から同時に、あるいは片側から霧状で噴出す仕組みになっており、切り替えるスイッチはバスタブにつ

けられていた。

バスルームについて一通り説明してもらったところで、道子はいそいそと服を脱いで湯船につかる事にした。いたせりつくせりな事に、女性は道子の長い髪を洗ってくれた。まるでエステにいる気分。道子はすっかりリラックスしていた。

湯から上がると、いつの間にか複数の女性が控えており、戸惑う道子をバスルームの寝台の上に寝かせた。これはひょっとして、と期待していると、案の定オイルマッサージをしてくれた。異国風のアロマが道子の体を解して行く。

（やっぱりここは天国。うーん天国……。めちゃくちゃ気持ちいい……。いつものエステより上手だわ〜）

道子はあまりの気持ちの良さにそのまま少し眠ってしまった。

『道子様、終わりました』

優しくゆすられて、道子はぼんやりと瞳を開けた。体がものすごく軽い。濡れていた髪もいつの間にか乾いていた。

「寝ちゃった……」

『トウコ様、ご気分はいかがですか？』

『トウコ様、キリールのジュースはいかがですか？』

美しい女性達は甲斐甲斐しく道子の世話を焼いてくれる。寝起き

のぼんやりした思考で、されるがままに任せていると、いつの間にかシャンパン・ゴールドのイブニング・ドレスに着替えさせられていた。まるで綺麗に変身して行くシンデレラのようだ。見慣れないコスメグッズがずらりと並ぶと、道子は胸をときめかせながらドレスサーの前に腰かけた。メイクにこだわりはあるが、異国風のメイクアップに興味があったので、今回はお任せする事にした。

「しつとりしたパウダーですね。ラメが控えめですごくイイ」

『道子様、お手が汚れてしまいます』

興味深そうに道子があれこれメイクグッズに触れる度、女性達はハンカチで道子の指を拭ってくれた。

「平気ですよ。綺麗なハンカチがもったいない。私ティッシュ持ってますから」

道子がバッグからティッシュを取り出すと、彼女達は興味深そうにティッシュを触ったり摘んだりし始めた。

『随分薄い布ですね』

「ティッシュですよ。見た事ありませんか？」

『ティッシュ？』

女性達は一枚のティッシュをしげしげと観察して、誰か知ってる？と言つように目配せし合つと、ふるふると首を振った。

（何か可愛いな。こんなにゴージャスな人達なのに、一枚のティッ

シユに興味津々・・・)

道子がぐすりと笑うと、はっとしたように女性はティッシュを道子に返した。その気まずそうな様子を見て、道子は噴出してしまった。

「あは、そんなに気を遣わないで下さい。気に入ったらどうぞ差し上げます」

道子がティッシュケースごと渡すと、女性達は目を輝かせて恭しく受け取った。たかがティッシュにそこまで感動されるとは思っていなかった。彼女達はいつそう献身的に道子のメイクアップを仕上げて行った。

(私、なかなかいけてるんじゃない!? とても三十には見えないって!)

鏡に映る姿に道子は大いに満足した。もう直ぐ三十代の半ばにさしかかろうとしているが、年の割りに肌も綺麗だし、地味顔なのでメイク映える顔立ちだと思っている。いつもよりもアイラインをきつめに引かれているが、その分ゴールドのアイシャドウでぼかしているのが上品に仕上がっていた。睫は丁寧にラメ入りのパウダーを乗せて、見慣れないコーティング剤で上から固めてある。瞳を伏せる様は、露をはらう初々しい蕾のようだ。

『お綺麗ですよ』

鏡の中で女性と目が合うと、優しく微笑んでくれた。道子もいつもより自信三割増しでにっこりと微笑んだ。

万全に身支度を整えたので、てっきりこの後グレート・ホールで

晩餐会でもあるのかと思いきや、道子は女性向きの可憐なゲスト・パーラーで一人きりで食事を摂った。アシュレイやシェヘラザードに会えなくて少し残念だったが、白いアンティーク調の室内で傳かすかれないながら食事を取るのもお姫様気分で楽しかった。

「いたせりつくせりだわー。遭難してるはずなのに、こんなに贅沢しちゃっていいのかな」

『トウコ様？　いかが致しました？』

「すみません、何でもありません」

道子は一人言に反応されて苦笑いを浮かべた。そして今更ながら、この場にいる誰一人として名前を知らない事に気がついた。

「そつえば、お名前は何て言うのですか？」

道子は自分を指して、トウコと何度か繰り返した後に、くるりと相手に指を向けて首を傾げて見せた。相手は意図を察すると優しく微笑んでくれた。

『私はティルノイゼと申します』

『ティル・・・の・・・？』

『ティルノイゼです』

『ティルノイゼ？』

何度か発音を修正された後、女性は肯定するように首を縦に振っ

た。道子はにつこり笑ってもう一度名前を呼んだ。此処へ来てから覚えた、4人目の名前である。彼女の事は、実は一目見た時から気に入っていた。シェヘラザードと同じ水色の髪をしている事もそうだが、アメシストの瞳があんまりにも澄んでいて綺麗だったからだ。

「ティルノイゼ、いろいろとよくしてくれて、ありがとうございます」

ティルノイゼは控えめに首を傾げている。道子が彼等の言葉でお礼を口にする、優しく微笑んでくれた。

食事をし終えて寛いでいると、ゲスト・パーラーにアシュレイが訪れた。

『こんにちは、道子』

「アシュレイ？」

『これは美しい』

アシュレイは道子を賞賛の目で眺めた。恭しく道子の手を取ると、甲にそつと唇を押しあてた。道子は高揚した気分でその様子を見つめながら、少しばかり来る時間が遅かった事を残念に思った。

「ごめんなさい、アシュレイ。もう食べ終わっちゃいました」

『道子、サンルームに行きませんか？』

「サン・・・？」

『サンプルです。  
精霊界<sup>ハーレイスフィア</sup>の夜空を見せてさしあげます』

何処へ行くのか分からないが、道子はアシュレイの差し伸べる手を取った。途端に視界が変わり、トンと軽い衝撃と共に足が床に着いた。

「わぁー、温室？」

道子はくると回りながら、硝子張りの室内を見渡した。真上には突き抜けるような青空が広がっていた。空を遮るものは何もない。随分と空を近く感じた。

「わぁ、ソファーも置いてある」

柔らかいクリーム色のソファーに道子は腰を下ろした。気持ちいい、と目でアシュレイに笑いかけると、彼も道子の隣に腰を下ろした。ソファーがアシュレイの重みで沈むと、道子の意識はアシュレイへと向かった。

『リリイに教えてもらったのですが、一日の終わりにローズ・ワインを飲むと、良い夢が見れるそうですよ』

道子が首を傾げている間に、美しい精霊達が硝子机を持って現れ、ワインカラーのボトルや色とりどりの果物を置いて行った。道子が目を丸くしていると、精霊達はボトルを空けて、道子とアシュレイの前に置かれたグラスを満たした。

「いい香り……。ローズ？」

『裏のハーブ・ガーデンで摘んだイヴピアツチェで作らせました。一口飲んでみてください』

促されるまま、道子はグラスに口をつけた。ローズとワインの香りが何とも贅沢だ。デザートワインのような口当たりだった。

「美味しい」

『気に入りました？』

『アリガトウゴザイマス』

道子がたどたくお礼を言うと、アシュレイは嬉しそうに目を細めた。それから果物やチーズを勧めてくるので、道子は苦笑しながら首を振った。

「食べたばかりだから。そんなに食べられません。アシュレイはもう食事は済んだのですか？」

道子はアシュレイを指した後、もぐもぐと食事する真似をして首を傾げた。アシュレイは無表情に見えるが、何となく肯定しているように感じられた。

（・・・もう食べたのかな？ 彼等が食事しているところ、見た事ないな）

『そろそろ夜にしましょうか？』

「何ですか？」

アシュレイは道子の疑問には応えず、座ったまま空に向かって手をかざした。手の平を上に向けて、ぴたりと宙で止めた。それからすーっと下に手を降ろした。

フツと空は闇に溶けた。

「えっ!？」

急に室内が暗くなり、道子は驚愕の声を上げた。

「え、何？」

『落ち着いてください』

真っ暗な室内に、オレンジ色の明かりがあちらこちらに灯った。

暖かいキャンドルの光だ。道子はわけが分からず、目を見開いたままアシュレイを凝視した。

『ハイレイスファイア精霊界はいつも母なる世界樹に明るく照らされていますから、時々こうして世界樹を眠らせて夜を楽しみます』  
アンフルラージュ

「何？何ですか？」

アシュレイは不安そうに辺りを見渡している道子をそっと抱き寄せた。安心させるように肩を撫でると、小さな体が腕の中でふると震えた。

『何も怖いことはありませんよ』

アシュレイは安心させるように優しく囁いたつもりだが、道子は親しすぎる距離に激しく動揺していた。

(ちょ・・・、耳元で囁かないでー！ どうしよう、抜け出すべき！？ てか何で暗いの！？)

「アシュレイ」

『うん？』

道子にしか聞こえないくらいの小さな声だった。少しかすれたような美声に、道子は体がかつと熱くなるのを感じた。

「ちよつと、離れて・・・」

アシュレイは、居心地悪そうに身じろぐ道子の頬を片手で挟んでそつと上向けた。道子は身を強張らせたが、視界に映る幻想的な色彩に目を奪われた。

「わぁ・・・オーロラ？」

『虹色の光彩が見えるでしょう。あれは世界樹アンフルラージュの見える夢なんですよ。静謐な魔力エーテルが高まっています。ロゼが目覚めを待ちきれずに、貴方に会いに来てしまうかもしれませんね』

アシュレイがくすりと笑うので、道子は視線を落としてアシュレイを見つめた。近距離で煌くロイヤル・ブルーの色彩が揺れている。

(うつ・・・)

透き通った瞳に射抜かれて、道子は視線を逸らす事も逃げ出す事も出来なかった。

『・・・・・・・・』

「えーっと、お酒お代わりー！」

何とか視線を外すと、ごまかすようにワインボトルに手を伸ばした。道子の意図を悟って、アシュレイはさっとグラスにワインを継ぎ足した。

『アリガトウゴザイマス』

『美味しいですか？』

道子はアシュレイの腕の中でグラスを煽った。アルコールが血を駆けめぐり、体がカッと熱くなる。思考がぼんやりとして、ふわふわといい気分になってきた。

「よし飲もう！ もういい、何が起こつても気にしない」

急に騒ぎ出した道子を見て、アシュレイはくすりと微笑んだ。

『道子は面白いですね』

「アシュレイって何者なんですか？ いきなり真っ暗になったの、まさかアシュレイがやったんですか？ ありえないですよ。や、全然気にしてないけど」

『道子、落ち着いてください』

三杯目を煽ろうとしたところで、嗜めるようにアシュレイにグラスを取られた。道子では手の届かないテーブルの端に置かれてしまった。

「もう離してくださいよう・・・」

道子がぺちぺちと腰に回った手を叩くと、アシュレイはするりと腕を外した。道子はいろいろと疲れてくつたりとソファに沈んだ。

『道子？』

「いえ、平気です。敢えて酔いつぶれたいんです」

道子はむくりと起き上がると、遠ざけられたグラスに手を伸ばした。アシュレイがさつとグラスをどかすと、憤慨したようにぱしぱしとアシュレイの肩を叩いた。道子は全く気がついていないが、周囲に控えている精霊達はその様子を見てかなり驚いていた。

「そつだー！ アシュレイ、写メ撮っていいですか？」

『道子？』

道子はアシュレイの了承も待たず、携帯の電源を入れるとパチリとアシュレイを撮影した。液晶の中に幻想的な室内の様子と、アシュレイが映っている・・・。見慣れた端末に映画のワンシーンのような光景が映っているのは、非常に違和感があった。

「・・・よく撮れていますよ。ほら」

道子が撮影した写真を見せると、アシュレイは興味深そうに携帯を裏返したり、閉じたりし始めた。

『道子、私が映っています。どういう仕掛けですか？』

「何言ってるのか分かりませんよ。さー、今度は一緒に撮りましょう」

道子は部屋の隅に控えていたティルノイゼに携帯を渡すと、何度か写真を撮ってやり方を教えた。ティルノイゼは真剣な表情で微動だにせずに携帯を構えた。

「アシュレイ！」

道子は自分から腕をアシュレイに絡めると、ぴたりと寄り添ってカメラに向かってピースサインをした。アシュレイは不思議そうにしながらも、道子にされるがままじっとしている。

ティルノイゼが真剣な表情で頷いたのを見て、道子は期待に顔を輝かせながら駆け寄り携帯を覗き込んだ。

「うんうん、よく撮れてる。いい思い出になったわー」

精巧な人形のように美しいアシュレイの隣で、お酒で赤くなった顔に満面の笑みを浮かべている道子が並んで映っている。

（・・・無事に家に帰れたら、皆に自慢しよう。すっごい美形に出会ったって。美味しいものいっぱい食べて、ドレスアップしてお姫様気分だったって）

液晶をしみじみと眺めている道子の傍にアシュレイがやって来た。

端正な顔を近づけて液晶を覗き込む。

「・・・よく撮れてますね。帰ったら自慢しちゃいますよ」

『私と道子が映っています』

道子がカメラロールを開いて過去の写真を見始めると、アシュレイは肩を引き寄せてソファアームへと促した。

普段からあまり写真をマメに撮るタイプではないから、カメラロールの中には大した映像は入っていなかった。殆ど出先に調べた電車時刻の画像や、店のアクセスマップの画像で埋まっている。しかし次々と画像をめくる手は、友人を映した写真を開いたところで止まった。

『道子？』

「・・・これ、幼馴染なんです」

写真には仲の良さそうな男女4人が映っていた。行きつけの居酒屋で飲んでいる時に、道子が撮ったのだ。皆お酒に酔って赤い顔をしている。

（この日、居酒屋はしごしたんだよね。ひもの屋で飲んでから、地元に戻って飲みなおして・・・）

道子が物思いに浸っている様子を、アシュレイは隣でじっと見つめていた。心を読むまでもなく、彼女が故郷を懐かしんでいる事は分かる。ロザリアの為に攫うように連れて来てしまったが、彼女にも帰りを待つ親しい者達がいるのだ。いつまでも引き止めておくわけにはいかないだろう。

『ロザリアは反対するでしょうけれど、貴方が願うのなら故郷に戻れるよう力を貸します。ただもう少しだけ、あの子の目覚めを待つてあげて下さい』

「ロゼ？」

「……貴方はロザリアの全てですから」

「……アシュレイ？」

そつと道子の前髪を撫でるアシュレイを、道子は不思議そうに見つめた。ロゼがどうしのだろうと、説明を促すようにロイヤル・ブルの瞳を見つめる。しかし何も言わないアシュレイに焦れて、前髪を撫でる手を掴んで額に押し当てた。

（ロゼがどうしたの？）

『道子』

（私とロゼと、どんな関係があるの？　ロゼにはいつ会えるの？）

アシュレイは少し戸惑ったように道子を見つめた。彼女からロザリアを案じる気持ちは伝わっているが、それにどう答えて良いか分からなかった。

『……貴方と言葉が交わしたら』

アシュレイは道子の手をそつと外すと、答えられないというように首を横に振った。

「教えてください。私が此処にいる理由、ロゼなんでしょう？　私はどうすればいいんですか？」

『……』

道子は何も答えないアシュレイを見つめると、痛みを堪えるように顔を顰めた。そして遠ざけられたグラスをぱつと奪うと、勢いよく煽った。体にこもる熱が瞼から毀れてしまいそうだった。

「私、帰れるのかな」

アシュレイは端末を握り締める道子の手を、両手でそつと握り締めた。悲しみを癒すように小さな手を撫でる。

『心配しないで下さい。貴方がロザリアを救ってくれたように、今度は私が貴方を助けます。いずれ必ず、故郷に戻してさしあげます。それまでは・・・、これが貴方を守ってくれる』

アシュレイは、サファイヤの埋め込まれたブレスレットを道子の手首に通した。青い宝石は闇を照らすように煌いている。

「ブレスレット？」

『身につけていれば、足りない魔力を補ってくれます』

「もらっていいんですか？」

道子はブレスレットとアシュレイを交互に見つめて首を傾げた。アシュレイが頷くのを見ると、嬉しそうに微笑んだ。

「・・・綺麗ですね。ありがとうございます」

『よく似合っています』

一連の華奢な鎖のチャームに、六角形にカットされたサファイヤが吊るされている。金属なら冷たいはずなのに、触れている箇所には温かみを感じた。不思議な光彩はまるでアシュレイの瞳のようだった。

（不思議……。不安な気持ちと和らいだみたい。……。眠いのかな）

とろんとした瞳でブレスレットを眺める道子を見て、アシュレイはティルノイゼを呼んだ。

『道子を部屋で休ませてあげてください』

『かしこまりました』

ティルノイゼは跪いて道子に手を差し伸べた。そろそろ退室するのだろうかと思い、道子は迷わずその手を取るとふらつきながら立ち上がった。ティルノイゼの腕が支えるように腰に回されると、道子は慌ててアシュレイに視線を向けた。

「素敵なブレスレットをありがとうございます。お休みなさい、アシュレイ」

『道子、お休みなさい』

アシュレイは腰をかがめると、道子の額と目尻に唇を落とした。道子はふわふわした気分のまま、何も考えずアシュレイの頬に唇を押し当てた。アシュレイは驚いたように目を見張ったが、直ぐに優しい笑みを浮かべてくれた。

『お・・・や、すみ、さい』

アシュレイが、たどたどしい口調で言葉を真似る道子を撫でると、嫌そうに頭を避けられた。どうやら頭を撫でられるのはお気に召さないようだ。アシュレイは久しぶりに愉快的気分を味わいつつ、道子の頬に唇を押し当てた。無表情で固まっているテイルノイゼに目配せすると、慌てて道子を連れて出て行った。

アシュレイは頬を撫でながら先程与えられた唇の感触を思い出して、くすりと口元に笑みを浮かべた。この後はまた仕事に戻る予定でいたが、心地よい夜をもう少し楽しんでいたくなり、サンルームに残る事にした。

ローズ・ワインを嗜みながら、思い出すのは不思議と道子の事ばかりだった。

-翌日。

道子は携帯を見るなり悲鳴を上げた。

「うそーーーーっ!!」

『トウコ様!?!』

ティルノイゼが慌てて駆けつけて来た。ベッドの上で半身を起こしている道子の無事を確認すると、素早く周囲に異常がないか探った。何もないと分かると、幾分落ち着きを取り戻して道子の元へと近づいて来た。

『トウコ様？　いかがされましたか？』

「どうしようお！　充電が30%しかない！」

道子は涙目でティルノイゼに向かって携帯を見せた。美しい精霊は怪訝そうに携帯を見つめた。

「昨日電源つけたまま寝ちゃったんだ！　ああ、何で気付かなかったんだろう！」

ベッドに蹲ひづくまって嘆く道子の背を、ティルノイゼは心配そうに撫でた。

『一体どうされたのですか？』

「急がないと、本当に帰れなくなっちゃう」

道子とはにかく携帯の電源を落とすと、思いつめた顔で勢いよくベッドから飛び降りた。急いで身支度を整えると、おろおろと様子を伺うティルノイゼを無視して、声を限りにアシュレイの名を叫んだ。

「アシュレイ！　アシュレイ！　アシュレイ！」

『道子？』

アシュレイが音もなく現れると、道子は掴みかかる勢いで詰め寄った。

「お願い、庭園ガーデンに連れて行って下さい！ 早くしないと充電が切れちゃうんです」

アシュレイは襟を掴む道子の手を外すと、説明を求めるようにテイルノイズを見た。

『我が君、先程私がトウコ様の悲鳴を聞いて駆けつけた時、トウコ様はその不思議な道具を見つめて真っ青になっておられました』

「アシュレイ！ お願いします、連れて行ってください」

『・・・何か、道子の身に今すぐ故郷に帰りたいと思うような出来事があったようです。お前の所為ではありません』

「アシュレイ！」

『道子、落ち着いてください。今直ぐ貴方を帰す事は出来ませんが、いずれ必ず帰してあげます』

アシュレイが小さな体を抱き寄せようとすると、道子は拒絶するように身をよじった。そのまま距離を取って立ち止まり、睨む様にアシュレイを見つめた。

「私の言っている事、分かりますよね。どうして連れて行ってくれないんですか？」

道子から敵意を感じ取り、ティルノイゼは主を背に庇うように移動した。それは精霊として当然の本能だったのだが、道子は少なからずショックを受けた。出会ってからずっと親切にしてくれたティルノイゼから拒絶された気がしたのだ。帰りたいという気持ちにいつそう拍車がかかり、アシュレイに尚も言い募った。

「お願いします、連れて行って下さい。帰りたいんです」

『道子』

アシュレイは道子の腕を取ろうとしたが、強く反発する道子を見て諦めたように腕を下ろした。

『・・・今は何を言っても無駄でしょう。私は戻りますが、ティルノイゼは道子から目を離さないで下さい』

『かしこまりました』

アシュレイが消えると、道子はやりきれないようにソファアのクッションを投げた。憤慨して勢いよく腰掛けると、部屋の隅に控えているティルノイゼに目を向けた。

「出て行ってもらえますか？」

いつになく冷たい口調で話しかけると、ティルノイゼも冷たい視線を返して来た。監視するように立ち尽くす様が癪に障って、道子はいらいらと声を荒げた。

「少し一人になりたいんです。出て行って下さい」

少しも動こうとしないティルノイゼにつかつかと歩み寄り、部屋の外を指して目線で退出を促した。

「出て行って」

『トウコ様、我々に敵意を向ける事は、とても危険な事です』

「何言っているか分からない」

『我が君に、あのような振る舞いをなさってはいけません。我が君が御心を砕いて下さっているというのに、何故蔑ろにするのですか』

「・・・何ですか？」

ティルノイゼの怒りに満ちたアメシストの瞳が真っ直ぐ道子を射抜いた。ゾワリと恐怖に肌が粟立ち、道子の全身に震えが走った。初めてティルノイゼを怖いと思った。

『・・・トウコ様、我々に怯える事も、とても危険な事です』

「何？ 怖い・・・」

淡々と呟くティルノイゼの迫力に押されて道子は後ずさった。

「・・・怒ったの？」

『そんなに地上<sup>ハロリアン</sup>へ行きたいと言うのなら、私が連れて行ってさしあ

げます。ですから、これ以上我が君への無礼はお控えください』

ティルノイゼは震える道子の腕を掴むと、宮殿の外へと瞬時に転移した。驚く道子を軽々と抱き上げて、深い森へと舞い降りた。

（高い！）

道子は空を飛ぶ恐怖に瞳をぎゅっと閉じた。ティルノイゼの突然の行動の意味が分からず混乱していると、脳裏に地上の景色が浮かびはつとして目を見開いた。

「まさか、連れて行ってくれるの!？」

『<sup>ハロリアン</sup>地上に降りたら、また宮殿にお戻り頂きます。トウコ様のお気が済めば良いのですが・・・』

『ありがとうございます!』

道子は感極まってティルノイゼの首に腕を回して抱きついた。  
ティルノイゼは木洩れ陽に照らされた平原に降り立つと、魔力で複雑な紋様を宙に描いた。大きな円形の紋様は道子とティルノイゼを中心に広がり、うっすらと青く発光した。

「これ何ですか？」

道子はおっかなびっくり円状に広がる魔力を指でつついた。感觸も温度も皆無だった。首を捻りながら何度かつついているうちに、ぱっと視界が切り替わった。しかし着いた先が真っ暗だった為、一瞬何処にいるのか分からなかった。

『トウコ様、地上です』  
ハロアマン

「此処は・・・？」

道子は不安そうにティルノイゼの肩をぎゅっと掴んだ。ティルノイゼは地上に道子を降ろすと、背中をそっと押した。歩く事を促されて道子はびくびくと足を踏み出した。空が暗いので気付かなかったが、よく見れば此処は渴望していた庭園だ。ガーデンしかし慌てて携帯の電源をつけると、落胆のあまり崩れ落ちそうになった。

「・・・噓、圏外」

道子は絶望の眼差しで携帯をじっと見つめた。道子の落胆を感じて、ティルノイゼは不思議そうに携帯を覗き込んだ。

『どうかされましたか？』

「どうしよう・・・、帰れないかもしれない」

暫くお互い無言で立ち尽くしていたが、ティルノイゼはざわりとした複数の人間の気配を感じて意識を外へと向けた。

『トウコ様、直ぐに戻りましょう』

ティルノイゼは道子に手を伸ばしたが、僅かに届かずに空を切った。驚きに見開かれた漆黒の瞳とアメシストの瞳が交差する。

刹那。道子は闇に潜んでいた男に捕らえられ、ティルノイゼは対精霊用の弾丸に体を貫かれた。凄まじい怒りの咆哮をあげてたおやかな体が崩れ落ちる。

『今だ！ 仕留めろ！』

鋭い掛け声を合図に、黒衣を纏った男達がティルノイゼを取り囲んだ。道子は呆然と苦しそうに地面に膝をつくティルノイゼを見ていた。

男の一人がティルノイゼの首に巨大な鎌をぴたりと当てるのを見て、道子は声にならない声をあげた。その瞬間、腕に通したブレスレットが熱を持ち、道子を拘束していた兵士がうめき声を上げて離れた。道子は前を見据えたまま駆け出した。

「ティルノイゼさんっ！」

『何やってるんだ！ 押さえてろ！』

ティルノイゼを取り囲んでいた兵士達が、慌てて道子を取り押さえようと向かって来る。道子は襲い掛かる男達に怯んで足を止めたが、何故か男達も警戒するように足を止めた。

『この女、精霊石を持っている』

『待て、殺すな！ 殿下に報告しろ』

男の一人が道子に銃口を向けると、嗜めるように傍らの男が銃口を跳ね上げた。道子のはつきりとした殺意を向けられて、血が凍るような恐怖に襲われた。

（・・・この人、今、殺そうとした）

ドクンドクンと強く鼓動がなる。怖くて堪らないのに、両足に重石でもつけられたかのように、その場から一步も動く事が出来なくなつた。

『人間共が・・・っ！ その方に触れるな！』

道子はティルノイゼに視線を走らせると、両足からきらきらとした液体が毀れている事に気がついた。赤くないのに、まるで流血しているようで怖かった。

「・・・ティル・・・」

名を呼ぶ声が無様に震えてしまふ。道子が恐怖に震えながらティルノイゼを見つめると、美しい精霊は申し訳なさそうにアメシストの瞳を曇らせた。

『お許し下さい。私の責任です』

二人の主従関係を敏感に読み取り、周囲の男達は訝しげに眉を潜めた。

『こいつ、古代精霊ティタニアを使役しているのか？』

『精霊石で？』

『いや・・・、色が違う』

男達は探るように道子をじろじろと眺めた。道子が明らかに震えている事が、彼等の警戒心を幾らか緩めていた。

ティルノイゼはどうかして道子にアシュレイを呼ぶよう伝えなかったが、対精霊用の封じに捕らわれているせいで、思念を送る事すら叶わない。悔しそうに唇をかみ締めると、燃えるような瞳で周囲の男達を牽制した。

『その方に少しでも触れてみる。八つ裂きにしてやる』

『この女は混血か？ 何故肩入れする』

ティルノイゼが忌々しそうに唸り声を上げると、男は銃口をティルノイゼの眉間に押し当てた。

「やめて！」

道子が叫ぶと、周囲の男達は怪訝そうな顔をした。

『こいつ、何て言っただんだ？』

『女、名は何と言う？』

「・・・何なの？」

道子は不安そうに男達の顔を見比べた。彼等が顔を見合わせたところで、よく通るライト・バリトンが響いた。

『退け。俺が話す』

道子を取り囲んでいた男達は左右にざっと分かれて、黒い甲冑を身につけた冷たい美貌の男に道を譲った。堂々と近づいて来る男は、明らかに周囲の者達とは格が違っていた。男は道子の前で足を止め

ると、鋭い銀紫の瞳で探るように道子の全身を眺めた。

『名は何と言っ?』

「あの・・・」

『聞こえん。はっきり言え』

男は方眉を潜めて道子を睨んだ。しかし小さな体がびくりと震える様を見て、僅かに態度を和らげた。

『・・・見慣れない顔立ちだな。何処から来た?』

「すみません、言葉が分からないんです」

不安そうに呟く声を耳にして、男は初めて言葉が通じない事に気付いた。思案するように道子とティルノイゼを見比べると、周囲の男に指示してティルノイゼの額にぴたりと銃口を当てさせた。

「やめて!」

男は、ティルノイゼに駆け寄ろうとする道子の腕を捻り上げた。

ティルノイゼが唸り声を上げる。

「・・・痛っ」

『その方に触れるな!』

『驚いたな。古代精霊テイタニアが人間を庇うとは。何者だ?』

男は道子の腕に煌くブレスレットを見て、銀紫の瞳に賞賛の色を浮かべた。

『素晴らしい強力な精霊石だな。ここまで高密度の魔力は初めて見た。何処で手に入れた？』

「痛い・・・、放して」

道子は精一杯身をよじって逃げようとしているのだが、強靱な腕はびくともしない。圧倒されるような力の差に本能的な恐怖を感じた。

『・・・不思議な言葉だ。大陸の生まれではないのか』

男は道子の首筋をすつと撫でると、ニットの襟の中に指を潜らせた。驚愕の表情で男を凝視する道子を見て、今度は目元を親指で撫でた。

『瞳も黒いのだな。外人か？　しかし大陸語も知らないとはどんな辺境の生まれだ。欺いているのかもしれん。誰か自白剤を持て』

男は小瓶と水筒を受け取ると、道子の口をこじ開けて小瓶の中身を流し込んだ。蜂蜜に似た甘い味が口の中に広がり、道子はむせそうになった。しかし後から水を流し込まれて口を大きな手で塞がれると、吐き出す事も出来ず飲み込むしかなかった。道子は涙目になりながら男を睨んだ。

『トウコ様！』

ティルノイゼの切羽詰った声が辺りに響いた。道子はくらりと眩暈に襲われて、目の前の男に縋るように甲冑に手を当てた。

『名は何という？』

「気持ち悪い・・・」

『何処から来た？』

「うつ・・・」

男はぐったりとする道子を見て、本当に言葉を解さないのだと信じた。使用したのは拷問にも使用される強力な自白剤で、言語弊害が演技なら一発で見抜ける代物だった。

『面白い。この女は王宮光魔研究所に連れて帰る』  
フリスアカデミー

『許さぬっ！』

ティルノイゼの悲痛な声を無視して、男は道子の首を覆うニットを人差し指で下げると、露になった首元に唇を当てた。吸い付かれた箇所が燃えるような熱を帯びて、まるで炎で焼かれているような痛みが走った。あまりの事に道子はどうとう泣き出してしまった。

『古代精霊テイタニアは交感神経を抜いてから殺せ。引き上げるぞ』

ティルノイゼを狙う銃の引き金に指が掛けられた瞬間、道子は恐怖に叫んだ。

「やめてーっ！っ！」

ドンッ

突然、大地を揺るがす轟音が空から響いた。

道子は両耳を押さえて悲鳴を上げた。男は反射的に腕の中に道子を庇うと、厳しい眼差しを空に向けた。黒衣の男達は、主君を守るように男の前に歩み出た。

『まさか・・・』

『馬鹿な。』ガロ暗黒史の予言<sup>エーヘルヴェスト</sup>”とでも言うのか？』

『しかし実際、灰海の方こうから来てる・・・』

その場にいる全員が呆然と東の空を見上げた。

闇夜を縫うように、有翼の群集が東の空から押し寄せて来た。大群を率いるのは格別大きな羽を持つ四体の精霊で、その中央には青い炎のような燐光を放つ精霊がいた。

テイルノイゼは瞳を輝かせて空を見上げ、歓喜の声を上げた。道子は空を覆う群集に圧倒されていたが、彗星のように舞い降りたアシュレイを目にすると、ほっとしたように力ない笑みを浮かべた。

主君を守るように前を固める黒衣の男達は、覚悟したように武器を握り締めた。中には手が震えている者もいる。

『殿下、お逃げ下さい』

『逃げて、逃げなくても・・・、どちらでも構いませんよ。死ぬ事に変わりはないのですから』

アシュレイは氷の眼差しを男達に向けた。暗闇に光るロイヤル・ブルーの瞳は屈強な男達を心の底から震え上がらせた。

群集を率いていた四体のうち一体、シェヘラザードはティルノイズを呪縛している男達を思念だけで後方へ弾き飛ばした。開放されたティルノイズは深い銃創をもとせず、周囲の男達の首を手刀で撥ね落とした。

『よくも、この私に膝をつかせたな。殺しても殺し足りぬ・・・っ！』

ティルノイズは忌々しそうに周囲を眺めた後、呼吸を整えてアシュレイの足元に跪いた。

『我が君、無断でトウコ様をお連れてしたばかりに、このような危険な目に合わせてしまいました。誠に申し訳ありません。覚悟は出来ております』

『お前の処遇は後です。シェヘラザードから治療を受けなさい』

ティルノイズはこくりと頷くと心配そうに道子を振り返りながら、シェヘラザードの前に跪いた。

周りに死体が転がっていると言うのに、誰も気にしていなかった。あの優しいシェヘラザードですら、目の前の光景を平然と受け入れている。道子は目の前の惨劇に吐き気を覚えて真っ青になっていた。がくがくと震える体を抱きしめてくれているのは、ティルノイズに酷い事をした男達の指導者なのだ。けれど彼等はティルノイズや道子を殺してはいない。最初に酷い事したのは彼等だが、首を撥ね

るだけの理由はあるのだろうか。

『道子、怖い思いをさせました。帰りが遅いから、迎えに来ましたよ』

優しいアシュレイの口調に、道子は一瞬全てを忘れてふらふらと近づこうとした。しかし逞しい腕が攫うように腰に回された。

『四精霊を従える偉大なる天下始祖精霊よ、お初に見える。私はガロセルヴァ・ク로우帝国の第二皇子、キルディアスです』

『その台詞は聞き飽きました。人の治世は儚いものです。さあ、道子を返してもらいましょう』

『……この娘の為に、ハロリアン地上へ降りて来られたのですか？』

『それだけではありませんよ。元より、次に眷属が血を流した時、大陸から人間を一掃しようと決めていました』

アシュレイの淡々とした口調に、主君を守る黒衣の男達は怯えたように唾を飲み込んだ。キルディアスですら、信じられないというように銀紫の瞳に微かな恐怖を浮かべている。

（震えている・・・？ 何を話しているんだろう）

道子は腰に回された手が微かに震えている事に気がついた。背後の男を振り返ると、緊張した面持ちでアシュレイを真っ直ぐ見つめている。

『・・・偉大なる天下始祖精霊よ、何故、地上から光を奪ったのです。ガロがそれ程までに憎いのですか？』

しかし諸悪の根源は全てダレイ＝ソロス帝国ではありませんか』

『お前達は短命故、都合の悪い事は直ぐに忘れる。諸悪の根源は隣国ですか？ 笑わせてくれる。精霊界の恵みを争い、海域を穢したのは両国に言える事です。我等に媚びて主を裏切った分、お前達の方が見苦しい。業深い命よ』

アシュレイの地を這うような声に、びりびりと空気が震えた。キルディアスの手前まで、大地は雷が走ったように勢いよくひび割れた。

「嫌あつ！！」

道子が悲鳴を上げると、アシュレイは気を取られたように視線を逸らした。その一瞬を見逃さず、黒衣の男達は武器を手にアシュレ

イへと飛び掛った。部下の無謀な行動にキルディアスは静止の声を掛けたが、間に合わず―取り巻きの精霊達により炎で焼き殺された。男達の鈍い悲鳴が炎に飲み込まれる。嫌な音と匂いに、道子はぶるぶると震えて腰に回された腕を握り締めた。道子の恐怖に共感するように、腰に回された腕に力が込められる。

『・・・トウコ、と言ったか？ あの天下始祖精霊とはどういう関係だ？ 何故あいつはお前を殺さない？』

「怖いよぉ・・・！」

道子はぼろぼろと涙を零しながら、目に映る光景を拒否するようにぎゅっと両目を閉じた。

『道子が怯えている。早く離しなさい』

『部下の非礼なら詫びる』

キルディアスは震えながらも、強い意志を銀紫の瞳に浮かべてアシレイを睨んだ。交渉手段を目まぐるしく計算している間に、強力な思念により後方へと弾き飛ばされた。あまりにも歴然とした魔力の差に、どう足掻いても力では敵わない事を悟った。

ガロの行く末を背負っているというのに・・・っ！

全身を襲う苦痛以上に、身を焦がすような怒りで体が千切れてしまいそうだった。

道子はふっと体を支えるものが消えて、流れる風を感じながらその場に崩れ落ちた。ティルノイゼが慌てて駆け寄る姿が視界に映る。しかし差し伸べられた両手が赤く染まっている事に気付くと、道子は恐怖に慄いた。

「来ないで……！ 触らないでよお！」

『トウコ様』

ティルノイゼは道子の恐怖を嗅ぎ取り、目を見開いて立ち止まった。己の両手を目にして、困ったように道子を見つめた。どうしよう、と立ち尽くす姿は無垢な子供のようだった。しかし、道子の背後で呻くキルディアスに焦点を合わせると、ぎらりとアメシストの瞳に殺意を浮かべた。道子はティルノイゼの変化を目の当たりにして、震える四肢を叱咤して立ち上がった。

「止めてよ、もういいでしょ！？ また殺すの？ どうかしてるよ」

背後を庇うように両手を広げて、泣きながらティルノイゼに向かって叫んだ。恐怖のあまり心が麻痺してしまいそうだった。もうこれが現実かどうか分からない。

「来ないで！ あっち行つて」

道子が何度も叫ぶと、ティルノイゼは指示を仰ぐようにアシュレイを振り返った。しかし主の瞳にも困惑の色が浮かんでいた。彼等にはキルディアスを庇う道子の行動を理解する事が出来なかった。

『……道子、退いて下さい。貴方が庇う必要などありません』

アシュレイは困ったように首を傾げた。道子は必死に首を振りながら、止めてと叫び続けた。

小さな背中に庇われたキルディアスは、呆然と道子の背中を見つめた。まさか自分よりも小さく、弱い存在に庇われるとは思っても

いなかったのだ。そして彼女を決して攻撃しない彼等を見て、訳が分からず眉を潜めた。

『トウコ、何故俺を庇う』

「やだやだやだ、どうかしてる！」

道子を挟んで、キルディアスとアシュレイは困惑したように立ち尽くしていた。アシュレイが仕方ない、と言うように道子の腕に手を伸ばしたところで、辺りを包む闇は瞬時に消え去った。

・・・柔らかな世界樹の光が大地を照らした。  
アンフルラージュ

「えっ!?!」

『世界樹の光か・・・!』  
アンフルラージュ

『何故・・・』

彼等はそれぞれ驚きを口にした。  
アシュレイはロザリアと道子を連れて精霊界に戻った際、地上へと続く灰海を荒れ狂う嵐で覆ったのだ。暗雲立ち込める灰海は精霊界の恵みたる光を地上から完全に奪った。人間から光を奪い、殲滅させるつもりだった。  
ハイレイスファイア  
ハロビアン  
ハイレイス

しかし今、明るい世界樹の光は、アシュレイの意思に反して地上を照らしていた。そんな事が出来るのは、アシュレイを除いて数える程しかない――。  
アンフルラージュ  
ハロビアン

『ああ・・・、まさかアンジェラ、いるのですか？』

アシュレイの震えた声音を道子はぼんやりと聞いた。焦がれるような響きに、こんな時だと言つのに道子の胸にざわりとした感覚が広がった。

「・・・アシュレイ？」

道子の姿に銀色の精霊の姿が重なって見えた。アシュレイは懐かしい半身の名を口にした。

『・・・アンジェラ、ようやく姿を見せてくれましたね』

道子を見つめるアシュレイの瞳に、何か違うものが映っているような気がして、道子は訳が分からないというようにきよろきよろと辺りを見渡した。

「え？ え？ こんなに陽ってあつさり上るもの？？」

慌てふためく道子の額を、大気に透ける女性はそつと撫でた。にこやかな表情を浮かべる女性は、アシュレイに非常に似通った面立ちをしていた。

『ケブラーホーン天下始祖精霊が二体・・・。まさか、これが失った半身なのか？』

キルディアスは信じられないものを見るように呆然と道子を見つめた。しかし道子には肩に腕を絡める精霊の姿は見えていなかった。キルディアスとアシュレイに凝視されて、道子は居心地悪そうに立ち尽くしていた。

『貴方は・・・、ケブラーホーン天下始祖精霊の片割れですか？』

キルディアスの問いに答えるように、半透明の精霊は頷いた。

『何故止めるのです』

アシュレイは憤慨したように道子に駆け寄ると、小さな肩を強い力で掴んだ。道子が恐怖に顔歪めて何事が呟くと、アシュレイと同じケブラーホーン天下始祖精霊、すなわち双子の片割れであるアンジェラは、嗜めるようにロイヤル・ブルーの瞳をアシュレイに向けた。

『アシュレイ、アンフルラージュ母も心配しています。ハロリアン地上を見捨てないで』

『嫌です。貴方と、我が眷属を散々苦しめた』

『頑固者。もう許してあげて下さい。私はもう許したから・・・。  
長い間眠っていてごめんなさい。もう起きるから、一緒にハロリアン地上を導きましよう』

『・・・・・・・・』

アシュレイは考えるように顎に手を置くと、道子に宿るアンジェラをじっと見つめた。道子は訳が分からず、不安そうにアシュレイを見つめている。

（何か、体の中に誰かいるみたい・・・。ぞわぞわする）

道子の不安を癒すように、アシュレイはそっと頬を撫でた。不安そうにさ迷っていた漆黒の瞳が焦点を結び、アシュレイをじっと見

つめた。

『道子にも止めると言われましたし……』

アシュレイが諦めたように呟くと、アンジェラはにっこりと笑顔を浮かべた。自分を降ろした小さな体を抱きしめ頬に唇を押し当てると、ふっと音も無く姿を消した。

道子は何となく頬を押さえると、光が差し込み緊迫感の和らいだ周囲を見渡した。しかし大地を照らす明かりは、血の海も鮮明に照らして道子に悲鳴を上げさせた。

心が限界を迎えて、道子は全身から力を抜いて意識を手放した。アシュレイは崩れ落ちる小さな体を抱きしめると、冷淡な眼差しをキルディアスに向けた。

『運の良い人間ですね。アンジェラと世界樹アンフルラージュに止められては、流石に私も無視出来ません』

『では……』

『この場は見逃しましょう。しかし終わりのないお前達の無益な争いが、精霊界ハイレイスファを穢している事は事実です。隣国との関係に早々に片をつけなければ、今度こそ両国共々沈めますよ』

脅しではない警告に、キルディアスはごくりと唾を飲み込んだ。

『……ケブラーホーン天下始祖精霊、我々として戦争を長引かせたいわけではありません。奴等の精霊の血で生み出す禁術、不死兵の威力に苦戦を強いられているのです』

『その禁術に対抗する為に、お前達も我が眷属を幾度も手に掛けて

いるではありませんか。終いには光脈すら穢す始末。目も当てられません』

アシュレイが冷ややかに言い放つと、キルディアスはギリと奥歯をかみ締めた。隠し切れない敵意に、周囲の精霊達が獰猛な唸り声を上げた。アシュレイは軽く手を上げてそれを制すると、用は済んだとばかりに宙へと浮かびあがった。

『<sup>ハローアン</sup>地上に光は戻しましたが、お前達の今後を約束したわけではありません。』

これまで幾度もガロやダレイの王族達から利己的な盟約を求められました。昔も今も応じる気は微塵もありません。同族の始末は自分達でつけて下さい』

話は終わりとばかりにアシュレイが空を見上げると、キルディアスは叫ぶように問いかけた。

『お待ち下さい！ <sup>ケブラーホーン</sup>天下始祖精霊！ その腕の女は何者なんです？』

『・・・お前達が殺した、<sup>ハローアン</sup>地上の最後の良心の欠片です』

『・・・？』

アシュレイの言葉の意味が分からず、キルディアスは怪訝そうに顔を顰めた。

『本当に、お前達短命な生き物は都合の悪い事は直ぐに忘れる。これだから人間は嫌なんです』

アシュレイは面倒臭そうに呟くと、今度こそ大群を引き連れて空

に舞い上がった。

キルディアスは血の海の中で一人、呆然としばらく空を見上げて立ち尽くしていた。

庭園<sup>ガーデン</sup>での惨劇から、二日。

道子はひたすらベッドの中で過ごしていた。時折ティルノイゼが傍にやって来る気配は感じていたが、とても顔を見せる気にはなれなかった。彼女の血塗られた両手が今もまだ脳裏にこびり付いて離れないのだ。

チェストの上に飲み物や食べ物が置かれていても、手をつける気にもなれなかった。特に焼いた肉類は匂いを嗅いだだけで吐き気がこみ上げた。

(・・・このまま、死ぬのかな)

この二日、死ぬ事ばかり考えていた。携帯の充電もとくに切れて、もうかつての日常を映像で見る事は出来ない。三十年以上の思い出があるはずなのに、思い浮かぶのはここ数日間の出来事ばかり。美しくて残酷な彼等の姿が頭から離れなかった。

『トウコ様、何かお召し上がり下さい。私がお気に障るのなら、他の者をよこしますから・・・』

ベッドから少し離れたところでティルノイゼの声が聞こえた。きつといったもののように跪いて、綺麗なアメシストの瞳をこちらに向けているのだろう。途端にぞわっと鳥肌が立った。彼女の瞳を見る事が死ぬほど怖かった。

『トウコ様』

（・・・こんなに、優しい声なのに。どうして・・・）

・テイルノイズが軽く腕を振っただけで、ぱんっと首が飛んだ。

（あんな、恐ろしい事）

・テイルノイズは銃で撃たれたのに、平然と立ち上がった。赤い血ではなく、キラキラした液体が腕を伝っていた。

『トウコ様。どうか、怖がらないで下さい・・・』

（悲しそうな声・・・。 何で？ 私をどうするつもりなの？）

頑なに心を閉ざす道子を見て、テイルノイズは諦めたように立ち上がると部屋を後にした。

チェストに置かれた爽やかな果物の香りを嗅いでも、道子は手に取ろうとせず瞼を強く閉じた。何もかも忘れて眠りたかった。

水だけ口にして、目が覚めては眠った。

更に眠って、いい加減寝すぎて体が痛くなった頃、道子はようやく起き上がった。

数日をベッドで過ごしたが、辺りが暗くなる事は一度もなかった。まるで沈まない太陽に照らされているように、室内にはいつも木洩れ日が差し込んでいた。

（・・・何か、寝すぎて体がちよっと匂う気がする）

少し前まで空腹も汚れも気にならなかったというのに、限界まで寝たせいか、妙に頭が冴えていつもの感覚が戻ってきた。

お気に入りの羽毛のルーム・シューズに足を滑らせて、バスルームに向かって歩いて行こうとすると、空腹過ぎてよろめいてしまった。

『トウコ様!』

ティルノイゼは道子の姿を見るなり、慌てたように駆け寄って来た。

「・・・お早うございます」

道子は恐々と顔を上げて、アメシストの瞳を見つめた。ティルノイゼの瞳にみるみる間に涙が盛り上がり、ぽろりと零れた。道子はぎよっとして中途半端に腕を伸ばした。

『トウコ様、起き上がられて・・・! 良かった。良かった。このまま目を覚まされないかもしれないかと』

「ごめんなさい、ずっと無視して」

『申し訳ありません、私の所為であるような危険な目に。私の所為です』

子供のようにぼろぼろと涙を零すティルノイゼを見ているうちに、道子の瞳にも涙が溢れて来た。

「貴方が怖い。あんな簡単に、ひ、人を殺すんだもん。でも、でも、助けてくれてありがとう」

道子はティルノイゼの肩に顔を埋めて嗚咽を上げた。ティルノイゼのほっそりした腕が遠慮がちに道子の背に回される。互いの傷を慰めるように、しばらく抱き合ったまま涙を流していた。

ようやく落ち着いたところで、ティルノイゼは優秀な女官らしくてきばきと道子の世話を焼き始めた。

散々泣いたせいかわ、頭も目も鼻も痛かったが、不思議と心は大分軽くなっていた。

（・・・思いつきり泣いちゃったけど、私ってばお風呂入ってなかったし、汚いじゃん・・・。ティルノイゼさん、気にならなかったかな）

道子は湯船にぶくぶくと沈みながら、今更ながら襲ってくる羞恥に耐えていた。

『トウコ様？ 御髪を流します』

「あ、はいはい」

道子は気持ち良さそうにバスタブに背中を預けて、ティルノイゼに髪を洗ってもらった。細い指が道子を労わるように優しく頭皮を撫でると、疲労も苦しみも泡になって消えて行くようだった。

（・・・どうかしてるのかも。人を殺した手が、今私の髪を洗っているのに・・・。この警戒心のなさときたら・・・）

「ティルノイゼさん」

『はい？』

「・・・・・・・・」

そつと目を開けると、アメシストの瞳をじっと見つめた。宝石のように澄んでいる瞳が、道子の心を汲み取ろうと真っ直ぐ見つめて来る。

（・・・・だけど。嫌いになんてなれない）

「・・・・私の事は、殺さないでね」

『・・・・・・・・？』

ティルノイゼは不思議そうな顔で頷いた。

道子はゆっくりバスタイムを楽しんだ後、ドレスに着替えてメイクを仕上げてもらった。その後は直ぐにゲスト・パーラーで食事を用意してもらった。肉類は口に出来ないで、なるべく味の薄いスープやハーブ・ブレッドを千切って口に入れた。胃が弱っているせいか、あまり多くは食べれなかったが、果物は何でも美味しく口にする事が出来た。

食後の紅茶を楽しんでいると、銀系の礼装に身を包むアシュレイが訪れた。

『道子、ようやく目を覚ましたと聞きました』

「・・・こんばんは、アシュレイ」

相変わらず優雅なアシュレイを目にして、道子は数日前の出来事を嘘のように感じた。

『体は大丈夫ですか？ 何か欲しい物があれば遠慮せず言って下さい』

道子は淡い笑みを浮かべたまま、首を傾げてアシュレイを見つめた。道子が言葉を解していない事は承知で、アシュレイはそのまま喋り続けた。

『ティルノイゼが迷惑を掛けました。道子から目を離すなど言っておいたのに、まさか宮殿の外へ連れ出してしまうとは思いませんでした。勝手な行動は許し難いですが、結果として久しぶりに姉の姿を見る事が出来たので、処罰の行方は貴方に決めてもらおうかと思いません。』

ですが・・・、宮殿の外は危険だと教えたのに。ティルノイゼに身を任せた貴方にも非はあります。こんな跡までつけて・・・』

アシュレイは咎めるような眼差しを道子に向けると、長い指を伸ばして道子の首筋を撫でた。道子はびくりと肩を揺らして身を引いた。

「アシュレイ？」

身を引いた事を誤魔化すように笑うと、アシュレイは少し意地悪そうな笑みを受けべた。

『道子にも非はあります。罰は受けてもらいますよ』

アシュレイは道子の腰を引き寄せて一瞬で距離を詰めると、ソファに柔らかに押し倒した。

（えっ！？）

道子は息を吞んでアシュレイをまじまじと下から見上げた。目の前で煌くロイヤル・ブルーの瞳が首筋を見つめている事に気づくと、脳裏にある記憶が思い浮かんだ。

（そういえばあの人に、首噛まれたっけ。まさか、跡残ってた？）

実際は唇で吸い付いた鬱血痕どころか、唇で魔力を吹き込んで出来たガ口王家の所有印が付いているのだが、道子は気付いていなかった。

『やはりあの人間だけは、殺しておけば良かったかもしれません』

不安そうに見上げる道子の瞳を見て、アシュレイはそっと微笑んだ。

『大丈夫です、跡形もなく綺麗にしてさしあげます』

「・・・何？ アシュレイ？」

『少し、じつとしていて・・・』

アシュレイの顔がどんどん下がって来るので、道子は真っ赤になつて顔を逸らした。パニツクを起こしていると、柔らかいさらさらとした髪が首筋と開いたデコルテを撫る。何をしているのだろうと、うつすら目を開いたところで首筋に濡れた感触がした。

「や・・・、ちよっ」

『<sup>エーテル</sup>魔力で相殺して・・・』

首筋で囁かれて道子は腰が砕けそうになった。

（心臓が止まる・・・！）

ちゅうつと首元に吸い付かれて、道子は思わず高い声を上げた。あの時と同じように、ただ吸われているだけとは思えない、じわりと体を侵食するような熱を感じた。痛みと快感の狭間で朦朧としていると、アシュレイがゆっくり身を起こした。

『私の属性を吹き込めばお終い。よく似合っていますよ』

アシュレイは満足そうに、道子の首筋に付いた青いクロスの紋様をなぞった。宝剣に百合と薔薇が絡まる繊細なデザインは、タトウーを入れたようにも見える。

道子は不安そうに首筋を抑えてアシュレイを見上げた。

『ふふ、所有印なんて入れたの初めてですよ。これで貴方はもう私の傍から離れられません。ロザリアに怒られそうですからね、彼女

が目<sup>め</sup>を覚<sup>さ</sup>ましたら解<sup>と</sup>いてあげましょ<sup>う</sup>」

「何<sup>なに</sup>? 何かした<sup>した</sup>?」

道子<sup>みちこ</sup>は不安<sup>ふあん</sup>そ<sup>そ</sup>うに首<sup>くび</sup>を摩<sup>さ</sup>っていたが、アシュレイ<sup>アシュレイ</sup>は何<sup>なに</sup>も教<sup>おし</sup>えず部<sup>ぶ</sup>屋<sup>や</sup>まで送<sup>おく</sup>った。

「何これ・・・!？」

道子は鏡に映る自分の首筋を見てぎょつとした。

うつすら燐光を放つ青い模様は、先程アシュレイに口付けられた位置にある。

(えー？ アシュレイがつけたの・・・落ちるかなあ？)

繊細な百合と剣の模様を指でなぞると、途端にアシュレイの唇の感触を思い出して頬が熱くなった。

鏡を直視出来ずに思わず視線を逸らしてしまう。

(アシュレイって何考えてるんだろう・・・。よくあんな恥ずかしい事出来るなあ。慣れてる感じがしたけど・・・、あんなに綺麗なんだもん、さぞモテルんでしょうよ)

首筋の模様は石鹸で洗っても落ちなかった。予想はしていたが、道子は納得が行かずしつこく首筋を洗った。

(普通本人の許可なく、人の体に勝手に刺青入れるかー!? まさかこれ、ずっと落ちないの!?)

『トウコ様？ もう随分お時間が経ちますが、いかがされましたか？』

長湯が過ぎる道子を案じて、ティルノイゼが様子を見に来たようだ。

「ティルノイゼさーん・・・」

道子の情けない声に釣られて、ティルノイゼは控えめに扉の傍に寄った。

『トウコ様？　いかがされましたか？』

「ティルノイゼさーん・・・」

『・・・？　失礼致します』

バスルームにティルノイゼが入って来ると、道子は裸体を隠しめせず、髪をかき上げて首筋を露にして見せた。

「洗っても落ちないの」

『まあ』

ティルノイゼは驚いたように目を見開いた。

「アシュレイの仕業です。何か光ってるし・・・ただの刺青じゃないのかもしれないけど」

『我が君の紋章ですわ。驚きました。まあ！　赤くなっているではありませんか。肌に傷がつかます』

ティルノイゼは慌てて道子の手からスポンジを取り上げた。

「落としたいの。どうにかならない？」

『恐れ多くも我が君の紋章です。私が触れる事は出来ません。それに、嫌がるようなものではありません。むしろ危険からトウコ様をお守り下さいます』

宥めるように湯を肩からかけられて、道子は不満そうにティルノイゼを振り返った。

「落としたいんです」

『ああ、ひつかいてはいけません。傷がつかます。肩も冷えています、湯船にお入り下さい』

ひよいと持ち上げられて、道子は「ひえっ」と間抜けな声を上げた。思いも寄らぬティルノイゼの行動に、首筋の事も忘れて為すがまま湯船に運ばれた。

「・・・ティルノイゼさん、力持ちですよ。そんなに華奢なのに」

『頭皮のマッサージを致しますね』

「ん？・・・ううん、いい気持ち」

『我が君が所有印をお与えになるなんて、トウコ様を本当に大切にされていらっしゃるんですね』

「・・・？」

『・・・二度と、トウコ様を危険な目に合わせないと誓います。お傍にいられる限り、命にかえてもお守り致します』

「ティルノイゼさん？」

真摯な声色に道子はうつすら目を開けて問いかけた。返事はないけれど、濡れた髪をゆるく持ち上げられた感覚がした。

ティルノイゼは濡れた髪を一房手に取ると、忠誠を誓うようにそつと口付けた。

「・・・・・・・・・・？」

道子はティルノイゼの所作には気づかず、返答がない事を怪訝に思ったが、間もなくマツサージが再開されるとまどろむように瞼を閉じた。

「・・・・・・・・やっぱり落ちないかあ」

湯から上がってナイトドレスに着替えた後も、道子は鏡面の前で不満そうに首筋を眺めていた。

『トウコ様、お疲れでしょう。今日は早くお休み下さい』

天蓋付きのベッドの傍に控えるティルノイゼを見て、道子は諦めたように傍に寄った。

「綺麗な模様なのがまだ救いだけど・・・」

道子はベッドに上がってからもしばらくブツブツ言っていたが、ティルノイゼが遮光カーテンを下ろすと諦めたように寝に入った。

翌日、道子はアシュレイを見るなり文句を言った。

「アシュレイ！ これ取れないんですけど」

『お早う、道子。よく似合っていますよ』

顔を寄せて、ちゅっと首筋にキスをする、道子は首筋を押さえ  
てぱっと飛びのいた。

照れたように視線を逸らすものだから、ついもつと構いたくなって  
一瞬で距離を詰めると細い腰をさらうように抱き寄せた。

『どうして逃げるのです？』

「わ、ちゅっと」

『クロツカスの花ですか？ トウコの黒髪によく映える。似合っ  
ていますよ』

「え？ ちゅっと、離して」

（何でこんなにスキンシップ激しいんだ！）

道子は焦りながら、頑丈な腕の中からどうにか逃げようともが  
いた。頭上で「くすっ」と笑う声が聞こえて思わずカッとなって怒鳴  
った。

「からかわないで！ そっちは慣れてるのかもしれないけど、こ  
ういうの困るんだってば！」

『道子』

優しく名を呼ばれて、道子の鼓動は大きく撥ねた。恥ずかしいよ  
うな、もどかしいような心地がして、とても視線を合わす事が出来  
ない。

「う……………」

固まってしまった道子を溶かすように、アシュレイは結い上げた  
黒髪にキスを繰り返した。

『ふふ、かわいい……………』

うるたえる道子がかわいくて、気付けば自然と微笑みが浮かんで  
いた。

アシュレイの優しい微笑に誘われて、道子は恐る恐る視線を上げ  
た。けれど直ぐに後悔した。煌くロイヤル・ブルーの瞳に捕らわれ  
て、もう逃げる事が出来ない。ゆっくり降りてくる唇を避ける事が  
出来なかった。

そつと唇が重なると、甘い痺れが道子の全身を駆け抜けた。震え  
るような吐息と共に唇が離れる。

濡れた漆黒の瞳とロイヤル・ブルーの瞳が交差する。

「……………」

（キスされた……………どうしてだろう。あ、また）

キスされる、そう思うと同時に唇が重なる。上唇をそつと食まれ  
ると、思わず声が漏れそうになった。

ドクッ。

強く鼓動が撥ねて、絶えるようにアシュレイの上着を掴んだ。

道子の腰に回された腕が更に強く引き寄せる。顔を傾けられて口付けが深くなると、とうとう道子は声を上げた。

「んうつ」

ドクンッ。

強く鼓動が撥ねる。道子の心臓は煩いくらいに鳴っていたが、不思議とアシュレイの早くなる鼓動も感じる事が出来た。目を閉じているのに、自分を見つめるロイヤル・ブルーの瞳に熱が灯るのが分かる。

「・・・んっ、まって」

静止の声を上げる道子の口の中に、熱いものが入り込んでくる。蹂躪するように舌を吸われて、道子の膝はがくがくと震えた。アシュレイが抱きしめてくれていなければ、倒れてしまっただろう。燃えるような熱は首筋から全身に広がって行っただけで、離れないと、止めない・・・そう思っているのに、思考はどんどん溶けて行く。むしろもっとアシュレイを感じたくて、強請るように舌を絡めた。

『道子・・・』

かすれた声が耳を擦る。

（心臓が壊れそう・・・）

きゅうつと胸が締め付けられて、道子は喘ぐように吐息を零した。

『……ああ、こんなつもりではなかったのに』

アシュレイは自ら入れた道子の所有印を撫でた。

『道子、貴方からの影響力は思った以上に強い。貴方の鼓動にこの私が震えてしまう』

「あ……」

アシュレイは道子の小さな手をそつと掴むと、押し当てるように自分の胸の上に置いた。一瞬、道子は戸惑ったように手に力を込めた。けれど直ぐに指先から伝わる鼓動に気付いて、問いかけるような眼差しで見上げてきた。

『分かりますか？ 今私と道子は深く繋がっています。貴方の中に流れる血も、脈打つ鼓動もこんなにはつきりと分かる。貴方にも私の鼓動が分かるはず』

「……アシュレイ？ 離して……」

道子は射抜くようなロイヤル・ブルーの眼差しから逃げるように視線を逸らした。いきなり襲われた激情から逃げ出したいのに、アシュレイの腕は少しも緩まない。

『怖がらないで』

「な、何で急に……こんな」

道子は空いている片手で首筋を押さえた。急に体を支配された熱は、全てこの首筋の模様が原因な気がしたのだ。

『ねえ道子、戯れに入れた所有印に、捕らわれたのは私の方かもしれません』

（流し目で見ないでー！）

凄みを増したアシュレイの色気に、道子はくらりと眩暈を起こした。

『道子？』

「……………もう無理」

アシュレイはぐったりする道子を抱き上げると、寝室に空間移動した。

道子はすっかり油断していた。熱に浮かされてよろめく身体を抱き上げてくれて、何処か木陰にでも連れて行ってくれるのだろうと思った。それなのに・・・。

とさり。下ろされた場所は滑らかなシートの上だった。見慣れぬ豪華な部屋に驚く間もなく、アシュレイがベッドの上にのし上がって来る。彼は背中の後じさる道子を逃がすまいと、道子の顔の両脇に手をついた。

「え、え？」

『道子』

ぼかんと見上げる道子を、熱のこもったロイヤル・ブルーの瞳が見下ろしている。

「アシュレイ？」

『・・・もつと貴方を感じてみたい』

端正な顔がゆっくり降りて来ると、道子はようやく我に帰った。

「待った」

道子は必死にアシュレイの胸を押し返すが、びくともしない。慌てる道子の様子を楽しむかのように、アシュレイは綺麗な笑顔を浮かべた。

『恥ずかしがる事はありませんよ』

「今何か都合のいい事言っただでしょ？ 絶対何か勘違いしてるでしょ！？」

アシュレイは胸に当てられた小さなそつと手を外すと、指先に羽のようなキスをした。それだけで道子は小動物のように震える。途端に未だ感じた事のない暖かな感情がアシュレイを満たした。

『・・・アンジェラの気持ちだが、今なら分かる気がします』

「・・・・・・・・」

（アンジェラって言った？・・・何か聞いた事あるな）

ゆっくり降りてくる唇に視線が吸い寄せられる。道子は慌てて顔を背けた。

「イヤだってば！ どうして急にこんな事するの！？」

『道子』

「ダメ！ 離れてっ。流されてこんな事したくない」

道子の全身から強い拒否が伝わって来て、アシュレイは苦笑すると共に幾分冷静になった。強引に迫る程己を見失っているわけではなかった。

『すみません、驚かせてしまいましたね』

ふっと拘束がなくなり、道子は恐々目を開けて身を起こした。

「・・・アシュレイ？」

『許してくれますか？ 貴方が嫌がる事はしたくありません』

アシュレイは許しを請うように道子の指先を自身の額に押し当てた。それから指先にキスを落とす。まるで何処かの姫君のように傳かれて、道子の溜飲はすっと下がった。

「・・・まあ、いいわよ。若いのよね、きっと。ムラムラする時もあるわよね・・・」

と、道子は検討違いな感想を漏らして照れくさそうに髪を撫でた。道子はアシュレイの外見年齢を、せいぜい二十代半ばだろうと読んでいるのだが、その予想が多いに外れている事を知るのももう少し先の話だ。

その後、アシュレイは道子を連れて水上庭園ウォーター・ガーデンの鳥小屋に移動すると、華やかな茶会を開いて道子を喜ばせた。高らかに響く道子の笑い声が晴れやかな空に消えて行く。拙い片言で鳥の名前を覚えようとする道子の様子を、アシュレイは柔らかな笑みを浮かべて見守っていた。

『・・・お変わりになりましたね。我が君』

傍に控えるシェヘラザードに言われて、アシュレイはそうかもしれないと、素直に頷いて見せた。

『・・・道子を見ていると、心が安らぐ』

『不思議な方ですね。我等に対してああも屈託なく笑える人間もいるのだと、初めて知りました』

『人間と言つても地上生まれではありませんからね。人と精霊の血塗られた歴史も確執も知らないでしょう。そもそも精霊を見たのも初めてのようですし』

『トウコ様は地上の様子をお知りになつたら、悲しまれるでしょうか？』

『わざわざ教える必要はありません。ティルノイゼに連れ出されて怖い思いをさせたばかりです。もうトウコを不安にさせたくはありません』

道子を見つめる主君の眼差しに労わりの色が浮かぶのを見て、シエヘラザードは驚きに目を見張った。他者を、それも人間を思い遣る姿は、在りし日の姉君の姿を思わせる。この先、主君があの人間の娘と心を添い遂げる事になるのなら、今度こそ御心のままに従おうと思う。シエヘラザードは頭を垂れると、万感の思いを込めて呟いた。

『・・・我が君の仰せの通りに』

+++++  
ダナ・サハディ120期、花の精霊が加護を与える、セイ季。  
ハイレイスフィア ケブラーホーン ノールディ  
精霊界の皇帝、天下始祖精霊はガ口暗黒史の预言通り、地上殲滅を  
エーヘルヴェスト ハロリアン

アンフル及由ゼムン  
光を地上に

ケプラーホーン

ロアノス大陸史より抜粋

[illegible]

もともと能天気な性格も幸いして、道子は直ぐに宮殿での生活に馴染んだ。片言ではあるが、精霊達と言葉を交わすようにもなり、割と楽しみながらこの世界について学び始めていた。地上で目の当りにした、彼等の残虐な一面を忘れたわけではなかったが、献身的に仕えてくれるティルノイズを始め、麗しい精霊達に姫君のように傳かれているうちにすっかり絆されてしまった。

「昔憧れていたお城での生活が実現したんだと思えば、楽しんだ方が得だっと思うのよね」

『トウコ様？』

ティルノイズは首を傾げながら、キリールのジュースを道子に差し出した。サンルームのソファーに寝そべっていた道子は、身体を起こすと慣れた仕草でグラスを受け取った。

『何でもない。ありがとう、ティル。・・・アシュレイは？』

『我が君でしたら、間もなくお戻りになるかと思います』

『戻る？ アシュレイ、何処に行っている？』

ティルノイズは答えを少し躊躇った。表情は変わらないが、片言の道子にも伝わるように説明しようと、言葉を考えてくれているのだろう。こういった間合いも傍ににいるうちに自然と分かるようになった事の一つだ。

『……先日、薔薇祭の招待状を、ローズ・ガーデン・パーティー 精霊界の諸侯に送りましたから、方々からご挨拶を兼ねて歓待を受けているのです』

『薔薇祭、いつ？』  
ローズ・ガーデン・パーティー

『間もなく、薔が開く頃に』

『すぐ？ ロザリア、会える？』

『はい』

すっかり頷くティルノイゼを見て、道子は安堵にも似たため息をついた。ロザリアはこの不思議な世界へ道子呼び寄せた張本人だ。泣きながら道子を「リリイ」と呼んだ少女とは、碌な会話も出来ずに別れたつきりだ。聞きたい事は山程あったが、あれからずっと母なる世界樹の中で眠っているらしく、姿を見る事は叶わなかった。アンフルラージュ それがようやく、間もなくこの宮殿で開かれる薔薇祭で会えるらしいのだ。ローズ・ガーデン・パーティー

『ロザリア、元気？』

『はい。母なる世界樹の御許におりますから』  
アンフルラージュ

『母なる世界樹、見る』  
アンフルラージュ

道子が立ち上がると、ティルノイゼは心得たようにテラスの扉を開いた。宮殿は巨大な母なる世界樹をコの字型に囲むように建てられており、内側の回廊に出れば何処からでも大樹を目の当りにする事が出来た。道子は回廊に出ると、降り注ぐ柔らかな光を全身で受け止めて深呼吸した。

(この中でロザリアは眠ってるんだ。どんな夢を見ているんだろう)

日に何度かはこうして母なる世界樹アンフルラージュの前に佇む道子を、ティルノイゼを始め、宮殿に仕える精霊達は好ましく見守っていた。静かな時間を邪魔せぬよう、姿は消しているものの彼等は道子の傍を通る時、親しみと敬意を込めて足元をふわりと風で揺らすのだ。

『トウコ』

『アンジェラ』

アシュレイによく似た面差しの麗しい精霊が、世界樹アンフルラージュの光を纏って現れた。身体は透けていて、輪郭も朧気なので、最初見た時はびっくり返りそうになったものだ。

『アシュレイが戻って来たわ』

『アシュレイ、戻った?』

アンジェラは綺麗な笑顔で頷いた。思わず魅了されてばーっとなる道子だったが、よく響く美声に名を呼ばれてぱつと振り向いた。

『道子、ただいま戻りました』

銀系の髪にロイヤル・ブルーの瞳を持つ、この世界の皇帝は腰を屈めると道子の頬にキスを送った。本来ストイックな性質の彼は、何故か道子には出会った当初から親切にしてくれて、何不自由なく宮殿で生活出来るようあれこれと気にかけてくれている。首筋に刺青のような、百合と宝剣の模様を入れられてからは、どうもスキン

シップが盛んになったような気がするが、まあ悪い気はしないので笑って受け流していた。

『お帰りなさい』

道子は頬を押さえて照れくさそうにしながらも、アシュレイの頬にキスをお返しした。頬にキスを受けて、アシュレイはようやく背筋を伸ばすと、道子が見た事もないような、綺麗な青薔薇を一輪差し出した。

『お土産です』

『わ、すごい。キレイ。青い』

（すごい。完全な青薔薇って育てるの難しいのよね？ しかも何かキラキラしてるし）

青薔薇に魅了されている道子を見て、アンジェラがくすりと笑った。同じ理由でアシュレイも楽しそうに口元を緩めた。

『ロザリアが嫉妬しているわ』

『え？ ロザリア？』

『ロザリアとは正反対の薔薇ね。あの子はクイーン・ルビー、真紅の薔薇の精霊だから』

『ふふ、ロザリアが怒る事は分かっていたのですけれど。道子は喜ぶと思って』

（ロザリアが怒る？ 何でだろう。それにしても、アンジェラはこうして透けていても姿を見せるのに、どうしてロザリアは出てこれないんだろう）

不思議そうにアシユレイ達と薔薇を見比べる様子を見て、アンジェラは朗らかに笑った。アシユレイの双子の姉である彼女は、アシユレイよりもずっと表情が豊かだ。気後れするような女神の如し美貌だが、笑うと春の陽だまりのように見る者を魅了する。

アンジェラの身体が透けて見えるのは、失った魔力を今も世界樹エーテルの中で取り戻しているからだと聞いた。身体を維持出来なくなる程の魔力をどうして失ったのかは知らないが、人間と精霊の不仲が起因しているのだろうと察しがついた。ロザリアが魔力を回復しているのも、同じ理由なのだろうと思う。この楽園のような世界にも「戦争」があるのだ。

口を閉ざした道子の肩をアシユレイはそっと抱きしめた。こういう時、彼等は道子の考えている事が分かるんじゃないかと思う。言葉にしなくても、顔に出さなくても、絶妙な間合いで此方の欲しい言葉や仕草をくれる。実際、相手の思考を読み取るのは精霊の習性の一つなのだが、道子は単純に彼等の気遣いの現われだと思っていた。

『ロザリア、まだ出てこれない？ アンジェラ、出てこれる』

『完全な成体になって、トウコを驚かせたいのよ。だからそれまでは、具現化したくないみたいよ』

『・・・・・・？』

首を傾げる道子を見て、横からアシユレイが口を挟んだ。

『ロザリアはまだ子供ですから、アンジェラのように姿を見せる力が足りないんですよ』

（・・・ロザリアが子供だって言うのは分かる。アンジェラと違って子供だから、出てこれないって事？）

『ふうん』

『道子、この後の予定は？』

『言葉、勉強する』

『大分話せるようになりましたね』

『まだまだ、です』

未だ拙い片言に変わりはないのだが、褒められると悪い気はしない。道子にはっこり笑った。

『皆とも、ロザリアとも、もっと話したい。勉強、頑張ります』

『ロザリアも喜ぶでしょう。さて、私は執務室に戻ります。また後程、様子を見に行きますね』

そう言ってアシユレイが従者を引き連れて消えると、アンジェラもすっと姿を消した。

（私も勉強頑張ろうっと）

道子は気合を込めてぐつと拳を作ると、言葉を学ぶべくいつものように私室へと向かった。

言葉を教える先生役はティルノイゼが務める事が多かったが、この日は四精霊、土の守護精霊であるヴェルグハルトが教えてくれる事になった。褐色の肌に道子と同じ黒髪を持つ彼は、長身だがあどけない顔立ちをしており、外見だけを見れば十代にも見える。そしてやはり類まれな美貌の持ち主でもあった。しかし初見ではその顔立ちよりも、光彩に煌くグリーン・アイズに惹かれた。ヴェルグハルトも己と似通う色彩を纏う道子に好印象を持っているようで、面識を得てからは比較的良好な道子の様子を見に来てくれる一精霊だった。ちなみに、未だ火と風の守護精霊とは面識がない。今度の薔薇祭では会えるかもしれないと、道子は密かに楽しみにしているのだ。ローズ・ガーデン・バディった。

『トウコ様、絵本を持って参りました』

ヴェルグハルトは卓上に可愛らしい挿絵の絵本を置いた。道子は「へえ」と興味深そうに手にとると、パラパラとページをめくった。

『わあ、キレイ。すごい。キラキラ』

挿絵は立体的に浮かび上がり、アニメーションのように動いた。

（ハリー・ポッターの世界みたい。絵が動いている！）

『ハニーサックルのエルフ、ピピが、世界中を旅するお話です。続編が幾つもあります。子供の頃に一度は読むととても有名な絵本です』

『エルフ？』

道子が尋ねると、『これです』とヴェルグハルトが挿絵を指した。半透明の可愛らしい小さな精霊が、ぺこりとお辞儀をした。

『僕はピピ。西の霧の谷で生まれた、ハニーサックルのエルフだ』

『わっ！ びつくり。喋った』

驚いて本を離すと、本が閉じるの同時に軽快なエルフの姿も消えた。目を丸くする道子の様子を、ヴェルグハルトは心なし楽しそうに見つめていた。

『絵本の文字は、全て登場人物が音声でしゃべってくれるんです。読み書きを覚えるのに捗ります』

『へっえー。なるほど』

『難易度は表紙を見れば分かります。学習レベルに合わせて絵本を選ぶと良いですよ』

『これは、一番始め？』

『はい、第一巻です。巻数も表紙に書いてあります。第一巻はピピの故郷が舞台です。基本的な単語が出てきます』

『ありがとう！ 凄く嬉しい。楽しい絵本です。続きは、図書室にある？』

『はい。ティルノイゼに聞くと良いですよ』

『ヴェルグハルトも、読んだの？』

『はい。結構読みましたよ。今も続編が刊行されていますから、大分知らない巻も増えていますよが』

『ふふ、絵本読む、ヴェルグハルト、かわいい』

道子が微笑ましそうに笑うと、ヴェルグハルトも似たような笑みを浮かべた。

『ありがとうございます。絵本をお読みになるトウコ様も、おかわいらしいですよ』

『えー、私、もう子供じゃない』

三十路も半ばになるのだと言いたかったが、年の事をどう言えば良いのか分からなかった。

『ヴェルグハルト、年、いくつ？』

『数え方はもう覚えましたが？』

（確か十八進法よね。でも季節とか年号とか複雑過ぎて分からないんだよねあ）

曖昧に頷く道子を見てヴェルグハルトは微笑んだ。

『十八ヶ月経つと一年と数えます。三ヶ月ごとに季号が変わります。それぞれ季号を司る精霊エーテルがいて、魔力の増減にも関わるので、覚えておくと良いでしょう。』

精霊が成体になるまでの時間は個体差がありますが、私は我が君

から生誕祝福を受けた四精霊ですから・・・、創世記の頃には既に成体でした。つまり、軽く一億歳は生きている事になります」

「一臆・・・」

いまいちピンと来ない道子は、紙面に100と書いて見せた。ヴェルグハルトが首をふるたび、0を追加して行き、ようやく頷く頃には桁が一臆を超えていた。

「え？ 年？ これ、ヴェルグハルトの年？」

「はい」

「・・・・・・」

道子はおそろおそろ、隣に20（十進数変換では約三十六）と書いて、自身を指した。これが自分の年だとシエスチャーで伝えると、微笑ましいものを見るような眼差しで頷かれた。

「え、マジで？ 一億歳なの??？」

道子の脳裏には宇宙が広がった。

考え込む道子を見て、ヴェルグハルトは安心させるように笑いかけた。

『全ての精霊が長命なわけではありません。人間の数倍を生きる種が殆どですが、中にはわずか数日を生きる短命種もあります』

『・・・ヴェルグハルト、本当？ 一億歳？？・・・若い』

外見だけを見れば、せいぜい十七、八に見える。道子よりもずっと若い外見でありながら、一臆歳と言われてもとても信じられなかった。

『この姿でいる事が多いですが、私を含め四精霊は皆変幻自在です。外見ならこのように・・・』

そう言ってヴェルグハルトは長い髭を蓄えた老人に変化した。

『えっ』

『驚かれましたか？ 年はおろか、性別や肌の色まで変える事が出来ます。基本的には、己の属性色を纏っているので、普段はこの姿を取っているのですが』

道子は目を丸くしてコロコロと姿を変えるヴェルグハルトを見つめた。

（何が起きてももう驚かないと思ってたけど・・・。度肝抜かれた・

・・)

『私は土の守護精霊ですので、ご覧の通り土色の肌に、新緑の瞳を持っています。火の守護精霊、ミネルヴァスは茶褐色の肌に、ワインレッドの髪色、金色の瞳を持っています。風の守護精霊、ユリーシエラは白い肌に、白髪、銀色の瞳を持っています。シエヘラザードと我が君はご存知ですよね』

『シエヘラザード、水の守護精霊。アシュレイは？』

『我が君は母なる世界樹から生誕祝福を受けた<sup>ケブラーホーン</sup>天下始祖精霊です。<sup>アンフルラージュ</sup>叡智と安らぎを司り、森羅万象を掌握するこの世界の<sup>ハーレイスファイア</sup>皇帝です。我が君の姉君、幽限の君は夢と喜びを司り、我が君と共に<sup>ハーレイスファイア</sup>精霊界を統治されておられます』

『・・・アシュレイは、いくつ？』

恐る恐る尋ねる道子を見て、ヴェルグハルトはくすりと笑った。

『お察しの通り、私よりも長い時を生きています』

(くらっときた・・・。外見なんて全然あてにならないじゃん。・・・分かってた事だけど、本当に私とは全然違う生き物なんだな。ていうか、)

『ヴェルグハルト、アシュレイが父？？ 母は？』

『精霊に人間のような血の繋がりはありませんが・・・、森羅万象に大小様々な命が宿り、母なる世界樹<sup>アンフルラージュ エーテル</sup>の魔力を吸収して成長して行きます。ですから、世界樹は我等の母そのものと言えるでしょう。

更に言えば、我等四精霊は我が君の魔力を糧に生まれ、生誕祝福を授かったので、トウコ様がおっしゃるように我が君を父と呼んでも語弊はないかもしれません』

『・・・私の国にも精霊いたよ』

『トウコ様のお国ですか？』

『八百万の神様、山にも、かまどにも、お手洗いにも神様がいます。自然にも、家にも、いっぱいいます神様がいます。ヴェルグハルトは、土の精霊。とてもえらいね』

拙い道子の言葉はヴェルグハルトの胸を打った。とても尊い存在なのだ、そう思ってくれている気持ち伝わって来る。それは酷く懐かしくて、心地よい感覚だった。はるか昔、地上と精霊界を自由に行き来出来た頃、人は皆精霊を尊び、慎ましく暮らしていた。地上は心地良く、多くの精霊が生まれていた。それなのに・・・。

『ヴェルグハルト？』

『・・・いえ、トウコ様のお言葉が嬉しかったのです』

『？』

不思議そうにこちらを見つめる道子に、ヴェルグハルトは優しい笑みを浮かべた。

『昔と違い、今はもう精霊は地上に宿りません。人はもう、トウコ様のように我等を受け入れる事が出来ないのです。ですが、今は亡きリリイという娘がクイーン・ルビーの精霊に生誕祝福を授けまし

た。人が精霊に生誕祝福を与える事は久しく無かったので、我が君も興味をお持ちになり、地上の娘と精霊の元をよく訪ねていらっしやいました』

『その精霊・・・』

『はい、ロザリアの事です。トウコ様は、ロザリアに呼ばれたと聞きました。リリイの最期は聞きましたか？』

道子は咄嗟に答える事が出来なかった。リリイとロザリアの顛末は、知っていると言えば、知っている。此方にきた当初、断片的にアシュレイに映像で見せられたからだ。

『・・・リリイはロザリアを匿っている事が周囲に知られて、同じ人の手により殺されました。人にとって精霊は既に忌避の対象でしたから、リリイは異端と見なされたのです』

ヴェルグハルトの口調からは怒りや悲しみの感情が読み取れず、道子はどう答えて良いか分からなかった。窺うように沈黙していると、彼はゆっくりと口を開いた。

『私達にも自我や心はありますが、周囲にとても同調しやすいのです。更に我が君の魔力支配エーテルを受けているので、対峙する人が好戦的であれば、先ず相手が生き残る事はありません。ですが・・・、トウコ様がいらしてから、我が君はお変わりになられた』

『そう？ アシュレイは、ずっと優しい。テイルも、ヴェルグハルトも』

『それは、貴方が私達を少しも恐れないから。・・・人にとって、

私達は向けられる思念を跳ね返す鏡なのです』

ヴェルグハルトの好意的な言葉が嬉しくて、道子は何も言う事が出来なかったが、地上ハロリアンで見た彼等の残虐な一面を、心底怖いと感じた事を苦々しく思い出した。

『・・・地上ハロリアンの事を思い浮かべましたね。無理ありません、怖い思いをしたのですから。ですが、貴方は再び心を開いてくれた。その強さや優しさを、我が君も幽限の君もお認めになられたのでしょ  
う』

『え?』

『トウコ様が遠い地からいらした事は聞いております。大切な方達を残してきたとも。ですが、私はこのままトウコ様に、我が君のお傍にいて欲しいと思っています』

『うーん・・・』

道子は曖昧に返事をして視線を泳がせた。割り切ってお姫様生活を満喫はしているが、帰れるものなら帰りたい。それは今も変わらない一番の願いだった。

ヴェルグハルトは残念そうに微笑み、それ以上は言及せず紅茶を口に運んだ。

夜になり（陽は沈まないが）、アシュレイが道子の私室を訪れると、道子はアシュレイの整った顔立ちをまじまじと見つめた。

『どうかしました？ そんなに熱心に見つめて』

アシュレイはリキールワインの入ったグラスを傾けながら、可笑しそうに道子を見つめ返した。

（・・・アシュレイも一億歳なんだよね。外見だけなら二十代だけど・・・。一臆年って、もう歴史じゃん。生ける歴史？ いや、歩く歴史？）

『・・・何かとても不本意な事を考えていますね』

道子は慌てて首を左右に振った。

『あ、いや。えっと、ヴェルグハルト、一億歳って言ってた』

『・・・？ 生れ落ちた年月の事ですか？』

『うん。アシュレイの母も世界樹？』  
アンフルラージュ

『はい。世界樹は全ての精霊の母ですから』  
アンフルラージュ

（・・・でも母って言っても、人間みたいに受胎するわけじゃないんだよね。八百万の神様みたいに、物や自然に宿るんだから。

アンフルラージュ  
精霊が生きていく為のエネルギー源を、世界樹が供給してくれるから、母という尊称を使うのかな。母って女性を指すけど、母親のお腹を必要とせず命は生まれるのに、男女の区別ってあるの？・・・外見はコロコロ変えられるみたいだし、彼等の身体ってどうなってるんだろ・・・）

道子が思いふける様をアシュレイは面白そうに眺めていた。

『良かったら見てみますか？』

『え？』

『私の身体』

『！？』

道子はぎょつとして、ガタガタと椅子を鳴らした。思考を先読みされてこれ程動揺したのは初めてだった。

『私達は人間のように受胎による繁殖はしませんが、身体を重ねる事がありますよ』

(・・・何の為に？)

『それは時と場合によります』

『うつっ！！聞いてない』

(こ、こいつ……。もう何も考えない！ 考えないっ！ 考えないっ！)

羞恥に憤慨する道子が面白くて、アシュレイは更に言葉を続けた。

『道子はまだ子供なのに、いろいろと興味津々ですね。何でも教えて差し上げますから、遠慮なく聞いて下さいね』

『・・・・・・・・』

可愛らしく怒るかと思いきや、道子は何も反応を示さなかった。心からアシュレイの存在を締め出された事を感じて、悪ふざけが過ぎたと直ぐに反省した。

『すみません、冗談です。怒りましたか？』

非礼を詫びると、道子の心が優しく揺れた。黒い瞳にアシュレイを映して、仕方ないなあ、という呆れを含んだ好意的な感情を向けてくる。その心地よい思念を受けて、アシュレイは優しい笑みを浮かべた。アシュレイの笑顔に道子が魅了されて鼓動を早める。そうすると、アシュレイの胸も温かくなるのだった。

『好きですよ、道子』

『私も、好き。アシュレイ』

アシュレイが気軽に言うので、道子も親しみを込めて即答した。くすぐったいような、ふわふわとした心地でリキールを煽れば、いつもより気持ち良く酔える気がした。

それから間もなく、ローズ・ガーデン・パーティー薔薇歳が開催された。

ローズ・ガーデン・パーティー

薔薇際は古くから続く祭典の一つで、数日に渡り催される実に華やかなパーティーだ。この期間はアシュレイの計らいで昼夜がある。日中は色とりどりのフラワーシャワーが降り注ぎ、夜はオーロラカーテンが空を飾る。円を描く豪華なパーゴラの下では、麗しい精霊達が音楽を奏で、宙に浮かび上がりダンスを舞った。そして薔薇の精霊達は、祝福を込めて皆に薔薇を贈るのだ。

祭典初日、道子はライトグリーンのスフオンドレスに身を包み、華やかに髪を結い上げていた。装飾品はブルーオパールとイエローサファイアで統一し、背中には小さな妖精の羽がついている。ティルノイゼにも大分手伝ってもらったが、全体的なコーディネートは道子によるものだ。妖精風にメイクを仕上げると、道子は嬉しそうに鏡面の前で出来栄をチェックした。

『羽、すごいねー』

『よくお似合いです。羽は魔力による幻影ですから、気兼ねなくソファアーに寄りかかれますよ』

ティルノイゼはドレスのリボンを少し調整した後、満足そうに頷いて見せた。普段からドレスシ・な格好をしているが、彼女もこの日は一段と美しく着飾っていた。会場にはティルノイゼのように、美々しく着飾る精霊達も大勢いるが、エキセントリックな原色や、仮装パーティーと間違えたかのような格好の精霊も大勢いたのだ。道子も仮装気分でピーターパンのティンカーベルと、エバーアフターのドリユー・バリモアを意識して着飾ってみたのだった。

『パーティー、初めて。嬉しい！　楽しい！』

『トウコ様に薔薇の祝福がありますように』

ティルノイゼは恭しく道子の手の甲にキスを落とした。少しドキドキしながら、ありがとうと笑うと、アメシストの瞳を細めて綺麗な笑顔を返してくれた。

『今日は精霊達からたくさん祝福をもらえますよ。トウコ様は我が君の大切な客人ですから、皆も挨拶したいのでしよう』

『ええ？』

『さあ我が君がお待ちです。参りましょう』

ティルノイゼに促されて、道子はわくわくした気持ちでガーデンへと向かった。

道子の姿に気づいたアシュレイは、直ぐに歓談を打ち切り優雅に近づいて来た。周囲の精霊が主君にさつと道を譲るので、アシュレイは道子を目指して真っ直ぐに歩いて来る。類まれな美貌の皇帝は、白地のローブに身を包み、サファイヤをあしらったレイピアを帯剣していた。普段よりも華美な装飾で着飾るアシュレイは、呼吸も忘れる程美しかった。周囲の視線にも気づかず、ぽーっとなる道子の前にいつの間にかアシュレイは立っていた。

『これはこれは。可愛らしい妖精ですね』

『ありがと。アシュレイもかわいい』

『かわいい？』

アシュレイはくすりと笑った。その微笑みが眩しすぎて、道子は直視出来ずに視線を落とした。

『ティルノイゼ、羽、くれた』

道子は照れ隠しに『ほら』と背中の中の羽を見せた。アシュレイは『よく似合っていますよ』と本心から賛辞を送ると、そっと道子の背中に腕を回して、石柱のパーゴラへと促した。

『綺麗・・・』

道子は美しい石柱の回廊に目を奪われた。弦薔薇、クレマチス、ブドウや藤が石柱に絡まり、可憐な青い鳥、キャノメラナやチヨウ達が羽を休めている。光の粒子のような、小さな妖精<sup>エルフ</sup>が主君に道を譲るように左右に分かれて行く中、道子はアシュレイに手を引かれながらゆっくりと歩いて行った。

『ロザリアは具現化するなり貴方の元へ飛んで行きそうな勢いですが、私がエスコートするからと、この先に待たせているんです』

『ロザリア？ どこ？』

『ローズ・ガーデンにいます。実は道子の私室のプライベート・ガーデンと繋がっているんです』

『へえ？』

『・・・ロザリアには地上<sup>ハロリアン</sup>で過ごしていた頃以上に、豊かなガーデンを与えてやりたかったので、道子のプライベート・ガーデンに繋がるローズ・ガーデンを作ったのです。苦しんできた分だけ、これからは幸せになって欲しいのです』

『・・・・・・・・』

『あの子は、貴方の事をとても深く慕っています』

『アシュレイ』

道子は足を止めると静かな眼差しで見上げた。宝石のような瞳が真っ直ぐに見つめ返してくる。けれど、せりあがつて来た言葉は喉の奥に引っかかって出て来ない。道子の後ろめたい心を、きっとアシュレイは知っているだろう。言葉の先を促さない事で、彼が望む事を道子に思い知らせた。

（ごめん、アシュレイ。ロザリア。最初から答えが決まっていた）

視線を落としたまま足を踏み出した道子に合わせて、アシュレイもゆつくりと歩き出した。しよげたように俯く道子の背中を、大きな手が慰めるように撫でてくれる。

『・・・誰にも遠慮せず、道子の思う最良の道を選べば良いですよ』

道子ははっとして顔を上げた。探るように穏やかな青い双眸を見つめる。

『ふふ。私には、ロザリアの答えも最初から決まっているように思えますが』

『え？』

『答えを急がず、今は祭典を楽しんで下さい』

回廊の果てに辿りつくと、アシュレイは両開きの格子扉に手を掛けた。扉にはしっかりと鎖が巻き付いていたが、アシュレイが触れると音も無く消えた。

『ブレスレットをしていれば、道子も触れるだけで扉は開きます』

道子はアシュレイにもらった、青い精霊石を埋め込んだブレスレットを見つめた。魔力エーテルを持たない道子にとって、此处で暮らす必需品である。

『分かりました。ありがとうございます』

アシュレイにエスコートされて、道子は童話の挿絵にあるようなローズ・ガーデンに足を踏み入れた。ロマンティックな薔薇のアーチをくぐると、アーチに吊るされたウィンドウ・チャイムが澄んだ音を立てた。思わず足を止める道子の前に、豊かな金髪の美少女が現れた。初めて会った時よりも随分大きくなっているが、ルビーのような双眸は記憶にあるままだった。

『ロザリア？』

道子が微笑むと、無表情だった少女の瞳に見る間に涙が盛り上がり、ぼろりと零れた。出会った時と同じ反応なので思わず笑ってし

まった。ロザリアは両手を広げて駆け寄ると、しっかりと抱きついてきた。道子よりも背の高くなった少女は、道子の肩に腕を回して顔を埋めるようにして抱きついていて。思いのほか力強い抱擁に、少し息苦しさを覚えたが、道子は我慢してロザリアの好きなようにさせた。

堪えるような嗚咽と熱い頬が少女の想いの深さを道子に伝える。最初は笑みを零した道子も、次第に切ない気持ちになって瞳を閉じた。

『久しぶり。やっと、会えた。私ずっと、待ってた』

『・・・っ、トウコ、会いたかった!』

『うん』

『ごめんなさい、傍にいらなくて。此方に来ただけで、不安そうにしているトウコの傍を離れるのは嫌だったけど、この先ずっと傍にいる為にも、どうしても成体になっておきたかったの』

『・・・』

風になびく柔らかな金髪を撫でながら、道子は言葉を探して沈黙した。

『トウコに会えて幸せ。生まれて来てくれて、ありがとう』

ロザリアは涙に濡れた顔を上げると、天使のような笑顔を見せた。純粹な祝福の言葉に、道子は少し感動してしまった。

『・・・うん』

『それから、私が成体になるまで待つてくれてありがとう。今度は、私がトウコについて行く。もう離れたくない、ずっと一緒にいたい』

『え・・・？』

『あれ・・・、トウコ、これ』

ロザリアは眉を潜めて道子の首筋をじっと見つめた。アシュレイにつけられた百合と宝剣の模様の思い出して、道子がどう答えようか迷っていると、ふいにアシュレイが口を開いた。

『私も道子を気に入っているんです。印を入れておけば、いろいろと安全ですから』

『でもこれじゃあ、トウコは我が君の傍を離れられないじゃないですか』

ロザリアは不満そうだ。道子はきよとした顔でアシュレイを見つめた。

『確かにその印がある限り、道子は私から離れる事が出来ません。心配しなくても、ロザリアが戻ってきたら、解消するつもりでしたよ』

アシュレイが道子の首筋に手を伸ばすと、ロザリアはするりと道子の肩にかけた腕を解いた。紅玉の瞳で成り行きを見守っている。道子は期待を込めた眼差しでアシュレイを見上げた。

（これ、消えるのかな？）

『……全く、やけに嬉しそうですね』

『消える？』

『はい。ロザリアも戻って来ましたし、もう要りませんね……』

それは最初から決めていた事だが、妙に残念な気持ちになった。名残惜しく指が印を撫で上げる。ぴくりと反応する道子を見て、彼女の震える鼓動をもつと感じたいという衝動が湧き上がった。けれど、一步離れた処でロザリアがぴりぴりしているので、衝動を抑えて印を消した。指が離れると、青い模様は跡形もなく消えていた。

『……終わった？』

不思議そうに首を押さえる道子をみて、思わず手を伸ばしそうになり、アシュレイは慌てて手の平をぐつと握り締めた。消えてしまった道子との共感がもう既に恋しかった。馬鹿な、と思う。これから道子はこの世界を去ると言うのに……。

『終わったよ』

ロザリアはにこつと笑うと、道子の腕に両手をからめた。

『良かった、消えない、思った』

『……此処には誰も来ませんから、ゆっくり過ぐすと良いでしょう』

ロザリアと道子を気遣うようにアシュレイが辞そうとするので、

道子はいいのに、と引きとめようとした。しかし、

『ありがとうございます、我が君』

ロザリアが嬉しそうに謝辞を口にするので、道子は言葉を続ける事が出来なかった。アシュレイは穏やかに頷くと、すうつと消えた。

『我が君は、今までずっとトウコの傍に居たんだもん。今度はロゼの番！』

『ロゼ、かわいい』

ロザリアはぽつと赤くなると、『トウコの方が！』と照れたように視線を泳がせた。比類なき美少女が、道子の一言に一喜一憂するのだから、本当に可愛らしい。

ここまで純粋な好意を向けられた事のない道子は、どう接して良いか分からず戸惑ってしまう。・・・なるべく傷つけないけれど、住む世界が違うのだと分かってもらわなくてはいけない。覚悟を決めて口を開いた。

『ロゼ、ごめんなさい。私、傍にいられない』

『トウコ?』

『皆、すごく親切。すごく嬉しかった。たくさん、たくさん、ありがとう。でも、私の家、此处違う』

『うん、分かってる』

『・・・あのね、ロゼ』

ロザリアは綻ぶように笑った。道子は躊躇うように言葉を切つて、その眩しい笑顔を見つめた。

『ロゼ、トウコと一緒に行く』

『だめだよ』

『どうして?』

『私の家、狭い』

『大丈夫、どんな場所でもトウコがいればそれでいい』

『此处と、全然違う』

『平気!』

（そうじゃなくて・・・）

道子は困ったようにロゼを見つめた。ロゼと道子と一緒に暮らしに行くには、もっと大きな問題があるのに、不得手な言葉では上手く説明出来そうにない。考えて、そつとロゼの白い手をとると、自分の額に押し当てた。

道子はずいこの間まで生活していた、東京の様子をなるべく鮮明に脳裏に描いた。押し寄せる人ごみ、空を覆うビル郡、雑多な喧騒の街。美しい精霊界とはまるで違う。ロザリアの糧になるような自然の恵みは殆どない。当然、精霊なんて見た事もない。道子の暮らす街で、ロザリアは間違いなく孤独だし、生きて行けるかも分からない。

それに、此方へ来てからもう何ヶ月経ったのだろうか？ 元の生活に戻れたところで、職を失っているかもしれないし、家賃も滞納していて家を追い出されるかもしれない。自分の生活にいつぱいいっぱい、とてもロザリアに構っている余裕はないだろう。

しかし、道子の不安な気持ちを読んでも尚、ロザリアはにっこり笑った。安心させるように額に押し当てられた手をぎゅっと握り締める。

『心配しないで、トウコ。ロゼ、いっぱい魔力を補給したから大丈夫。トウコの世界でも生きていけるよ。トウコの願いは何でも叶えてあげる！ ロゼ、きつと淒く役に立つよ！』

『・・・・・・・・』

『トウコがどうしてそんなに心配するのか、ロゼ分らない。ロゼ、

クイーン・ルビーの精霊だよ？ 薔薇の魔力はとっても強力なんだから。この先、トウコについて行って魔力が減る一方だとしても、トウコの一生に添い遂げるには十分足りるよ』

『・・・ロゼ、とても凄い。でも、私の世界、魔法ない。精霊ない。私、心配。困る』

道子の悲観的な心を読み取って、ロザリアの顔が次第に悲しみに曇って行く。道子の心はちりちりと痛んだが、思わせぶりな態度は取りたくないから、非日常への嫌悪を隠さず心と目で伝えた。

『・・・トウコは、ロゼがいたら、そんなに困るの？』

『困る。ごめんね』

『ロゼの事、キライなの？』

『嫌い、ない。好き。でも、傍にいられない』

『どうして？ リリイは一緒にいるって、言ってくれた！』

ロザリアの紅玉の瞳に涙がにじんだ。道子は思わず手を伸ばして抱きしめた。強いくらいの力でロザリアはしがみついてくる。

『私、リリイ、違う』

『分かってるっ！ トウコはリリイじゃないけど、違うけど、でも！ リリイの欠片を感じるの。ずっとリリイを探していて、ようやくトウコを見つけた。もう絶対に離れたくない。トウコの傍にいられないなら、もう消えてなくなりたいっ・・・！』

『ロゼ・・・』

『トウコの傍にいさせて。何でもしてあげる・・・。何でも言う事聞くから・・・』

ロゼはぐすぐすと鼻をすりながら、甘えるように道子の肩に頭を乗せた。道子はふわふわの金髪を撫でながら、どうしたものかと沈黙した。幼い真っ直ぐな言葉と泣き声が、道子の心を強く揺さぶる。正直かなり絆されそうだった。しかし気軽に了承するわけにも行かず、答えあぐねて結局無言のまま抱きしめる事しか出来なかった。

『・・・今直ぐ帰る、ない。ローズ・ガーデン・パーティー薔薇際、楽しもう？　ロゼ、案内してくれる？』

（泣かないで、笑って）

ふわふわの金髪を優しく撫でるうちに、次第にロザリアは落ち着いてきた。涙を拭って道子を見つめると、綻ぶように笑った。

『・・・うん、いっぱいガーデンを案内してあげる。ロゼに任せて』

道子は目を細めてその笑顔を見つめた。優しい子だな、と思う。本当はまだ納得なんてしていないだろうに、道子を困らせないように、気遣ってくれている。

その後はどちらも別れ話には触れず、仲良く手を繋いでローズ・ガーデンの探検を楽しんだ。道行く精霊達の華麗な、或いは奇抜な衣装を楽しみ、時には道子もおどけて彼等に手を引かれて踊りの輪

に加わった。

光のカーテンが空を飾る夜が訪れても、アシュレイは道子の前に姿を現さなかった。普段は宮殿のゲスト・パーラーで夕食を取っているが、この日はガーデンに置かれた長テーブルに美味しそうな料理が次から次へと運ばれてくるので、道子も遠慮せずご馳走になった。ロザリアも道子の隣で少しだけ果物を小さく切って口に運んでいる。

（何だか等身大のお人形みたい）

ロザリアの口元を拭いながら、道子はくすりと笑った。ロザリアは憧憬の眼差しで道子を見上げている。一体道子の何処にロザリアはそんなにも執着するのだろう。一日を共に過ごして、疑問は深まるばかりだった。

ローズ・ガーデンに移動して二人きりになると、道子は別れ話に着火するかも、と懸念しつつ我慢出来ずに尋ねてしまった。

『私、リリイに似てる？』

ロザリアはハッとした表情で道子を見つめて、それから大人びた微笑を浮かべた。

『・・・似ていないよ。リリイとトウコは全然違う』

『ロゼは、どうして・・・』

道子の言いたい事を察して、ロザリアは強い眼差しで黒い瞳を覗き込んだ。

『ロゼにとってトウコは特別な。リリイの代わりっていう意味じゃないよ。確かにリリイもトウコも同じ人間だけど、髪の色も目の色も、毎日の暮らしも全然違う。別人だよ。ただね、リリイの命の欠片をトウコは持っているの。言い換えれば、トウコの命の欠片をリリイは持っていたの。ロゼはリリイの祈りから生まれた精霊だから、故郷は精霊界じゃない、トウコの傍なんだと思う』

『リリイの、欠片……？』

『母なる世界樹を前にして、全ての命は平等なり、だよ。命あるものは皆いずれ朽ちて、また再生するの。遠い世界で育ったトウコも、母なる世界樹の子供なんだよ。』

リリイは死んだ後、時間をかけて、いろんなものに姿形を変えて命を再生したんだよ。例えば一握りの土だったり、小さな妖精<sup>エルフ</sup>だったり、そして……トウコに』

『む、難しい。私と、リリイ、違う。だけど、命の欠片……同じ』

何とか理解しようと頭を捻る道子を見て、ロザリアはくすりと笑った。

『つまり、ロゼはトウコが大好き！　って事だよ』

『……なるほど』

『嘘じゃないよ。トウコの為なら何でもしてあげる』

そう言つと、ロザリアは甘えるように道子の膝に頭を乗せた。猫のように瞳を閉じてうずくまる。道子は柔らかな金髪をそつと撫でた。

『リリイは、どんな人だったの？』

『・・・リリイは庭仕事が好きで、日の出と共に起きてガーデンのお世話をするの。唾の広い麦藁帽子をかぶって、分厚い皮手袋をして、凄く変てこな格好なんだよ。』

ロゼはもともと、リリイがお世話をしている薔薇の一つだったの。あの頃、リリイは毎日泣いてた。リリイに庭仕事を教えてくれた大切な人が亡くなったんだって。薔薇のお世話をしながら、ずっと寂しいって泣いてたよ。慰めてあげたいなあって、思った時には、いつの間にか薔薇に宿ってたの。いつ声掛けよう、今日こそ掛けよう、リリイ驚くかなあって凄くどきどきしたよ。初めてリリイと言葉を交わした日の事、今でも覚えてるよ。リリイ、笑ってくれたんだ。凄く嬉しかった』

『良かったね』

『うん。本当に良かった。リリイは泣かなくなったよ。きらきら笑ってた。だけど、暫くしてロゼの事が他の人間に知られて、何でかリリイは酷く怒られたみたい。ロゼの魔力も大分強くなっていたから、やろうと思えばリリイを連れて何処へでも行けたんだけど、リリイは絶対にガーデンを離れるのは嫌だって言ってる。聞いてくれなかった。・・・でもあんな事になるのなら、さっさと精霊界に連れて行けば良かったって、凄く後悔してる。』

ロゼはリリイがいれば他には何もいらなかったのに、周りの人間達が滅茶苦茶にしたの。リリイがロゼと仲良くしていたからって、どうしてリリイは殺されなければいけなかったの？ ロゼとリリイが一体どんな悪い事をしたって言うの？』

『ロゼ・・・』

「・・・ロゼの知っている人間は、リリイとトウコと、リリイに酷い事をした人間達だけ。リリイとトウコ以外の人間なんて大嫌いだけど、ロゼがトウコの傍にいるせいで、トウコを酷い目に合わせたりは絶対しない。もし、トウコの傍にいられるなら、ロゼはトウコの身につけているブレスレットや、首飾りに身を隠して、二度と喋らないし姿も見せない。トウコは普段通りに過ごせばいいよ。ただ、傍にいて、どんな事からも守らせて欲しいの。・・・怪我や病気をしないで、大切な人達と過ごして、幸せに生きて、最期まで見守つたら、その時はトウコが迷子にならないように手を引いて母なる世界樹まで連れて行ってあげる・・・」

ロザリアの閉じた瞳から涙が零れた。道子は少し潤んだ眼差しで見下ろしながら、何とか震えずに、ありがとうと口にした。

（この子は本当に純粋なんだ。・・・あんまり感動させないでよ）

此処まで一途に想ってくれる相手を、果たして断る事が出来るだろうか？ 道子は決意が揺れるのを感じずにはいらなかった。

ロザリアは道子の傍を片時も離れたがらず、眠る時も道子のベッドに潜り込んできた。道子の休まる間がないとティルノイゼが嗜めると、威嚇するように唸った。外見は十代後半に見えるが、内面はまだまだ子供のようだ。しかし道子に非常に懐いてくれている様は可愛らしいし、嬉しいので好きなようにさせていた。

薔薇祭二日目はロザリアと一日遊んで終わった。アシュレイと少しも話せなかったので、三日目はアシュレイと話したくてティルノイゼに聞いてみた。

『アシュレイ、会える？』

道子にメイクをしながらティルノイゼは答えた。

『もちろんです。トウコ様でしたらいつでもお会い出来ます』

『何処に行けば、会える？』

『ガーデンでお会いにはなりませんでしたか？』

『初日は会えた。昨日は、会えない』

『変ですね。毎日お見えになるのに。・・・ああ、ロザリアに気を遣われたのでしょうか』

ティルノイゼはくすりと笑った。ロザリアは膨れっ面で、ドレスサー前に腰掛ける道子と、メイクしているティルノイゼを見つめて

いる。彼女は道子の身近に仕えるティルノイズに対して昨日からずっと嫉妬しているのだ。道子は苦笑を漏らした。

『そうかも。今日は会えるかな』

『トウコ様がお呼びになれば、御姿をお見せになられるでしょう』

『うん。ところでティル、アイシャドウ、綺麗。私、この色好き』

道子は鏡の中で微笑んだ。淡い紫色のアイシャドウに金色の控えめなラメは相性が良く、地味な道子の顔立ちを華やかに見せていた。ちなみに今日のメイクアップのコンセプトは、シェイクスピアの戯曲「真夏の夜の夢」に登場する妖精の女王タイターニアだ。Aラインの純白のドレスを身に纏い、ゆるくウェーブをかけた下ろし髪に、白薔薇で編んだ花冠をのせている。宝石はバイオレットサファイアを選んだ。ティルノイズの瞳を溶かしたような宝石だ。ロザリアは妬いているようだが、道子の好きな色なのでそこは我慢して欲しい。ロザリアには道子と色違いの真紅のドレスを着せた。道子のようにコテを当てずとも、天使のようなカーリーヘアの持ち主なので、<sup>くしけず</sup>梳った後ぼんと真紅の薔薇で編んだ花冠をのせて完成だ。宝石はもちろんルビーを身につけさせた。メイクなど要らない美少女なので、身支度は実に早いものだった。

背後でロザリアがイライラしているので、道子は先に外に行っていて良いと声を掛けたが、ロザリアは無言で首をふった。

『ふふ、ロザリアはトウコ様のお傍に居たいのでしょう』

『ティル、いつまでトウコの髪に触ってるの?』

ロザリアは不機嫌そうに尋ねた。

『ロゼ、言葉、悪い』

『だって・・・』

（かーわいい。ヤキモチ焼いてる、この子）

道子は緩みそうになる頬を何とか引き締めた。その様子を見てティルノイゼに、楽しんでいますね？ と苦笑されたが、ロザリアの分かりやすいヤキモチがかわいくて、道子はいよいよティルノイゼに笑顔を振りまいてはロザリアの反応を楽しんでしまうのだった。

身支度を終えてガーデンに下りると、今日も多種多様な精霊達で賑わっていた。中には見知った顔もちらほら見かける。連日訪れる精霊も少なくないようだ。おそろいの格好をしている道子とロザリアに、皆好ましいものを見る眼差しを向けてくれる。道子も笑顔で挨拶を口にした。

祭典中、薔薇の精霊達はゲストに薔薇を一輪プレゼントする慣わしがある。道子も早速今日始めての薔薇を見知らぬ精霊からプレゼントされた。ロザリアは眉を顰めてその様子を眺めている。宮殿ならともかく、初対面の相手にその態度は失礼だと道子が後から諭すと、ロザリアはだって、と口ごもりながら俯いた。

（まいっかー、かわいいから・・・）

能天気な道子はロザリアを嗜めるつもりが、結局にこにこ髪を

撫でて終わった。

『ところでロゼ、ロゼも薔薇の精霊、皆にプレゼント、ない？』

道子がプレゼントする仕草を真似てロザリアを見ると、ロザリアは興味なさそうに首を振った。

『面倒くさい』

『でも、皆、プレゼントしてる』

『皆じゃないよ。やりたい精霊がやっているだけだよ』

『ふうん・・・』

『トウコ、ローズ・ガーデンに行こうよ』

『いいけど、アシュレイに声かけてからでいい？』

ロザリアは少し間を空けてから頷いた。道子はよしよしとロザリアの頭を撫でてからアシュレイの姿を探した。割と直ぐ見つけたが、彼は相変わらず大勢の精霊に囲まれていた。話も弾んでいるようなので、道子は声を掛けるのを躊躇った。

『・・・行こ、ロゼ。後で、アシュレイに会う』

ロザリアは不思議そうにアシュレイと道子を見て首を傾げたが、何も言わず道子の後に従った。

石柱のパーゴラを抜けて秘密のローズ・ガーデンに向かうと、パ

ラソルのように広がるランブラー・ローズの木陰に置かれた、ウツドチエアに腰掛けた。

『ロゼ、夜また、来よう？』

『いいよ』

（今日は「真夏の夜の夢」みたいに、夜のガーデンをお散歩したいな。お洒落もキマってるし、アシュレイにも見せたいな・・・）

『・・・トウコ、どうしてさっき我が君に声をお掛けしなかったの？ お会いしたいって言っていたのに』

『え、うん。皆、いた』

『皆って？』

『たくさん精霊、いた』

『うん、いたけど？』

（・・・つい遠慮して声掛けられなかったんだけど、どう言えいいのかな）

道子が言葉を探して沈黙すると、ロザリアはああ、と理解の色を顔に浮かべた。

『遠慮する必要なんてないのに。だって我が君も、トウコに声を掛けられるのを待っていらしたようだし』

『え？』

(どういう事？)

『周りの精霊達も道子が黙って引き返すのを見て驚いていたよ。でも我が君はそれを見て、ほっとしているようでもあったから、皆何も言わなかったんだと思う。』

人である道子には分からないかもしれないけど、精霊は皆、我が君の御心に従わずにはられないの。言葉で命令されなくても、自然と我が君の意思を汲み取って動く習性がある。だから口ゼも周りにた精霊も、きっと道子は我が君に声を掛けるだろうと思ってた』

『・・・・・・・・』

『難しかった？ 別に道子が悪いわけじゃないよ。ただちょっと不思議だったから』

(よく分からないけど、アシュレイも私に気付いていたって言ったよね。声掛けなかったの、不味かったのかな。ひょっとして失礼だった？ 挨拶するのが礼儀だった？)

『トウコ、余計な事言ってごめんね。気にしないで。後できっと我が君はお見えになるよ。その時お話しすれば良いよね。きっと我が君も、トウコが一人でいる時にお話ししたいと思っているよ』

『アシュレイ、怒ってた？』

『怒ってないよ！ 怒るわけないよ。トウコ、気にしないで。余計な事言ってごめんなさい』

『うん。アシュレイ、怒ってない、私安心』

道子が大げさにほっと息をつくとき、ロザリアも緊張を解いてくすくすと笑った。

その後、ロザリアと並んでローズ・ガーデンを散歩してから、ランブラー・ローズの木陰に戻ってランチを取った。ロザリアは給仕してくれるティルノイゼにましてもヤキモチを焼いているようだが、ティルノイゼはどこ吹く風だ。涼しい顔でてきぱきと給仕を終えると、さつさと姿を消してしまった。普段は道子の話相手になってくれるのだが、今日はきつとロザリアに遠慮しているのだろう。それにしても、と道子は苦笑を零す。

『ロゼ、「ヤキモチ焼き」ね』

『ヤキモチ？』

『私がティル、アシュレイと話していると、こんな顔』

こんな顔と言いながら、腕を組んで顔を顰めて見せた。ロザリアは気まずそうに顔を顰めた。

『だって、ロゼが一番トウコの傍にいたいんだもの……。でも、ロゼも少し反省しているの。成体してようやくトウコに会えた時、嬉しすぎて我が君の御心を汲み取れなかったから。むしろ我が君の方がロゼに気を遣って、トウコの傍にいられるように尽力して下さってる。所有印だって、本当は……』

でも、ティルノイゼは別だよ。ティルノイゼのせいでトウコは、ハロレアン地上で怖い思いをしたんだから』

『・・・聞いた？』

『アンフルラージュ  
世界樹の中にいると、何でも分かるの。トウコが連れて行かれた時、ロゼ直ぐ飛び出して行こうとしたの。けれど、幽玄の君がお止めになるから、我慢した』

『幽玄の君？』

『我が君の姉君、アンジェラ様の事だよ』

『ああ、うん』

『とにかく、ロゼがティルノイゼを警戒するのは仕方ないよ。トウコを危険な目に合わせたんだから。本当に危ないところだったんだから』

（・・・知っているんだ。そうか、ただのヤキモチじゃなかったのか）

いろいろ考えて心配してくれているんだな、と思いよしよしと髪を撫でると、ロザリアは決意の眼差しで道子をじっと見つめた。

『トウコのこととは、ロゼが守ってあげるからね！』

道子は少し複雑な気持ちで笑った。

午後になると、道子はランブラー・ローズの下で、土の守護精霊<sup>ノーム</sup>、ヴェルグハルトに教えてもらった絵本「西の霧の谷のピピ」をロザリアと一緒に読んだ。精霊界ではとても有名な絵本らしいが、地上<sup>ハロビアン</sup>生まれのロザリアは初めて見るらしく、道子以上に絵本を気に入ったようだ。

『トウコ、続きは？』

一巻目を読み終わると、ロザリアは瞳を輝かせて道子を見つめた。

『読みたい？ 図書館で借りれる、ヴェルグハルト言った』

ロザリアが『読みたい』と即答するので、道子はローズ・ガーデンからプライベート・ガーデンに抜けて私室へと戻った。チェストに置かれたベルを鳴らすと、直ぐにティルノイゼがやって来た。

『トウコ様、お呼びでしょうか？』

『うん、図書館、行きたい。道教えてください』

『ご案内致します』

ロザリアはキツとティルノイゼを睨んでいるが、ティルノイゼは気にせず道子を先導して歩き出した。

（精霊って皆心の機微に聡いし、ティルも本当はロゼのヤキモチがどういふものか見抜いているのかもしれない……。流石に少しも

動揺を見せないけど)

道子の部屋から一番近い道標の前で止まると、ティルノイゼは通路の識別番号が描かれた金模様にかざした。すつと壁の中に消えて行くティルノイゼの後に道子とロザリアも続いた。この便利な移動法にも大分慣れたものだ。壁面を抜けると、道子はブレスレットを金模様にかざして、識別番号をインプットした。こうしておけば、次からは道標にブレスレットを翳すだけで此方に来る事が出来る。

『書庫はいつでも開放されておりますから、いつでもお好きな時にいらして下さい。中に司書がおりますから、貸し借りの際はお声掛け下さい』

『うん、ティル。ありがとう』

引き返して行くティルノイゼに手を振り、道子は書庫の両開きの扉の前まで歩いて行った。両脇に控える精霊が恭しく扉を開いてくれる。視界に飛び込んでくる壮大な書庫の様子に、道子はお礼を言うのも忘れてぽかんと口を開けた。

(これはまさに本の倉庫だわ)

壁面をずらりと本が埋め尽くしている。アンティーク造りの本棚には、ところどころに巨大な梯子が掛けられている。高いところにある本を取る為だろう。

『すごいねー』

道子はロザリアに笑いかけた。ロザリアも驚きに目を見張ってい

る。

『サンジュエル城の書庫より広い』

『サンジュエル城？』

『うん、リリイが働いていたお城だよ。此处よりは狭いけど、かなり大きな書庫があつたの』

『へへ。お城！　すごいね。リリイはメイド？』

『うん、庭師って言うていたよ。大体いつもガーデンか工房のどちらかで働いていたし。外にいる時は変てこな格好してたけど、お城ではメイドの格好でね、よく書庫で植物や、調合の事なんかを勉強していたよ』

『リリイ、すごいね』

『うん、リリイは凄いの』

『・・・おや、トウコ様。こんにちは』

小声で話しながら本棚に沿って歩いていると、シェヘラザードに声を掛けられた。

『あ、シェヘラザードさん。こんにちは』

『まさに薔薇の精霊ですね。よく御似合いですよ』

道子は嬉しそうにスカートをつまんでお辞儀をした。ロザリアも道子の真似をしてお辞儀する。

『トウコ様の装いは大変趣味がよろしいと、古代精霊の間でも評判だそうですね』

『えー、そう？』

『はい。我が君にはもうお見せになられたのですか？』

『ううん、まだ』

『きつと褒めて下さいますよ』

シェヘラザードはにっこり笑った。道子は少し照れくさそうに笑った。

（どうも彼は私とアシュレイに対して、何かと気を回していない？ まあ確かにアシュレイとは大分打ち解けたけど・・・、あのキレイな精霊と私がどうにかなるなんて、ありえないのに）

『・・・それにしても、書庫でお会いするのは初めてですね。何かお探しの本があるのですか？』

『うん。これ・・・、借りたいの』

続編、という言葉を出せず、道子は「これ」と言いながら絵

本を見せた。

『ああ、懐かしい。西の霧の谷のピピですね』

『知っている？』

『もちろんですよ。とても有名な絵本ですから。良ければご案内しましょうか？』

『うん。お願いします』

シエヘラザードに案内されて、目的の絵本を見つけると道子は驚いて声をあげた。続編が非常に多いのだ。巨大な本棚一つが、まるまる続編で埋め尽くされている。

『すごい……。多い』

『今でも続編が刊行されていますから。二巻目は少し高いところにありますね。お取りしましょう。どれくらい借りて行かれますか？』

『ありがと。じゃ、えーと……。十冊』

シエヘラザードは本を手にとると道子に渡さず、まだ見て行かれますか？ と尋ねた。ガーデンで寝転んで読もうと思っていた道子は首を振った。

『では、司書までお連れ致します』

『ありがと』

『いえ、お気になさらず』

貸し出しの手続きを終えると、ロザリアが難なく絵本を片手で持ってくれた。扉の前まで見送ってくれるシェヘラザードに、道子はふと気になって尋ねてみた。

『シェヘラザードさんは、パーティー、行かないの？』

（そういえばガーデンでは一度も見かけなかったな。ずっと宮殿にいたのかな）

『ああいった集いは苦手なんです。遠くから見ているだけで十分。トウコ様は楽しんでいらっしやいますか？』

『とても！ 毎日楽しいです』

『それは何より』

手を振って別れた後、早速ガーデンに戻って借りてきた絵本を広げた。ロザリアは瞳を輝かせて、ホログラムのように浮かび上がるピピを眺めた。まるで恋する乙女のような。辺りが暗くなってきたも、絵本の続きをせがむロザリアに苦笑して、道子は少し室内で休むと告げた。

『ロゼも、目悪くする。部屋で読もう？』

『うん！』

目を輝かせて絵本を眺めるロザリアの横で、道子はうつとまどろんでいた。

『・・・コ、トウコ』

『んん？』

『もう夜だよ。ご飯食べないの？』

『ご飯・・・、食べる』

道子がぼんやり答えると、ロザリアはパタパタと何処かへ駆けて行き、再び道子の前に戻ると、肩にかけるショールを手渡してくれた。

『ありがとう、ロゼ』

『うん。行こう？』

『待つて、おかしなところない？ テイル呼んでいい？』

『ダメ。テイルを呼ぶ必要なんてないよ。トウコはいつだって綺麗だよ』

『ロゼ・・・』

（いやいや、労力とテクニックを駆使して変身してるからこそよ・・・）

道子はよしよしとロザリアの頭を撫でると、チェストに置かれたベルに手を伸ばした。その行動を見て、ロザリアはむっとした顔でベルを叩き落とした。硝子のような素材で出来ているベルは、床に衝突して砕け散った。

『ロゼ！』

ロザリアも自分の行動に、或いは砕けたベルに驚いているようだ。怯えるように道子を見つめて来た。

『トウコ様！』

慌ててやって来たティルノイゼは、ロザリアと道子を見て、それから無残に砕けたベルを見て何となく状況を察したようだ。

『お怪我はありませんか？』

『平気です』

『・・・御髪が少し乱れています。此处は後で片付けておきますから、こちらへいらして下さい』

道子は素直に従った。ロザリアも悄然とした様子で道子の後をついて来る。

『ベル、壊してごめんなさい』

『いえ、御怪我がないようでした』

道子が謝るとティルノイゼは優しく微笑んでくれた。道子はちら

りとロザリアを盗み見た。悄然としているが、謝ろうとしているようには見えない。

『ロゼ、ごめんなさいは？』

『・・・・・・・・』

『トウコ様』

真っ赤になって俯くロザリアを見て、ティルノイゼは気遣うように声を掛けた。道子もそれ以上は口にせず、小さくため息をついた。

ガーデンの長テーブルで道子が食事している間、ロザリアはずっと無言だった。

（んもう、本当に子供なんだから）

道子は仕方ないなあ、と思いつつ食事を終わるとロザリアを連れてローズ・ガーデンに戻った。

『ロゼ、悪い子。ベル壊した。どうして、ごめんなさい、ない？』

『・・・ごめんなさい』

『うん。私、怒る、ない。でも、テイルに「ごめんなさい」は？』

ロザリアはぱつと顔を上げた。

『テイル、優しい。怖くないよ。ハロリアン地上に行った後、たくさんごめんなさい、くれたよ。ロザリア、いつもテイルにこんな顔』

こんな顔、と言いながら道子は顔を顰めて見せた。

『こんな顔、良くない。ロゼ悪い子』

『・・・だって』

『何？』

『トウコは何かあると、直ぐにティル、ティルって……。ロゼが道子の御世話をしたいのに。それにやっぱり、ティルのした事は許せないよ。道子の世界はどうか知らないけれど、此処では精霊は人間に嫌われているの。道子を連れてティルが、うかつに人間の前に姿を見せた事は本当に危なかったんだよ』

『ロゼ、心配してくれる、嬉しいよ。ロゼ優しい、私知ってる。でも私、平気だよ。アシュレイも、ティルも、私を助けてくれた。だから、もう怒らないで。ティルは、ロゼが「こんな」顔しても、ベル壊しても、怒らないよ』

『……。うん、ごめんなさい。ティルにも言う』

ロザリアが素直に頷くと、道子にはっこり微笑んでよしよしとロザリアの頭を撫でた。ようやくロザリアの顔にも笑顔が戻った。仲直りしたところで、そのままローズ・ガーデンを散歩する事にした。夜になったらまた来るつもりだったのだ。

『カンテラ、あるの。明るいよ』

道子は不思議な光源で輝くカンテラを持ち上げた。優しい光に小さな妖精<sup>エルフ</sup>が集まってくる。まるで大勢で散歩しているようだ。トトロ気分でなかなか楽しい。

『夜のガーデン、綺麗ね』

なんともロマンティックな薔薇を眺めながら、道子はロザリアと手を繋いでウォール・ガーデンを歩いた。

『見て、ロゼ。ブルー・ベルが光ってる』

『魔力が光<sup>エーテル</sup>って見えるんだよ。夜空のオーロラ・カーテンと同じだね』

『へえ……綺麗ね』

『ほら、この薔薇も光ってる』

『わ、本当。綺麗ね。……そういえば、ロゼも薔薇の精霊。どんな薔薇？』

ロザリアはにつこり笑うと、ゆっくり手の平を開いて見せた。手の平から淡い燐光が零れ落ちて、見る間に見事な真紅の薔薇があちらこちらに咲いた。

『わあ……』

『ロゼは全ての薔薇を従える薔薇の女王、クイーン・ルビーだよ。このガーデンでなら、何でも出来そうな気がする』

ロザリアは真紅の薔薇を一輪、道子に差し出した。

『ロゼの大切なトウコに、薔薇の祝福を』

『ありがとう、ロゼ』

いい香りね、と道子は薔薇に顔を寄せて微笑んだ。

ベルを壊してロザリアもいろいろと思う事があつたらしく、相変わらず道子にべったりではあるが、道子が望めば一人にしてくれるようになった。そう遠くない場所で、道子の様子を伺っているのかもしれないが、人である道子には全く気配が分らない。気楽に息抜き出来るようになって、正直ほつとしていた。

（ほんと、四六時中傍に張り付かれていたら、いくらかわいいロザリアでも疲れちゃう。そもそも、そんなんじゃ私と一緒に元の生活に戻ったところで、じつとしていいるなんて、耐えられないだろうし・・・って、私何考えてるんだろう）

道子はふるふると頭を振って考えを打ち消すと、アシュレイの姿を探してガーデンを歩き始めた。

今朝は簡単に見つけたが、やはり暗くなると探しにくい。なかなか見つからず、道子は諦めて引き返そうとした。その途端、腕を取られてびくりと硬直した。

『アシュレイ！』

『・・・こんばんわ、道子。私を探していました？』

『う、うん。良かった。会えた』

『・・・』

アシュレイは無言で道子を見つめた。煌くロイヤル・ブルーの瞳に間近で見つめられて、道子はときどきしながら微笑んだ。

『今日のテーマ、妖精の女王様、タイターニア』

シェイクスピアなんて知らないだろうが、道子は気にせずどこら辺がタイターニアなのか説明し始めた。ロザリアとおそろいの衣装を見せたくて、明るい声でロザリアの名を呼んだ。天使のような美少女は音もなく現れると、アシュレイを窺うように道子の傍に寄って来た。

『ふふ、まさに薔薇姫ですね』

アシュレイは賞賛の眼差しで道子とロザリアを眺めた。気合の入ったお洒落を褒められて、道子は満足気に微笑んだ。・・・その一言が聞きたくて、今日一日彼の姿を探していた気がする。

『我が君、ご機嫌よう』

アシュレイは微笑ましいものを見るような眼差しでロザリアを見つめた後、道子の手を取ると悪戯っぽく笑った。

『この間はロザリアに譲りましたからね。今夜は遠慮してもらいますよ』

『え？』

道子が首を傾げると、ロザリアは少し寂しそうに微笑んだ。ロザリアの名を口にする間もなく、アシュレイに抱き上げられてサンルームに下ろされた。

『アシュレイ？』

『今夜は私に貴方の時間を下さい』

『・・・・・・・・』

道子が恥ずかしそうに俯くと、アシュレイはそつと手を引いてソファーへと連れて行ってくれた。二人きりで過ごすのは随分久しぶりな気がする。

『すっかり人気者になりましたね。なかなか傍に寄れず、寂しかったですよ』

『アシュレイだって』

『はい？』

『たくさん、精霊いた』

アシュレイはくすりと笑った。

『・・・私が何をしよう、気にせず声を掛けて下さって良いのですよ。ですが、今朝は私から声を掛ければ良かったですね。要らぬ気遣いをさせてしまったようです』

『ありがとう、アシュレイ』

そつと肩を抱き寄せられて、道子は身体を固くした。アシュレイは直ぐに気がついて、宥めるように腕を撫でた。何となく、シヨールを羽織っていて良かったと思う。

『あの、アシュレイ・・・』

困惑して腕の中から逃げる道子をアシュレイは追わなかった。アシュレイと距離を置いてソファアに座り直す道子を見て、美貌の皇帝は思わず苦笑を漏らした。

『そう怯えないで下さい。何もしませんから。貴方を無事に帰してあげようと・・・、決めたのです』

『え？』

『ロザリアも成体を迎えましたし、もういつでも道子を元の世界に帰してあげられます。見知らぬ世界で、よく今まで頑張りましたね』

『・・・・・・・・』

『道子は迷っているようですが、私からも頼みます。ロザリアを連れて行ってあげて下さい』

『アシュレイ・・・』

『道子の傍で不自由しても尚、貴方の傍にいたいと渴望するあの子を傍に置いてあげて欲しい。きっと貴方をよく助けてくれるでしょう』

『私、帰れる・・・？』

『もちろんです。初めてサンルームで夜空を眺めた時から、いつかは故郷に帰してあげようと決めていました』

『ほ、本当に・・・？』

道子は声を詰まらせた。片言でも話せるようになって、いつかはアシュレイにお願いするつもりだったが、彼の方から申し出てくれるとは思っていなかった。

『<sup>フランメル</sup>羅針盤があれば、正確に空間転移出来ます。ロザリアに呼ばれたあの日、ガーデンに来る前の道子の生活に戻れますよ』

『本当に・・・？ アシュレイ、ありがとうございます』

『いいえ、お礼を言うのはこちらの方です。道子はロザリアを地上<sup>ハロレアン</sup>から解き放ってくれました。私がどんなに言葉を尽くしても、揺るがなかった彼女の檻を貴方は壊してくれた。』

・・・あの時、実は地上<sup>ハロレアン</sup>を終わらせるつもりでした。ロザリアも連れ帰る事が出来たし、もう地上<sup>ハロレアン</sup>を加護して行くのは馬鹿馬鹿しかった。だけど、道子が再びあの場所に降り立った時、ロザリアとアンジェラが世界樹の中にいて、地上<sup>ハロレアン</sup>は暗く、私が群集を引き連れて道子の元に降り立った。全てが重なり、運命としか言いようがない巨大な歯車は動き出しました。もう永遠に会えないと思っていたアンジェラに出会えた』

『うん・・・』

『私は道子の傍で、いつも心が風いでいました。・・・こう言っでは、嫌な思いをさせてしまうかもしれませんが、私は今でも人間が憎い。彼等の血塗られた歴史をどうしても許せない。私は人と違い、短期間に世代交代を繰り返しません。彼等が記憶を風化させても、私は決して忘れる事が出来ない。それが彼等から未来を奪っているのだとしても、今までどうしようも出来なかったのです。だけど、道子に出会ってから、今まで目にも留まらなかった地上<sup>ハロレアン</sup>の一面に、少しずつ気付けるようになりました。アンジェラの気持ちも、今な

「少し分かります」

『アンジェラ？』

不思議そうに瞬く漆黒の瞳を、アシュレイは優しい眼差しで見つめた。

『・・・人を庇い、具現化も出来ぬ程傷ついたアンジェラを、ずっと愚かだと思っていました。けれど、私も今、人である道子に惹かれている。傍にいと、心が温かく、安心する。それは、アンジェラの話していた「気持ち」に似ている気がします』

『・・・・・・・・』

『自覚したのは最近ですが・・・、残念な事に、貴方はもう帰る場所を選んでから。離れたくはないけれど、貴方の幸せを何よりも願います。だから、』

『あ、アシュレイ』

道子の手にはたたと涙が落ちた。ドレスをぎゅっと握り締めて、嗚咽を殺そうとするが、どうしても声が出てしまう。

（ずるい・・・！ そんな真っ直ぐな言葉、何でこんな時に）

『可愛い人。泣かないで下さい、何処にいても、貴方を忘れません』

『アシュレイ・・・ッ、・・・好きだよ。綺麗で、優しく、かわいくて、強くて、いつも助けてくれて、いつもありがと。私も寂しいよ、本当に寂しいよ』

長い指が涙に濡れた熱い頬に触れる。ゆっくり上向けさせられて、熱の灯ったロイヤル・ブルーの瞳と視線がぶつかる。いつから、こんな瞳を向けられるようになっていたのだろうか？・・・いつの間に、こんなに惹かれていたのだろうか。こうなる前に、仄かな想いで済むうちに、傷つく前に・・・、離れてしまいたかったのに。

ゆっくりと端正な顔がおりてくる。道子はそっと瞳を閉じた。

こんなに切ないキスを、生まれて初めて知った。

予想はしていたが、目が覚めたら酷い顔になっていた。はれぼつたい瞼をして、まるでオバケのようだ。ため息と共に手鏡をチェストに置くと、道子は起き上がる事を諦めてベッドの中に身を沈めた。今日はもう外に出る気がしない。

瞳を閉じると、締め付けるような胸の痛みに襲われた。昨夜自覚したばかりの、急速に膨らむアシュレイへの想いが、道子を苦しめる。

(・・・辛い。いつそ忘れたい。・・・思い出になるまで、どれくらいかかるんだろ・・・)

枯れたと思っていた涙が、ぼろりと零れた。ふと、細い指に優しく頭を撫でられるのを感じた。何も言わず、ただ慰めるように撫でてくれる。そうしていると、少しだけ痛みが和らぐので、道子は何も言わずにじっとしていた。

『・・・トウコ様、何かお召し上がりになりませんか？』

『うん・・・』

夜になっても、起き上がる気力が沸かずベッドの中でぐずぐずしていた。

『トウコ、飲み物取ってくる？』

『うん、ありがと・・・』

ロザリアはグラスに冷たいレモン水を注ぐと、ベッドの上で身を起こす道子に手渡ししてくれた。冷たい水が痛んだ喉を潤してくれる。

『ごめんね、ずっと寝てた。今日一日、退屈だった？』

『ううん、平気だよ』

ロザリアはベッドに腰掛けると、優しく微笑んだ。ティルノイゼも心配そうにこちらを見つめている。

『・・・ごめんね、泣いて。驚いた？』

ロザリアは何も言わず、道子の髪を撫でてくれた。

『トウコ様、薔薇水で絞った蒸しタオルです。瞼に暫く押し当てて下さい。腫れは直ぐに引きますから』

『ありがと・・・』

結局外に出る気にはなれず、室内で少しだけ食事を取った。食欲はなかったが、ロザリアやティルノイゼが心配するので、何とかスープとサラダだけ口にして、またベッドにもぐりこんだ。

―翌朝。薔薇祭 五日目。

目が覚めて一番に、アシュレイを想う。ツキンと胸が痛んだ。「帰る」という決意が重い……。――

（夢じゃないんだよね・・・）

（・・・・・・）

（だけど、決めたのは自分なんだから、前に進め！！）

道子は気合を入れて起き上がると、心配そうにこちらを見ているロザリアに笑いかけた。

『お早う、ロゼ』

ロザリアはほっとしたように微笑んだ。

『今日は、ガーデンに行こう』

『うん！』

何処か吹っ切れた様子の道子を見て、ティルノイゼは少し寂しそうにしていたが、いつも通り丁寧に道子の身支度を手伝ってくれた。ちなみに、今日のコンセプトは不思議の国のアリスだ。ロザリア

にはもちろん「アリス」の格好をさせた。ふわふわの金髪に、空色のエプロンドレス、ボーダーソックスに赤いエナメルシューズ。世界で探しても、こんなに完璧なアリスは他に居ないだろう。一方道子は「チェシャ猫」に扮装している。薔薇を飾った金色のクラウンを頭にのせて、黒いジャケットに、ふわふわどピンクのショールフアー。アンティーク風の編み上げブーツというコーディネートだ。衣装も小道具も豊富にそろっているので、コスプレと言うより、もはや舞台衣装のレベルである。

『それにしても、トウコ様のアイディアは素晴らしいです。毎日、目を楽しませてくれますね』

『ありがとう』

『まさかログガロンを大胆に断裁するなんて！ それにクラウンにリボンを通して、顎下で結わくのもとても素敵です』

『ふふふ・・・』

（すっかり仮装にも慣れてきちゃって、なんかこれくらじゃ物足りないというか・・・。明日は昇天ペガサス盛りとか挑戦してみようかな・・・）

ティルノイゼの賛辞にも、心此処にあらずの道子である。連日の仮装に味をしめて、次第に派手になっている事に本人は気付いていない。

ちょうど身支度を終えたところで、ガーデンから澄んだ音楽が聞こえて来た。道子はぱっとロザリアの手を取ると外へ駆け出した。

『ロゼ、踊ろっ！』

『うんっ』

ガーデンに出ると、軽快なリズムに合わせて飛び跳ねている精霊達に混じった。ロザリアと手を繋いで適当に楽しくステップを踏み始める。細かい事は気にせずただ楽しめば良いのだ。演奏者も踊り手もコロコロと変わった。今日は賑やかなアイリッシュ、ケルト音楽が続いているようだ。膝下くらいのドワーフ達が、アコーディオンのような楽器を下げて奏者達に加わった。それを見て、近くにいた鹿の聖獣がバグパイプのような楽器を吹き鳴らして、音色に深みを加える。逆に打楽器を奏でていた精霊が、腕が疲れたのか演奏を止めて離れて行った。そうして、次から次へと奏者は変わり、音楽は変化して行く。

（もう音楽が生活の一部なんだ。皆当たり前のように楽器を持つてる）

躍っているうちに、いつの間にか心は初夏に飛んでいた。澄んだ音楽が沈んだ気持ちを吹き飛ばしてくれる。

道子が笑い声を上げると、ロザリアも鈴の音のような笑い声を上げた。空元氣も本物になる、彼等の奏でる音楽はまるで魔法のようだった。

ローズ・ガーデンでお昼を取った後、絵本を読んだりお昼寝して、夜になると再びガーデンに戻って踊りの輪に飛び込んだ。

踊っていると、いつの間にか目の前にアシュレイがいた。口を開く前に手を取られ、力強く引き寄せられる。道子は微笑んで巧みなリードに身を任せた。

（・・・笑えた）

一日中笑っていたせいか、アシュレイを前にしても高揚した気分は萎まなかった。自然と笑顔が零れる。道子は少しだけほっとして、それから直ぐに心から笑い声を上げた。ちゃんとステップを踏めているのが不思議なくらい、アシュレイのリードが早いからだ。

『あはは！ 早い！』

どんどん早くなるステップに目が回りそうだ。けれど何て安定したリードなのだろう。倒れる心配は少しもない。重ねた手と、腰に回された確かな腕の感触が心地良い。

（楽しい！）

アシュレイの瞳も喜びに煌いている。楽しんでくれている。こんな素晴らしい時間を共有出来て、心から幸せだと思えた。

（大好き。忘れたいなんて思って、ごめん。私も絶対忘れないよ）

次から次へと想いが溢れ出る。繋がった手から、交わす視線から、全て伝わってしまいそうだ。いや、きっと伝わっているのだろう。アシュレイの瞳が信じられないくらい甘いから。

（何て綺麗な瞳なんだろう……。さらさらの白銀の髪、けぶるような睫、甘いブルーの瞳、形の良い鼻、唇……。目に焼き付けておこう。この瞬間を、ずっとずっと覚えていよう。この幸せな時間を、いつでも思い出せるように……。）

どれくらい踊っていたのだろう。アシュレイは少しも疲れを感じさせないが、道子はすっかり息が上がっていた。名残惜しいな……。そう思いながら、ゆっくりと手を離れた。貴婦人のように膝を曲げてお辞儀をすると、それに応えてアシュレイが洗練された騎士のようにお辞儀をした。流れるような典雅な所作に、思わず道子が目を奪われていると、周囲から囁し立てるような歓声が沸き起こった。びくつと硬直する道子の頭上から、視界を遮るようなフラワーシャワーが盛大に降り注ぐ。有翼の精霊達<sup>エンジェル</sup>が魔力で光の絵を描きながら、空へと舞い上がった。

『え、ええ？』

道子は一瞬ぽかんとしたが、直ぐに彼等の皇帝であるアシュレイを讃えているのだらうと思い、一步引いて同調するようにアシュレイに拍手を送った。

『私と貴方への祝福です。受けとめてあげて下さい』

アシュレイは苦笑すると、道子の腰に腕を回して引き寄せた。道子の腕を取り、手をふるよう促す。道子はまたしてもぽかんとしながら、されるがまま手を振った。

降り注ぐ薔薇の花びらは、ぽつと光を放ち、光屑の残像がゆらりと夜空へと舞い上がった。それがロザリアの仕業だと気付いて、道

子は目を丸くしたあと、にっこりと笑った。ロザリアは可愛らしくウィンクしてくれる。道子が笑った事で、周囲の歓声は更に盛り上がった。

『すごく、すごく、楽しかった』

『私もですよ、道子』

自然と見つめ合い、ついばむようなキスが落とされる。少しだけ照れくさかったが、道子のテンションも大分上がったので、腕を伸ばして顔を寄せ合うと・・・、やっぱり人前では恥ずかしくて唇ではなく頬にキスをお返しした。

『そんなところも、可愛らしい』

『ありがとう』

アシュレイはにっこり笑ってくれた。

まさに、夢のような一夜だった。

アシュレイと踊り明かした、夢のような一夜から数日―  
ローズ・ガーデン・パーティー  
 薔薇祭も終わりに近づき、道子の中で帰郷への想いは膨らんで行  
 った。

そして、まだはつきりと口にしていないが、道子はロザリアを連れ帰るつもりでいた。

その日、道子とロザリアは華やかなロココ調のドレスを身に纏っていた。道子の悪戯心で、ロザリアの見事な金髪は高く結い上げられ（ペガサス盛）、頂上にはアントワネット風に帆船模型を差し込んであった。前衛的（？）なファッションをティルノイゼは褒めてくれた。行き交う精霊達の笑みを誘っているのも、あながち御世辞でもないだろう。一方の道子は薔薇をあしらったパイレーツ帽子をかぶり、腰に革ベルトを通して細いサーベルを帯剣していた。今日のテーマはロココ風パイレーツ・オブ・カリビアンである。

すっかり板についた仮装を楽しみながら、道子はロザリアと連れ添ってガーデンを歩いていた。すれ違う精霊達に、感謝とお別れの言葉を口にした。薔薇を手渡して行く。

『ごきげんよう、ウィンディーネの精霊。貴方に薔薇の祝福がありますように』

『薔薇の祝福がありますように！』

『トウコ様、ロザリア。祝福をありがとうございます。同じく貴方に祝福がありますように』

儚げなウィンディーネの古代精霊ティタニアは、道子から受け取った薔薇を大切そうに受け取り、優雅に膝を折った。

『これまで、良くして頂いた感謝を忘れません』

『トウコ様・・・』

道子の惜別を思わせる言葉を聞いて、精霊の表情は悲しそうに曇った。

『我が君の御心が晴れませぬ故、お引止めしとございます』

『アシュレイのお赦しは頂いております。何もお返し出来ずに申し訳ありません。美しいウィンディーネの精霊、どうかいつまでも御元気でいらして下さい』

名残惜しそうに見送る精霊に会釈をして、しみりとした気持ちでその場を後にした。道子が別れを告げると、どの精霊も残念そうな顔をしてくれる。それが嬉しくもあり、そして切なかった。それは、サンルームでアシュレイに想いを告げたあの夜・・・、今にも胸が張り裂けそうな想いを呼び起こしそうで、道子は必死に心に蓋をした。

（残された此处での毎日を、笑って過ごしたい）

『トウコ』

ロザリアに名を呼ばれて、道子は微笑んだ。

『平気。行く』

『トウコ様』

呼び止められて振り向くと、いつもと同じローブを纏ったヴェルグハルトが近づいて来た。

『こんにちは、ヴェルグハルトさん』

『・・・・・・・・』

翡翠の瞳がじっとパイレーツ帽子を見つめているのに気付いて、道子は帽子がよく見えるように頭を傾けた。

『ロゼの薔薇、キャノメラナの羽。綺麗でしょう』

パイレーツ帽子を彩る、ロザリアの真紅の薔薇と、真青の美しいキャノメラナの羽を指差した。

『素敵な色合いです。ロザリアの髪型も面白い。船がささってる・・』

『なかなか良いです。きっと皆、こうなります』

『・・・・・・・・』

”なかなか好評なので流行るかもしれません”、そう伝えたかつ

たのだが、相変わらず言葉が不自由で上手く言えない。皆が頭に模型を刺すのかと勘違いしたヴェルグハルトは、無言で何やら思索している。しかし、ここで下手に言い繕うとすると、経験上更に泥沼化する事は分かっているの、多少の語弊には目を瞑る事にした。

『私も髪に船ささってるの、好きです！ 今度は短剣をさしたい。面白そう！』

ロザリアは無邪気に笑う。エキセントリックな髪型をしていても、比類なき美少女の笑顔は眩いばかりだ。

『・・・短剣？ 危ないよ？』

ロザリアはヴェルグハルトに前髪を撫でられて嬉しそうにしている。どうもロザリアは彼に比較的よく懐いている気がする。薔薇の精霊だから、土の守護精霊である彼とは気が合うのだろうか。

『西の霧の谷のピピ、ロザリアと一緒に、随分読みました。教えてくれてありがとう』

『それは良かった。トウコ様の語学も大分上達されましたね』

『まだまだです。もっと勉強、必要です。・・・だけど、そろそろ帰ります。これまで、良くして頂いた感謝を忘れません』

『トウコ様・・・』

『貴方に薔薇の祝福がありますように』

道子の手渡した薔薇は、ヴェルグハルトの中で震えるように煌い

た。

『トウコ様、ロザリア。祝福をありがとうございます。同じく貴方に祝福を』

『ヴェルグハルトさん、いつも優しい、本当にありがとう』

『・・・寂しくなりますね。離れていても、トウコ様とロザリアの為に祈ります』

別れの言葉はどうしてもしんみりしてしまう。道子は意識してにっこり笑うと、背中に視線を感じながら前を向いて歩き出した。

その後も、行き交う精霊達に薔薇を手渡して、別れを惜しみながら互いに祝福の言葉を掛け合った。

パーティーに開放されているガーデンを抜けて、石柱のパーゴラの下を歩いた。歩き慣れた小路を柔らかな木洩れ日が照らしている。  
ローズ・ガーデン・パーティー  
薔薇際の間はほぼ毎日この小路をロザリアと、アシュレイと歩いた。

（木洩れ日がキラキラして・・・、天国を歩いているみたい）

目が合うと、ロザリアはふわりと天使のように微笑んだ。

『ロゼ、幸せ』

『・・・私も』

パーゴラの小路を通り、道子とロザリアだけのローズ・ガーデンに辿り着くと、しばし絵本を読んで寛いだ。純白のランブラー・ロ

ーズの木陰でランチを摂り、ティータイムを楽しんでいると、ティルノイゼが来客を告げにやって来た。

『シェヘラザードさん？ 分かりました』

『こちらへお通ししてもよろしいでしょうか？』

『はい、お願いします』

ティルノイゼは綺麗にお辞儀をすると、間もなくシェヘラザードを連れて戻って来た。

『こんにちは、トウコ様』

『こんにちは、シェヘラザードさん』

『ふふ、今日の御召し物も素敵ですね』

『ありがとう。シェラザードさんも素敵です』

『いえ、どうも着飾るのは苦手で、いつもこればかりです』

シェヘラザードは苦笑気味に自身を見下ろした。足元まで覆う、白地のログガロンは長身の彼によく似合っている。しかし、毎回同じ衣装では彼も飽きるのかもしれない。

『お洒落なら、任せて。いつもと違う格好、楽しいですよ。もうすぐ帰るから、お願いするなら、早めにね』

『・・・そんなに急いで帰らなくても、良いのではありませんか？』

『帰ります。帰れる、ってアシュレイが言ってくれたから』

（帰れるって分かると、名残惜しくなるんだけどね……。決心が鈍らないうちに、帰らないと）

『皆、トウコ様がお帰りになると聞いて、残念に思っていますよ』

『……。ありがと』

『トウコ様がいらしてから、我が君はお変わりになりました。幽玄の君も御姿をお見せになられて、宮殿がこんなに賑やかになるのは久方ぶりです』

道子は困ったように笑った。

『我が君のお傍に居て欲しいと、お願いしていますのに』

『……。アシュレイも、シエヘラザードさんも、皆、大切です。此処での時間を、忘れません。だけど、私の本当の家は、此処じゃないから。寂しいけど、帰ります。』

『……。アシュレイに少し聞きました。私の世界と、此方の世界、行つて、また戻るの、難しいんでしょう？』

今度はシエヘラザードが困ったように笑った。

『そうですね……。空間への干渉は、本来自然の理に反します。繰り返せば世界を揺るがす歪を生みかねません。トウコ様の為に反理を犯す程、我が君は貴方を大切に思われているのでしょ』

『・・・うん』

『トウコ、ロゼがついているよ。此処に帰りたくなったら、いつでも連れて帰ってあげる！　ちょっとくらい干渉したって、そんな簡単に世界は壊れたりしないよ』

『・・・』

道子は咄嗟に言葉が出てこなかった。口ごもる道子の葛藤を読んで、シェヘラザードはアシュレイの意図を理解した。明らかに帰還を躊躇う彼女を引き止めずに還すのは、傍にロザリアを置く事でいずれ戻って来るだろうと確信しているからなのか。

心を偽り頑なに帰ろうとする今の道子には、惜しむ言葉は逆効果だろう。無理に引きとめても彼女の不信を買うだけだ。それが分かっているから、敢えて彼女の好きなようにさせて、やがて本心に気付けてくれるのを待とうとしているのだろう。

『よく考えていらっしやる。気が長いというか・・・』

『うん？』

『いえいえ、何でもありません』

『ね、シェヘラザードさん。私、サラマンダーと、シルフィードの四精霊にまだ会っていない。残念』

ローズ・ガーデン・パーティー

薔薇祭の間に会えるのではないかと期待していた分、道子は残念だった。

『・・・彼等は今、宮殿を離れていますから』

『そう……。残念』

道子は短く呟くと紅茶を口に含んだ。その隣にいるロザリアとシエヘラザードの視線がぶつかる。まるで余計な事は言うなと威嚇されているようで、シエヘラザードは苦笑をもらした。仮にも四精霊、ウィンディーネの頂点に立つ自分に向かって、そのような不遜な態度をとるのはロザリアくらいだ。

この規格外な薔薇の精霊に、世界を違えても加護がある事を祈りながら、シエヘラザードも紅茶に口をつけた。

薄闇に溶ける空の下、ロザリアは道子の膝の上でまどろんでいた。秘密のローズ・ガーデンで道子と静かな時間を共有していると、心は在りし日のアプリティカに飛んで行く。

三百年前。日差しの強いラナの季節。

ロアノス大陸北東、のどかな田園地方アプリティカの古城では、毎年恒例のローズ・ガーデン・パーティー薔薇際が催されていた。薔薇屋敷と呼ばれる古城、ローゼン・サンジエエル城は赤煉瓦に弦薔薇のからまるロマンティックなお城で、由緒正しいレイ＝エリース公爵家の別荘であった。

毎年、ローズ・ガーデン・パーティー薔薇際が近づく、庭師であるリリイは忙しそうに広大なガーデンを奔走していた。

『ロゼ、ごめんね！ すっかり暗くなっちゃった。午後は時間が取れなくて……』

シークレット・ガーデンにリリイが息を弾ませてやって来ると、ロザリアは風のように駆け寄り、大好きなリリイに抱きついた。

『リリイ、ご苦労様！』

『お疲れ様、でしょう？ もう、何で偉そうなのよ』

『ディーロやサフランはよく言っているよ？』

『ディーロ様は筆頭執事で、サフラン様は家政婦長だからよ。ロゼは私の上司じゃないんだから。．．．っていうか何処で聞いたのよ。外に出たらダメって言っているじゃない』

『ねえ、じゃあロゼはリリイの何なの？』

『友達でしょう？』

『友達かあ』

ロザリアは嬉しそうに笑った。リリイは柔らかな金髪をよしよしと撫でると、バスケットを持ち上げて見せた。

『レモンの蜂蜜漬けと、クリスタライズドローズ砂糖菓子持ってきたの』

『やったー！ いい匂い』

仲良くを手を繋ぎながら、パラソルのように広がる純白のランブラー・ローズの下まで歩いて行く。寡黙なリリイにとって、ロザリアは気兼ねなく語らえる唯一の友達であり、また安らぎでもあった。

『明日はいよいよ、アガレット様がお見えになるのよ．．．』

『えー。あの我が侘な人、もう来るの？』

毎年王都から涼を求めてやって来るアガレットを、ロザリアは心底嫌っていた。何かとリリイに雑用を言いつけるせいで、ロザリアと過ごす時間が削られるからだ。只でさえローズ・ガーデン・パーティー薔薇際の仕事で忙しいリリイは、アガレットがやって来ると寝る間もなくなる程忙殺される。その度アガレットに殺意を覚えるのだが、リリイはロザリアが他の

人間と関わる事を何よりも恐れていた。

『……先日十七歳をお迎えになられて、正式に襲爵されたのよ。これまで後見人でいらしたシユタイン様はローゼン・サンジユエル城に興味をお持ちでなかったけれど、アガレット様はお気に召していらつしやるようだから、今回は長居されるかもしれない。ロゼ、くれぐれも姿を見られないように気をつけてね』

『平気だよ！　ロゼ姿消すの得意なんだから。誰にも見つからないよ』

『シークレット・ガーデンを出たら、ダメなんだからね？』

『分かってるよ。ロゼ、いつもちゃんとリリイの気配を読んで姿を見せてるんだから』

『……すつごく心配』

『えー？』

ロザリアは不満そうに口を尖らせた。

王都からアガレットがやって来ると、案の定リリイは抱えきれない仕事量に忙殺されるようになった。

アガレットは夕陽を溶かしたような赤髪に、憂いのある灰蒼色の瞳を持つ社交界でも評判の美姫だ。けれどその内面は醜く、高慢で残忍であった。腕の良い庭師であり調合師でもあるリリイは、表向

きアガレットのお気に入りと周囲に思われているが、アガレットが何かとリリイを呼びつけるのはそればかりが理由ではない。くすんだ灰色の髪と瞳を持つリリイを見下ろす時、アガレットの冴えた灰蒼色の瞳には、嘲笑と侮蔑、そして優越感が浮かんでいる。こっそり姿を消してお城にもぐりこみ、初めてアガレットに仕えるリリイを見た時、酷い嫌悪感を覚えたものだ。

仕事に忙殺されていたリリイが、ようやくシークレット・ガーデンを訪れた時、アガレットも一緒にやって来た。

『よく手入れされているのね』

『恐れ入ります』

リリイは酷く緊張しているようだ。ロザリアは姿を消して、その様子を傍で見守っていた。

『お前の作る薔薇水は、私のお気に入りに。此処の美しい薔薇で試してみたいわ』

『……え？』

『私の大好きな色。クリムゾンの美しい事。此処の薔薇を摘み取って、私の為に最高の薔薇水を作りなさい』

絶句するリリイの隣で、ロザリアの身体からゆらりと魔力が立ち上った。シークレット・ガーデンはロザリアの守護する不可侵のリトリードだ。それをこの女は……。怒りを抑えきれず、周囲に不穏な空気が立ち込めた。

『工房で使う薔薇は、専用のハーブ・ガーデンで育てております。此処はラプティーシャ夫人の大切なシークレット・ガーデンですから、摘み取るなど』

『リリイ。此処はもう私のガーデンなのよ』

『アガレット様、ハーブ・ガーデンにも見事なクリムゾンの薔薇がございます。美容水に適した専用種として育てておりますから、どうか』

『私はお願いしているのではないの。命じているのよ』

打ちひしがれるリリイを見下ろすアガレットの瞳には、残酷な愉悦が滲んでいる。まるで子猫をいたぶる獰猛なライオンのようだ。

耐え切れずにアガレットへと伸ばされた幼い手を、大きな手がそっと掴んだ。完璧な結界がロザリアを包み込む。

『我が君』

目を見開くロザリアの前に、美貌の皇帝が姿を現した。

『無闇に暴走してどうするのです。いつもリリイに注意されているでしょう』

『だって、あの人間が・・・！』

『これがリリイの日常なのです。あれは確かに不快ですが、お前が

手を出せば彼女の身に危険が及ぶでしょう』

『誰にも見られないようにアガレットを殺しても？』

『そんな事をすれば、リリイが悲しみます』

『どうして？ リリイに酷い事ばかり言う人間なのに？ リリイだって嫌っているのに』

『お前は人間社会に疎い。その上魔力は高まるばかり。……このままリリイの傍にいて、取り返しのつかない事になる前に、エーテル精霊界ハイレイスファイアに戻りなさい』

『嫌です！ リリイと離れるくらいなら、死んだ方がずっと良い！』

必死に縋るロザリアを見て、アシュレイの眼差しは幾分和らいだ。

『薔薇の愛し子よ。私はお前を想って忠告しているのです。私が止めなければ、リリイしか居ないシークレット・ガーデンの中で、お前はあの人間を殺していた。そんな事をすればリリイは此処にいらなくなる。あの少女の抛り所を奪うだけではない、お前を見る眼差しも変わるでしょう。お前とあの少女の価値観は違うのです。』

お前がリリイの傍にしようとすれば、この先も同じような事が何度も起きるでしょう。その時冷静に判断を下せないようでは、リリイもお前も傷つくだけです』

ロザリアは悲しくて、悔しくて、声を上げて泣きじゃくった。アシュレイの結界に守られて、泣き声は外に漏れる事はない……。

いつの間にかガーデンからリリイとアガレットの姿は消えていた。

『・・・ロザリア、ハーレイスフィア精霊界ならお前の同胞達が暖かく迎えてくれますよ。我等を疎む人間達の中には、例えリリイが居ても安寧を得られる事はないでしょう』

諭すようなアシュレイの言葉に、ロザリアは首を左右に振った。

『・・・アガレット、あの人間はお前には毒でしょう。せめて彼女がこの土地を去るまで、ハーレイスフィア精霊界に来てはどうです？』

『・・・嫌です。リリイを置いて行けません』

『リリイ一人なら問題ありませんよ。これまでも苦労しながら人間社会で暮らして来たのですから。お前が傍にいる方が危ない。良い機会ですから、少しリリイと離れて忍耐というものを学んでみてはどうです？』

『嫌です！ 誰が何と言おうと、リリイの傍に居ます！』

アシュレイは『強情な』と呆れながらも、強固な結果を解いた。

『やれやれ。お前ばかりに構っている暇はありません。私はもう行きますが、くれぐれも軽率な行動は控えるように。迷った時はよくリリイに相談しなさい』

伸ばされた大きな手がロザリアのふわふわの金髪を撫でる。くすぐったそうにしながらも、ロザリアは大人しく受け入れた。会えば苦言ばかり口にする主君だが、エーテルロザリアも全ての精霊がそうであるように、この途方もない魔力を秘めた皇帝を敬愛していた。

結局、リリイは肩を落としながらシークレット・ガーデンの薔薇を摘み取っていた。

ロザリアの母体であるクイーン・ルビーの薔薇だけは、そつと鉢に移して人目につかないところに隠してある。

『・・・ごめんね、ロゼ』

『ううん。平気だよ。皆たくさん蕾をつけているし、年季咲きの薔薇もたくさんあるじゃない。直ぐに明るいガーデンになるよ』

『・・・うん。・・・ロゼは偉いのね。私よりよっぽどしっかりしてる。私はもうダメ、手塩にかけた薔薇をアガレット様の我が俎に負けて摘んでしまうなんて・・・、自分が情けなくって』

『ロゼだって偉くないよ。この間、あとちょっとであの女、殺しちゃうところだったし・・・』

『えっ』

リリイは真つ青になってロザリアを振り返った。動揺のあまり手から剪定ばさみが落ちて、ドスツと地面に突き刺さった。

『リリイ！ 危ないよ！』

『危ないのはどっちよ！ い、今何て言ったの！？』

『え、あの女殺しちゃうところだったし？ 心配しないで、殺してないよ。今日も元気にしてたでしょ』

『当たり前よ！ そんな怖い事、冗談でも言わないで』

想像以上にうろたえるリリイを見て、ロザリアは先日のアシユレイの忠告を苦々しく思い出した。

『・・・心配しないで。リリイが悲しむような事は、絶対にしないから』

リリイは泣く泣くシークレット・ガーデンの薔薇を摘んで、薔薇水を作り上げた。それからアガレットの我が俤に振り回されて、ラナ季が過ぎ去り、ようやくアガレットが王都へ戻る頃にはすっかりやつれてしまった。

アガレットを乗せた馬車が遠ざかっていく様を見て、ロザリアは嬉しさのあまり辺りを転げまわった。

『ロゼ、少し落ち着いて』

『だってー！ やつといなくなったよ、あの女！ ロゼ、気分爽快！』

リリイは苦笑いを浮かべてロザリアを見つめた。あまり強く言わないあたり、リリイも同じ気持ちなのだろう。

『今日は一緒に眠ろう？』

『・・・そうね、久しぶりね。とっておきのローズ・ワインを持ってくるわ』

その日の夜、流れ星を数えながら飽く事なく空を眺めた。リリイの優しい指が、ロザリアのふわふわの金髪をそつと撫でる。久しぶりに大好きなリリイとのんびり過ごす事が出来て、ロザリアは心から幸せだった。

『・・・アプリティカの空は澄んでいるわ。見上げてると屑星が降

つてきそうじゃない？』

『ふうん？』

『ロゼは情緒がないわねえ……』

『毎日同じ空だよ』

ロザリアが不思議そうに問いかけると、リリイはそうね、と微笑んだ。

『私は此処へ来る前、カトリのあぜ道を往復する毎日だったの。砂埃が酷くて、マスクがなければとても歩けないような処よ。布越しの視界で、何もかも薄ぼけて見えた。』

十歳の時、ラプティーシャ夫人に手を引かれて初めてガーデンに足を踏み入れたわ。あの方はぱっと私の顔を覆う布を引き下げられたの。それはもうびっくりした。目に飛び込んでくる色彩が眩しくって、此処は楽園だろうかって本気で思ったものよ』

『ラプティーシャ夫人って、アガレットのおばあ様？』

『そうよ。あの方はずっとアガレット様にお会いする日を楽しみにしていらしたわ。私も姿絵は何度も見せて頂いて、天使かしらと胸をときめかせたものだわ』

『え……、アガレットに？』

『……あのお姿だし、ラプティーシャ夫人から聞かされたアガレット様は本当に天使のような方だったのよ。今では露程も思っていないけれど。……結局、ラプティーシャ夫人はアガレット様にお

会いする前に儂くなくなってしまわれたけれど、お会いして幻滅されるよりは良かったのかもしれないわ』

『そりゃそうだよ。アガレットに会えて嬉しい人の気が知れない』

『はぁ……。アガレット様が城主かと思うと、本当に残念で仕方ないわ。……。けど、このローゼン・サンジュエル城は気に入っている。ロザリアにも会えたし』

『ロゼはリリイがいれば、何処にいても幸せだよ』

リリイは小さな身体をぎゅっと抱きしめた。

『ありがとう、ロゼ。私もロゼがいて幸せ！』

ロザリアは鈴の音のような笑い声を上げた。

リリイ。大好きなリリイ。貴方に会う為に生まれて来た。魂の一番深いところに刻まれた約束。

”置いて行かないで……。 ” 寂しい……。 ” 会いたい……。 ”

決して貴方を悲しませない。一人にしない。降りかかる災厄は私が振り払うから、笑っていて。どうか笑っていて……。

『ロゼ、起きた？』

『・・・トウコ？』

『うん？』

優しい指先がふわふわの金髪をそつと撫でる。心地良さに瞳を閉じながら、ロザリアはぼんやりと夢と現の狭間をさ迷っていた。

『また寝ちゃうの？』

道子はロザリアの薔薇色の頬をつついた。ロザリアは笑みを零しながら、もう少し甘えていたくて道子に擦り寄った。

『・・・ロザリア、少しは遠慮したらどうです？ 暢気に寝転がっているお前と違って、私は多忙の身。僅かな合間を縫って道子に会いに来たというのに・・・。私も道子の傍で癒されたい』

主君の声を聞いてロザリアは驚いたように跳ね起きた。青い双眸がロザリアを見下ろしていた。

『我が君・・・！』

『幸せそうに眠っていましたね。楽しい夢でも見ていましたか？』

在りし日、ロザリアとアシュレイ、そしてリリィと過ごしたガーデン。今は……。

ロザリアは何故か頬を染めている道子を見て、ふわりと笑った。

『はい、懐かしい夢を見ていました』

『なるほど、道子の膝の上でまどろめば、楽しい夢が見れそうですね』

『えっ』

道子は動揺して盛大に身じろいだ。ごろん、とロザリアの頭が膝から落ちる。

『トウコ〜』

『あ、ごめん！ つい……』

アシュレイは可笑しそうに笑うと、ロザリアと場所を入れ替わり、本当に道子の膝に頭を乗せた。道子は硬直して呼吸すら止めた。

『我が君、ずるい……』

『良いでしょう、少しくらい。この先もお前は道子の傍に居られるのだから』

アシュレイの言葉に道子はそつと息を吐いた。問いかけるようなルビーの瞳に見つめられて、道子は小さく微笑んだ。何処までも道子について行くというロザリアの意思を、道子がようやく認めた瞬間

間だった。

『・・・っ！　そうですね。私はずっとトウコの傍に居られるのですから。我が君に少しくらい譲って差し上げます』

ロザリアはさつと立ち上がると、ローズ・ガーデンの向こうへと駆け出した。まるで喜びを我慢出来ないと言わんばかりだ。道子は風のように去って行ったロザリアをぼかんと見つめていたが、小さな背中がとうとう見えなくなると、可笑しそうに笑った。

「そっか、嬉しかったのか。犬みたい」

思わず日本語で呟いたが、楽しそうな雰囲気はアシュレイにも伝わったようだ。

『ふふ、嬉しくて仕方ないのでしょう。大好きな貴方に、傍にいていいと言われたのだから』

『本当、いろいろ心配です。私の世界、此处と全然違う。ガーデン、ない。宮殿、ない。精霊、ない・・・』

『心配いりません。あの子は本当に、貴方の傍にいられるだけで幸せなのでから』

『ロゼ、きつと驚く。私の世界、本当、此处と全然違う・・・』

『大丈夫ですよ』

アシュレイは手を伸ばして道子の頬に触れた。控えめな道子は、珍しく動揺せずにその手を受け入れた。澄んだ黒い瞳には不安の色

が浮かんでいる。今は羞恥よりも不安な気持ちが勝っているのだらう。

（アシュレイ・・・）

声にならない声で、大切そうに名を呼ばれた。それだけで胸を焦がすような想いが溢れ出る。頬に伸ばした手をそのまま頭の後ろに滑らせて、ぐっと引き寄せると道子は意図を察して照れたように瞬いた。唇が重なる瞬間、さっと身体を入れ替えて柔らかく押し倒した。

『ん・・・』

優しく上唇を食むと甘い吐息が零れる。味わうように何度もついはみ、音を立てて唇を離れた。潤んだ黒い瞳をしばらく見つめてから、気持ちを確かめるようにゆっくりと唇を重ねる。

甘く貪られて、道子の体温は急上昇していた。唇が離れた後も、ぴたりと身体を重ねたまま、大きな手が優しく身体中を這っている。感触を楽しむように髪を撫でられて、その心地よさに思わず瞳を閉じると、間近でくすりと声がした。

『猫のようだ』

道子もくすりと笑って、飼い猫が主人に擦り寄るように広い胸に頬を寄せた。大きな手が頬、肩・・・腕へと滑る。道子もそっと手を伸ばして、アシュレイの神々しい美貌に触れた。遠慮がちに少し冷たい頬を撫でると、道子の手の平に頬を押し当てるようにして心地良さそうに瞳を閉じた。

『猫みたい』

アシュレイを真似て呟くと、美貌の精霊は可笑しそうに笑った。

『そのような事、初めて言われました』

『可愛い』

調子にのってよしよしと頭を撫でる。ずっと触れてみたいと思っていた銀系の髪は、思った以上に滑らかだった。

『私が可愛いですって?』

アシュレイは少し意地悪い笑みを浮かべた。しかし道子がやばいかな、とさつと腕をしまうと、再び瞳を閉じた。

『・・・それでも良いです。もっと貴方に触れて欲しいから』

請われて、おずおずと腕を伸ばす。つんつんと前髪を引っ張っても瞳は閉じられたままだ。形の良い鼻を人差し指でつつと撫で、唇に触れた。ときどきしながら柔らかな感触を確かめていると、うつすら唇が開いてちろりと舐められた。少し驚いたが、まだ瞳は閉じられたまま・・・。今度はそつと銀色の睫に触れてみた。流石に擦ったそうに震えたが、それでもじつとしているアシュレイに愛しさがかみ上げて来た。

(・・・好き)

この先きつと、これ以上に好きになる相手はいないだろう。元の生活に戻って、家族や友達を取り戻しても、アシュレイが居ない・

。。途端に刺すような痛みが胸に走る。

（今は耐えて。考えちゃダメ。全部終わったら、その時は泣いていいから）

アシュレイはゆっくりと瞳を開けた。声を読まずとも、潤んだ眼差しや、髪を撫でる優しい仕草から道子の想いが伝わって来る。大切に想ってくれている事、本当はずっと涙を堪えている事、その理由も。道子の全てが愛しい……。。

『。。。今私が望めば、手に入りそうな気がします。道子、私と・・  
』

道子は考えるよりも先にアシュレイの口を手で押さえた。その先に続く言葉を怖くて聞けなかった。

アシュレイに惹かれているのに、こんなに好きなのに、傍にいと怖くなる。矛盾しているって分かっている。元の生活に戻りたい、嘘じゃない。だけどそれだけじゃない、このまま流されて行く自分が怖いから、「帰る」っていう言葉を借りて逃げているだけなのかもしれない。分からない。でも一つ言えるのは、冷静に考えられる時間が欲しいという事。いろんな事があり過ぎて、もうどうして良いか分からないの。だから、お願い……。。

道子は泣きそうな顔でアシュレイを見つめた。仕方ないな、と言うように道子の手を取って、そっと手の甲に唇を押し当てた。

『分かっています』

『うん・・・』

道子の葛藤を受け入れてくれる、優しい精霊の言葉に我慢していた涙が一筋零れた。

ローズ・ガーデン・パーティー

薔薇祭最終日、プライベートなローズ・ガーデンの中で、道子はアシュレイに紅茶を淹れていた。ゴシックメイド風の仮装をしている道子が、深い群青のローブを纏うアシュレイに仕えている様は、まるで使用人と主人の構図だ。

『癖になりそうですね』

『うん？』

『休憩の合間に道子が紅茶を淹れてくれるなら、日々の執務も捗りそうです』

『・・・ティルノイゼも美味しい紅茶を淹れてくれますよ』

そつと微笑む道子を見て、アシュレイも穏やかな笑みを浮かべた。

『すっかり打ち解けましたね。・・・道子に怖い思いをさせたティルノイゼの処遇は、いずれ道子が言葉を解するようになった時に委ねようと考えていました』

『え・・・』

道子は給仕の手を止めてアシュレイを見つめた。

『嫌な事を思い出させてしまいましたか？』

『あ、ううん……。あの時の事？』

『ティルノイゼを赦せますか？ それとも？』

『赦します！ 彼女は悪くない！』

慌てる道子を見て、アシュレイは微笑ましそうな眼差しを向けた。

『貴方はそう言うだろうと思っていました。優しい人だから』

『・・・そう？』

(・・・優しくなんかない。自分の事ばかり考えてるし)

道子は苦い気持ちで俯いた。沈黙をごまかすように自分で淹れた紅茶に口をつける。

『それにしても、ロザリアはピピに夢中ですね』

アシュレイの視線を辿って、道子も明るい笑顔を浮かべた。ロザリアはブルーベルのカーペッドの上に寝そべり、無心に絵本をめくっている。パステルカラーのロリータ風ワンピースを着ているロザリアは、まるで何処かのお姫様のようだ。

『もう読めなくなる、今のうち、たくさん読む、ロザリア言った』

『持って帰れば良いのに』

『ダメ、置く場所ない』

『そうですか？』

不思議そうにしているアシュレイを見て、道子はその手を取り自分の額に押し当てた。道子の意図を悟り、アシュレイは思念を読み取る。道子は都内のアパートを脳裏に思い浮かべた。こじんまりとしたキッチン、細い廊下に小さな部屋。道子には住み慣れた城だが、アシュレイは少し目を見開いて驚いているようだ。

（まあ普段こんなお城に住んでいれば、驚くのも無理はないか）

道子は苦笑しながら手を離れた。

『狭い、分かった？』

『・・・道子、良ければ住まいをあちらに用意しましょうか？』

『ええ？ ダメ、気にしないで』

苦笑する道子を、ロイヤル・ブルーの瞳が何処か痛ましそうに見つめている。

「何処だって、住めば都よ」

『・・・？』

日本語の意味が分からず、美貌の皇帝は不思議そうに沈黙した。いろんな表情を見せてくれるようになったアシュレイを、道子はしみじみと見つめた。

（明日でお別れかぁ・・・）

薔薇祭が終われば、道子は帰る事になっている。此処へ来たばかりの頃なら、小躍りする程喜んでいいるはずだが、今は素直に喜べなかった。此処での恵まれた暮らしや、何よりアシュレイの存在が大きくなり過ぎてしまった。

道子は迷いを押し殺すように瞳を閉じた。

アシュレイが退室した後、道子は私室前の回廊に出て世界樹を見上げた。  
アンフルラージュ

『アンジェラ、いる？』

呼びかけると、アシュレイによく似た美貌の精霊が姿を現した。  
エーテル  
その姿は半透明で、存在感がない。失った魔力を今も世界樹の中で  
アンフルラージュ  
復元しているからだ。

『トウコ、帰ってしまうの？』

『うん、明日……。ごめんね』

『きっと後悔するわ』

『うん……。』

『どうして当事者には分からないのかしらね。我が身を振り返るよ  
うだわ』

表情を曇らせる道子を見て、アンジェラは苦笑を漏らした。

『・・・トウコ、私が今も世界樹アンフルラージュの中で魔力を回復エーテルしている理由は  
聞いた？』

道子は静かに首を振った。何となく聞き辛くて、これまで誰にも  
聞けずにいたのだ。

『私には昔、人間の恋人がいたの。誰よりも愛していた・・・今で  
も愛している』

道子は瞳を輝かせてアンジェラを見上げた。

（アンジェラの恋バナ！？ 凄く聞きたい）

『アンジェラ、私の部屋で話す？』

期待に輝く漆黒の眼差しに、アンジェラはくすりと笑みを漏らし  
た。

『いいわよ』

私室に戻り飴色のティーテーブルに着くと、道子はそれで？と切  
り出した。アンジェラは懐かしむように遠い目をした。

『彼、シルヴァリーはガ口の建国王だったの。まだ同胞達ハロビアンが地上と

ハイレースフィア  
精霊界を行き来していた頃よ』

『どんな人？』

『快活で愉快な人。トウコと同じ黒髪で・・・、綺麗な灰色の瞳をしていた。物怖じしない性格で、初めて会った時から私の瞳を真っ直ぐに見つめる人だったわ。何かにつけて私を呼び出すものだから、アシュレイは最初酷く毛嫌いしていたのよ』

アンジェラはその時の様子を思い出したのか、楽しそうに笑った。釣られて道子も笑顔を浮かべた。

『アンジェラ、人気者』

『私を崇める人間は多かったけれど、シルヴァリーは私を女神というよりも、好きな女の子に接するように扱ったわ。アシュレイや同胞達は眉を顰めていたけれど、私にはとても新鮮で・・・彼に惹かれた理由の一つかもしれない』

『うんうん』

『筆を手にするより、身体を動かす方が好きな人で、隣国との小競り合いが起きる度、先陣を切って駆けつけていたわ。だからいつも傷だらけで・・・、見かねて加護を与えたわ。人間に精霊石を授けたのは、あれが初めてだった』

道子はアシュレイからもらった精霊石を見つめた。

『トウコもアシュレイからもらったのよね。あの偏屈者が人間に加護を与えるなんて、長生きはするものねえ』

『・・・地上で、この精霊石について、聞かれた』

『石には力があるのよ。特に精霊石は、人智を超えた魔力の結晶だから、喉から手が出る程欲しがる人間もいれば、恐れる人間もいるわ』

『・・・・・・・・』

『青い炎のような宝石。アシュレイの魔力そのものね。きっと道子を守ってくれるわ。失くしてはだめよ？』

『うん、大切にします』

『私もただ、シルヴァリーを守りたかっただけなの・・・。けれど、私の存在は周囲に悪影響を及ぼしてしまったわ。』

ガロは長い間、隣国であるダレイ・ソロス帝国の属国だったの。帝国は強大な軍事国家で、属国には重い兵役を課していたのよ。ガロは元々、気候や土壌に恵まれていたし、立国するだけの財力があったから、シルヴァリーは徴兵制度の廃止と独立を求めて立ち上がったのよ。幾つか有利な物流を条件に、帝国も一度はガロの独立を認めたのだけれど・・・、私の寵がガロにあると人の間に広まり、いつしかシルヴァリーは帝国から疎まれるようになってしまったわ』

（・・・難しい話になってきたな。此处でも内政干渉はデリケートな問題なのね）

『アンジェラ、シルヴァリーに精霊石あげた。それが問題？だめ？』

『もちろん、それだけが理由ではないわ。シルヴァリーと逢瀬を重

ねる私を見て、ガロの人間に期待や羨望を、帝国には嫉妬や不満を与えてしまった事が一番の理由かしら。シルヴァリーは命を狙われるようになり、私は更なる加護を与える。上手く行かないものよね。彼の為に何かしようとすればする程、彼を孤独にさせてしまうのだから。

結局、アシュレイとシルヴァリーに説得されて、私はしばらく地上<sup>ハロ</sup>への干渉を控える事にしたの。見計らったように帝国が総力を挙げてガロへ攻めて来ても、私は動かなかった。あの時、恋人として彼を助けるべきなのか、天下始祖精霊<sup>ケブラーボン</sup>として傍観者であるべきなのか、生まれて初めて己の立場に疑問を覚えたわ』

『・・・それで、どうしたの？』

『アシュレイや仲間達には止められたけれど、私はシルヴァリーに会いに行ったわ。彼は甲冑に身を包み、ちょうど出陣するところだった。彼の瞳は、何故来たと語っていた。同時に私を求めて激しく燃えていた。私の胸は身を焦がすような恋情で締め付けられたわ。その時ようやく、彼こそが私の運命だと分かったの。』

・・・私が争いの調停を申し出ようとしたところで、彼の腹心の部下、ヴィシヤスに”どうかお助け下さい”と請われたわ。私はまさにそうするつもりだったから、ヴィシヤスの手を取ろうとしたけれど、シルヴァリーは激昂して彼を罵ったわ。かける言葉を躊躇ううちに、彼は去ってしまった。・・・最期の言葉は”必ず戻る”。彼を信じて待つべきなのか、過度な干渉と分かっているても戦場を鎮めるべきなのか、私は迷ったわ』

『・・・辛いね。好きな人が、戦場に行く』

『そうね・・・。シルヴァリーの傍にも寄れず、かと言って精霊界<sup>ハーレイスフィア</sup>に帰るわけでもなく・・・、離れたところから見守っていたわ。中

途半端に迷ったりせず、シルヴァリーの傍にいれば良かったと・・・  
、今でも後悔しているわ。

ヴィシヤスはシルヴァリーが一番信頼していた人間だったから、  
私も油断していたの。まさかヴィシヤスが裏切るとは思っていなかつた。  
私の助力を仰いだ時、随分悲壮な瞳をしていると気付いていたのに・・・」

「彼がどうしたの・・・？」

「ヴィシヤスは帝国と通じていた。シルヴァリーの暗殺と引き換えに、  
停戦を申し入れていたのよ。二人きりの天幕の中でシルヴァリーを殺してしまった。  
私は間に合わなかった。即死だったわ」

アンジェラは重いため息を吐いた。

「・・・此処から先は、あまり聞かせるような話じゃないから、  
簡単に話すわね。

私は人間にとっても酷い事をした。ヴィシヤスを殺して、皇帝を殺した。  
私の怒気に同調した同胞達は、罪のない人間を手にかけた。たくさん血が流れたわ。  
私は止めなかった」

「・・・」

「形なきシルヴァリーの魂を抱きしめて、アンフルラージュ世界樹の中で永遠の眠りについたの。  
輪廻を無視して、シルヴァリーの魂を損なわず留めるために、私は膨大な魔力をエーテル注ぎ続けた。  
いつか魔力が尽きて消滅したとしても、構わなかった」

「・・・」

重たい話題にすっかり沈黙してしまった道子を見て、アンジェラは困ったように微笑した。

『怖がらせてしまった？』

道子はふるふると首を振った。

『トウコに嫌われたら悲しいわ。．．．でも正直に話しておくわね。人間が精霊を恐れるようになったきっかけは私にあるのよ。帝国にも恨まれているわ。私が殺した皇帝の嫡子は禁呪を犯して命を繋いでいるの。恐ろしい事に、今も死ぬ事のない身体で皇帝に座しているわ。長い間目を背けてきたけれど、これは私の罪。禍根を引き受けなくては』

『．．．．．』

『そんな顔をしないで。私を絶望から救ってくれたのは、ロザリアとトウコなのよ』

『え？』

不思議そうに瞬く道子の元に、とことことロザリアが寄ってきた。ぺたんと床に座ると、甘えるように膝に頭を乗せる。ふわふわの金髪を無意識に撫でる道子を、アンジェラは目を細めて見つめた。

『ロザリアもリリイという唯一の存在を失って、時を止めてしまった。けれど、輪廻を経てめぐり合ったトウコを得て、今こうして此処にいる。』

ロザリアとトウコを見ているうちに、シルヴァリーを輪廻に還そうと思えるようになったのよ。アシユレイが地上を見捨てる前に止

ハロレアン

める事も出来たわ。いつかまた、シルヴァリーに会える日を楽しみにしている。ようやくそう思えるようになったの』

『・・・いつかまた、シルヴァリーに出会えたら、アンジェラは』

『なあに?』

どうするのだろう、と思う。途方もなく長い間、ただ一人を思い続けて、ようやく巡り会えた相手がまた人間だったら? 命の長さがあまりにも違う。彼等から見れば、人間の寿命なんてあつという間ではないのだろうか。

『ねえトウコ。誰かを好きになるって素敵な事よ。私はきっと、何度でもシルヴァリーに恋をするんだわ』

(それが、答え?・・・何て一途で)

『長い時を生きる精霊は、皆気も長いよ。ただ一つの気持ちをいつまでも大切にするの。アシュレイもきつと、トウコを想い続けるわ』

『・・・・・・・・』

『本当にアシュレイと離れて良いのか、離れられるのか、もう一度よく考えて欲しいの』

道子はぎこちなく、穏やかな青い双眸から視線を外した。  
どう応えれば良いのか、まるで分からなかった。



ローズ・ガーデン・パーティー  
薔薇祭最期の夜。

道子とロザリアはパーティーから少し離れたところで、噴水の縁に腰掛けていた。煌くオーロラ・カーテンの下、芳しいローズ・ワインを片手に精霊達の奏でる音楽に耳を澄ませる。何ともロマンティックな夜である。しかし道子はちらりとロザリアを見ると、くすりと笑みを漏らした。美しい夜も、もりもりと果物を頬張るロザリアが隣にいるおかげで、何処かコミカルに感じてしまう。

『美味しい?』

『うん。食べる?』

『ううん。・・・いっぱい食べて』

『うん』

道子はロザリアから視線を外すと、音楽を奏でる精霊達を見つめた。数日間に渡る祭典も今日で終いである。精霊達はちらほらと帰り始めていた。中には道子に声を掛けてから帰る者もいる。

(・・・アシュレイ、何してるんだろう)

今朝別れたきり、アシュレイを見かけていなかった。切なさが増すだけかもしれないが、やはり今夜は傍に居たい。道子は名を口にしてみようか、先程から悩んでいた。決心がつかずに、酒ばかりが進む。

『・・・ロゼ、お菓子も食べる。取って来るね』

『あ、うん』

ロザリアはお皿を片手に取ると、じっと道子を見つめた。

『ん？』

『ロゼはお菓子を食べてるから・・・、道子は我が君にお会いして来たら？』

『え』

どうやらロザリアは気を利かせてくれたようだ。道子は苦笑すると、勢いよくワイングラスを空けた。

（何か勢いついた）

『うん、行ってくるね。ありがと、ロゼ』

『うん。・・・ううん、ちょっと待って』

ロザリアは迷ったように視線を泳がせると、手にしている皿を噴水の縁に置いた。何だろうと、道子が見守る中、ゴソゴソとポケットの中から何かを取り出す素振りをする。

『あげる』

差し出した手の平に、綺麗なルビーのピアスがぼとりと落ちた。

『え?』

『・・・先に渡しておくね。これ、ロゼの精霊石なの。身につけてくれる?』

道子はまじまじと真紅の宝石を見つめた。闇夜でも上品に煌く宝石は、まるでロザリアの瞳のようだ。

『トウコの世界では、ロゼはその宝石の中に隠れているから。失くさないでね』

『ロゼ、ありがとう。凄く綺麗』

『トウコといつも一緒にいるよ』

『・・・しばらく、忙しいと思う。でも、たくさん、遊ぼうね。私の世界、いっぱい見せる』

遊園地や動物園、水族館。ロザリアの喜ぶ顔が目に見えよう。道子は少しはしゃいだ気持ちでロザリアを見つめた。けれど、ロザリアはいつになく大人びた表情で静かに微笑んだ。

『・・・人間が見ている中で、トウコと並んで歩いたり出来ないよ。ロゼはトウコの世界を少しも知らないから、そんな危険は冒せない。トウコしか辺りにいなくても姿を見せないつもりだよ。だけど精霊石を身につけていれば、ロゼでも思念でトウコと会話出来るから。何か困った事があったら、いつでも言って?』

『そんな、平気。時々、外で遊ぶ・・・』

『ダメだよ。リリーの時だって、誰にも見つからないと思っていたのに、見つかったんだから。声に出してロゼとお話しもダメだからね。必ず思念を使つてね』

『・・・・・・・・』

道子は少し考えて、軽く頷いた。ロザリアは見知らぬ道子の世界をかなり警戒しているようだが、そのうち生活が落ち着けば考えも変わるだろう。

『分かった。ありがと、ロゼ。アシュレイに会いに行つて来る』

道子は手を振つてロザリアと別れた。

私室に戻ると、ドレッサーにしまつておいた小さな包みを取り出した。親しい精霊達にだけでも、何かお礼がしたくてこっそり用意しておいたのだ。薄いシルク素材のストールに、それぞれの名前をアルファベットで刺繍してある。アシュレイ、ロザリア、ティルノイゼ、シェヘラザード、ヴェルグハルト……。此処まで用意したからには、面識はないが他の四精霊にも贈るべきかと思い、頑張つてユリーシエラとミネルヴァスの分も用意した。

ロース・ガーデン・パーティー

実は薔薇祭の前から作り始めていたのだが、連日パーティーを満喫したり、寝込んだりしていたせいで進みが遅れてしまったのだ。それでも何とか帰るまでに間に合わせる事が出来てほつとしていた。

（・・・男性にはあんまり実用性ないかもしれないけど・・・、でも気持ちが一番だし）

ドレッサーの前で包みを見つめっていると、ティルノイゼが様子を見にやって来た。

『トウコ様、お召しかえされますか？』

『あ、うーん。ううん、しません』

『畏まりました』

鏡の中でティルノイゼと視線がぶつかり、道子は閃いたように「あ」と呟いて席を立った。ドレスサーの中からティルノイゼに用意したプレゼントを取り出して、どうぞと差し出す。

『私に？ 開けても宜しいのですか？』

『うん。どうぞ』

ティルノイゼは綺麗に包装をはがすと、ストールを取り出して広げてみた。紫色の刺繍に気がついて、不思議そうに指でなぞる。

『・・・私の世界の文字。ティルノイゼ、名前を刺繍した』

『まあ！』

ティルノイゼは感極まったように声を上げた。ストールを手に取り、刺繍を間近でじっと見つめる。

『これはトウコ様の世界の言葉ですか？』

『はい』

『素敵な贈り物をありがとうございます。大切にしますね』

ティルノイゼが嬉しそうに言ってくれるので、道子にはっこり笑った。

（・・・本当はジルのコンパクトもあげたかったんだけど）

ポーチに入れておいた箸のジル・スチュアートの姫仕様コンパクトミラーは、此処へ来てからいつの間にか何処かへ行ってしまった。道子のお気に入りのコスメグッズだったので残念である。

『ティル、本当にありがとう。優しくて、綺麗で、大好き』

『トウコ様・・・』

道子が満ち足りた思いで見つめていると、アメシストの瞳からはらと涙が零れた。上品で洗練された美女なのに、まるで無垢な子供のようだ。道子はティルノイゼをそっと引き寄せると、いつもロザリアにするように優しく髪を撫でた。

『ティルに会えて、良かった』

『私も、トウコ様にお会い出来て幸せです。叶う事なら、いつまでもお傍にいたい』

『ありがとう、ティル。嬉しい』

ティルノイゼはゆっくり体を離すと、ネックレスを外して道子の手握らせた。それは透明な鎖に涙形のアメシストを通した上品なアクセサリーだった。

『私の魔力を秘めた精霊石です。どうか受け取って下さい』

『いいの？ 凄く綺麗』

『トウコ様・・・』

アメシストのネックレスを身につけた道子を見て、ティルノイゼは再び涙を零した。

『そんなに、泣かないで。帰る、明日。今日じゃない。涙、なくなっちゃう』

『寂しくなります』

『うん・・・』

なかなか笑ってくれないティルノイゼを見て、道子は敢えて明るい笑顔を浮かべた。

『ティル！ 私、アシュレイに会いに行く。おかしいところ、ない？』

涙を止めて瞬くティルノイゼの前で、道子はくるりと回転して見せた。ティルノイゼは涙を拭くと、優秀な女官の目で道子の全身をチェックし始めた。

『御髪が少し・・・。こちらへいらして下さい』

てきぱきと道子の世話を焼くティルノイゼを見て、道子はほっと胸を撫で下ろした。明日、いざ別れの局面では道子も泣いてしまう

かもしれないが、それまでは出来る限り笑っていたい。美しいアメシストの宝石を握ると、不思議と指先が温まる心地がした。

『アシュレイ』

誰もいないプライベート・ガーデンで静かに名を呼ぶと、想い人は直ぐに現れた。

『こんばんは、道子』

『こんばんは・・・』

佇むだけで周囲を優しい銀色の光で照らす、麗しいこの世界ハーレイスフィアの皇帝。アシュレイと両想いになれた事が、今でも信じられない。

（・・・元の生活に戻った時、此处での出来事をどんな風に感じるだろう）

『ティルノイゼの守護石ですね』

『あ、これ』

道子は胸元に光るアメシストの宝石を手の平に乗せた。

『私とロザリアとティルノイゼ・・・、次は誰が貴方に加護を与えるのやら』

アシュレイはくすりと笑うと、道子を抱き寄せた。

『・・・・・・・・』

（アシュレイ・・・）

優しい腕に囲われて、道子は満ち足りた想いで瞳を閉じた。

『愛しい人、貴方が好きです』

道子はそつと瞳を開けた。ドキドキしながら見上げると、真摯な青い双眸と視線がぶつかる。

『私も、好き……。アシュレイ、私に、私を？　好き、夢のよう。どうして、私？　不思議。私、人間。精霊、ない。・・・私がリリの欠片だから？』

ずっと気にかかっていた事を思い切って聞いてみた。アシュレイの反応が怖くて、思わず表情が強張る。

『何故かは・・・私にも分かりません。ただ、道子に所有印を入れた時から貴方に惹かれていました。貴方の脈打つ暖かな鼓動が、心の一番深いところまで届くのです。元の世界へ帰すためとはいえ、本音を言えば所有印を消したくはありませんでした』

首筋を少し冷たい指先に撫でられて、道子の胸はぎゅうつと甘く締め付けられた。

『所有印を消してからも、道子への想いは募る一方で……。まるで……。途方もない生を経て来たと言うのに、こんな時何と言え

ば良いのか。稚拙な言葉でしか出て来ませんが、貴方が好きです。  
離れたくない』

『嬉しい、アシュレイ』

道子は手にしていたストールをふわりとアシュレイの首にかけた。  
青い刺繍がよく見えるように摘まんで見せる。

『私の名を？』

『うん。受け取ってくれ。』

アシュレイは刺繍に口付けると、嬉しそうに微笑んだ。

『もちろんです。道子が私の為に贈ってくれたのですから。これ程  
嬉しい事はありません』

『・・・・・・』

道子は何か言おうとして、止めた。聞きたい事も、言いたい事も  
たくさんあるはずなのに、上手く言えそうにない。ただ愛しいと気  
持ちを込めて、アシュレイの背に腕を回した。

心の片隅で、もう一度会える事を切に願って――・・・。

ローズ・ガーデン・パーティー  
薔薇祭が終わり、アシュレイの計らいで昼夜を分けていた精霊界  
に永遠の日差しが戻って来た。  
ハーレイスファイア

道子は此処へ来た時の懐かしい服装に身を包み、初めて宮殿に足を踏み入れた場所、中央庭園に佇んでいた。  
フォーマル・サンクン・ガーデン

薔薇祭は終わったというのに、ガーデンには大勢の精霊達が集まっていた。ずらりと並ぶ精霊の中に、お世話になった精霊達の姿を見つけて、道子の瞳には早くも涙が浮かんだ。

(・・・皆、見送りに来てくれたんだ)

『トウコ様、またお会い出来る日を楽しみにしております』

シエヘラザードは道子の前に進み出ると、優雅にお辞儀した。そつと道子の手を取り、白い手の甲に唇を押し当てる。道子は思いあまって、腰を落としたシエヘラザードの首に抱きついた。

『トウコ様』

『シエラザードさん、いつも優しい、たくさんありがとう』

感謝の気持ち伝わるように、ぎゅっと力を込めた後ゆっくりと身体を離れた。バックからストールの包みを取り出してシエヘラザードに手渡した。

『ストールに名を刺繍してあるの』

『私に？　ありがとうございます』

銀系の刺繍を指でなぞり、シェヘラザードは表情を綻ばせた。

『私からも、ささやですがこれを』

そう言って、まるでダイヤのように輝く宝石を道子の手に乗せた。  
三日月にカットされた宝石を見て、道子の目は輝いた。

『わあ、綺麗・・・』

『トウコ様に加護がありますように』

『ありがとうございます！』

道子は笑顔でお礼を口にした。するとヴェルグハルトも傍に寄ってきて、道子の手にエメラルド色の宝石を手渡した。多角形にカットされた宝石を大切にバッグにしまい、彼にもストールの包みを手渡した。

『大切にします』

ヴェルグハルトもストールの贈り物を喜んでくれたようだ。喜ぶ彼らをニコニコと見つめている道子の隣で、ロザリアは面白くなさそうな顔をしている。しかし何も言わずじっとしているあたり、少女の内面も大分成長したようだ。道子がよしよしとロザリアの頭を撫でると、ロザリアは得意気な顔で口を開いた。

『ロゼの方が先に精霊石を渡したんだから。ちゃんと身につけてもらえるように、トウコの耳飾を研究して、加工もしたんだからね』

道子はきょとした顔でロザリアを見つめた後、納得したように頷いた。

（あそつか、これ精霊石だったんだ）

慌ててバッグから銀色とエメラルド色の宝石を取り出した。道子の心を読んだかのように、彼等は穏やかな眼差しで頷いた。

『トウコ様には既に心強い守護石がついておりますが・・・、私達の気持ちです。どうか受け取って下さい』

『ありがとう、シエヘラザードさん、ヴェルグハルトさん。大切にします』

それから、精霊石を渡してくれる精霊達は後を絶たなかった。最初はバッグにしまっていたが、次第に入りきらなくなってしまい、ティルノイゼに小物入れを用意してもらった。小さな石も集まれば結構な重さになる。しかし、華奢な外見に似合わず、ロザリアが難なく片手で抱えてくれた。

『こつなると思ったの』

ロザリアは呆れたように、宝石の詰まった小物入れを見下ろした。

『え？』

『皆、トウコに精霊石を渡すと思った。もう、我が君とロゼの精霊石があれば十分なのに』

『でも、嬉しいよ。皆の気持ち、嬉しい』

『うーん』

ロザリアはまだ不満そうだが、それ以上不平を口にするのは我慢したようだ。

『トウコ様・・・』

悲しそうな表情でティルノイゼがやって来た。道子の手を取り、そつと手の甲に口付ける。道子も膝を折って精一杯綺麗なお辞儀を返した。視線が合うと、お互いに潤んだ瞳で惜別を口にした。

『ティル、元気で』

『トウコ様、どうかお元気で』

澄んだアメシストの瞳から涙が零れると、道子の瞳からも涙が零れた。一度涙が溢れると、どうしても止められない。寂しさを癒すように、どちらからともなく手を伸ばして抱き合った。

涙と一緒に塞き止めていた感情が、記憶と共にあふれ出した。

此処へ来た時。最初は右も左も分からなくて、ただただ不安で心細かった。

「どういうこと？ 意味分らないよ・・・」

「ちょっと！何！？」

「な、なんで……。アレ、浮かんでるの？　ラピュタ？」

「やめてやめてやめて。もういい、見せないで」

「アシュレイと一緒にいてはダメですか？」

だけど……。綺麗で優しい人達に出会えた。

『私はティルノイゼと申します』

『よくお似合いです。羽は魔力による幻影ですから、気兼ねなくソファアに寄りかかれますよ』

『トウコ様に薔薇の祝福がありますように』

『トウコ様、薔薇水で絞った蒸しタオルです。瞼に暫く押し当ててください。腫れは直ぐに引きますから』

『それにしても、トウコ様のアイディアは素晴らしいです。毎日、目を楽しませてくれますね』

『私も、トウコ様にお会い出来て幸せです。叶う事なら、いつまでもお傍にありたい』

ロザリア――

『私の名前、ロザリアって言うの。リリイがつけてくれたんだよ。いつもロゼって呼ばれていたの。さっき呼んでくれて嬉しかった。ありがとう』

『分かってるっ！ トウコはリリイじゃないけど、違うけど、でも！ リリイの欠片を感じるの。ずっとリリイを探していて、ようやくトウコを見つけた。もう絶対に離れたくない。トウコの傍にいられないなら、もう消えてなくなりたいっ……！』

『ロゼの大切なトウコに、薔薇の祝福を』

シエヘラザード――

『トウコ様の装いは大変趣味がよろしいと、テイタニア古代精霊の間でも評判だそうですよ』

『ああいった集いは苦手なんです。遠くから見ているだけで十分。トウコ様は楽しんでいらっやいますか？』

『ふふ、今日の御召し物も素敵ですね』

『皆、トウコ様がお帰りになると聞いて、残念に思っていますよ』

『トウコ様がいらしてから、我が君はお変わりになりました。幽玄の君も御姿をお見せになられて、宮殿がこのように賑やかになるのは久方ぶりです』

『我が君のお傍に居て欲しいと、お願いしていますのに』

ヴェルグハルト――

『ありがとうございます。絵本をお読みになるトウコ様も、おかわいらしいですよ』

『トウコ様が遠い地からいらした事は聞いております。大切な方達を残してきたとも。ですが、私はこのままトウコ様に、我が君のお傍にいて欲しいと思っています』

『トウコ様、ロザリア。祝福をありがとうございます。同じく貴方に祝福を』

『……寂しくなりますね。離れていても、トウコ様とロザリアの為に祈ります』

アンジェラー――

『トウコ、帰ってしまうの？』

『そんな顔をしないで。私を絶望から救ってくれたのは、ロザリアとトウコなのよ』

『本当にアシュレイと離れて良いのか、離れられるのか、もう一度よく考えて欲しいの』

そして、アシュレイ……。

『サンルームです。ハイレイスフィア精霊界の夜空を見せてさしあげます』

『ふふ、まさに薔薇姫ですね』

『今夜は私に貴方の時間を下さい』

『そう怯えないで下さい。何もしませんから。貴方を無事に帰してあげようと……、決めたのです』

『自覚したのは最近ですが……、残念な事に、貴方はもう帰る場所を選んでいるから。離れたくはないけれど、貴方の幸せを何よりも願います。だから、』

『可愛い人。泣かないで下さい、何処にいても、貴方を忘れません』

『そんなところも、可愛い』

『なるほど、道子の膝の上でまどろめば、楽しい夢が見れそうですね』

『……今私が望めば、手に入りそうな気がします。道子、私と……』

『愛しい人、貴方が好きです』

最初は帰る事ばかり考えていたのに、いつの間にか居心地良くなっていた。

それなのに……。

（アシュレイ、アンジェラ、皆。ごめんなさい。何が正解なのか、やっぱり分からない。元の生活に戻らないと、此处での出来事を整理出来そうにない。後悔したくないけど、したくないから。また戻って来ても良い？）

道子は許しを請うように大切な精霊達の名を心の中で呼んだ。

『……本当に、どうして当事者には分からないのかしらね。実は、とても簡単な事なのに』

『アンジェラ！』

麗しい精霊が姿を見せると、ティルノイゼは恐縮したように膝をついて頭を垂れた。他の精霊も同じように膝をつく。立ち尽くす道子の前に、アンジェラはふわりと舞い降りた。

『待っているわ』

『……っ！ うん！』

感情に任せて抱きつきたいところだが、アンジェラの半透明の身体では抱き寄せようにも、道子の腕が空を搔くだけだ。道子は仕方なく顔を覆って嗚咽を堪えた。

『きつと直ぐよ。そんなに泣かないで』

『道子』

柔らかく名を呼ばれて、道子のはつと顔を上げた。涙に濡れた顔に、羽のようなキスが落とされる。

『そんなに泣くのなら、行かなければ良いのに』

「・・・分かってるでしょ、意地悪」

思考が溶けて、思わず日本語で不満を口にした。アシュレイは、可愛くて仕方がないという眼差しで道子を見つめた。

『送ってさしあげます。また戻って来る時も、お迎えに行きますよ』

道子は泣きながら笑った。

『これ、ユリーシエラと、ミネルヴァスに』

道子は此処にはいない四精霊への贈り物を、アシュレイに手渡した。快く受け取ってもらい、嬉しそうに笑顔を浮かべる。

『きっと喜ぶでしょう。お預かりします』

『ありがとう』

アシュレイは道子を抱き寄せると、前髪を分けて露になった額にそつと口付けた。優しい眼差しで道子を見下ろした後、すつと冷気を込めた眼差しで周囲を見渡した。

『ケブラーホーン天下始祖精霊の名において命じます』

凜とした声に周囲の雑音がぴたりと消えた。抱き寄せられた腕の中で、思わず道子まで呼吸を止めて次の言葉に備えた。

『道子の安寧を妨げる事、永遠に能<sup>あたわ</sup>ず。害する者は滅せよ』

（わ、私の事？）

しんと静まりかえったガーデンの中で、彼等が真摯に耳を傾けている事が分かる。

『彼女は私の大切な人。彼女の無事を最優先事項とします。此方との橋渡しは口ザリアが行いますが、予期せぬ闇の出現に備えて、最

短で動ける者が即刻援護に回る事』

（これから帰る時の話？）

『道子、安心して此方へ戻って来て下さいね。何かあれば、全ての眷属が力になります』

『戻って・・・？』

道子は戸惑ったようにアシュレイを見上げた。

『ふふ、お待ちしていますよ。世界を違えている間は、必ず守護石を身に付けていて下さいね。あらゆる災厄から貴方をお守りします』

『はい、大切にします』

道子はアシュレイからもらった、青いサファイヤが光るブレスレットを持ち上げた。

『ロザリア、くれぐれも道子をよろしく願います』

『はい、我が君』

いつになく真剣な眼差しで頷くロザリアを見て、道子は益々戸惑ったようにアシュレイを見上げた。厳粛な空気について行けず、おろおろしてしまう。

『道子は何も心配しないで。元の生活でゆっくり心身を休めて下さい。私はいつでも此処で待っていますから』

『うん・・・』

『愛しい人、きつとまた』

ふわつと道子の周囲に風が流れた。目には見えないが、アシュレイの魔力エーテルを感じる。いよいよ帰る時が来たのだ。

『アシュレイ!』

頭が真っ白で、何も言葉が出て来ない。アシュレイの綺麗な顔がゆっくりと降りて来る。道子はそっと瞼を閉じた。触れるだけのキスが落とされて、直ぐに離れて行った。ゆっくり目を開けると、嘘みたいに綺麗なロイヤル・ブルーの瞳が道子だけを映して煌いていた。

『アシュレイ』

『道子、待っています。必ず—』

視界が眩い光に包まれて、閉じたくないのに目を開けていられない。アシュレイの言葉を最期まで聞き取れなかった。

「はあっ」

息を吸い込んで目を開くと、見知らぬ光景が目に見え込んだ。抜けるような青空も、青々とした木立も、白亜の宮殿も見当たらない。

い。恭しく頭を垂れていた精霊達も居ない。アシュレイが、居ない。

呆然と周囲を見渡して、見知らぬ光景どころか、見慣れた2DKの自分のアパートである事に気がついた。

「あは・・・、帰って来た」

恐々とテレビを点けて、チャンネルをパツパツと切り替える。当たり前のように使っていた文明機器が、異質に感じられて仕方なかった。

テレビには、6時40分と表示されていた。

（今日、何日？）

テーブルの上に置かれた新聞には2月10日と書いてあるが、これが今日の新聞なのか分からない。

（あそうか、テレビ欄と照らし合わせてみれば・・・）

道子はチャンネルを切り替えて、新聞のテレビ欄と一致しているか確認した。間違いなく、2月10日のようだ。

「戻ってきた」

それでもまだ信じられなくて、冷蔵庫の中を開けてみた。ちゃんと冷えているし、腐っている食品もない。愛飲しているカフェオレもストローがさしたままの状態で入っていた。洗面所の明かりを点けて、日用品を見渡してみる。洗濯済みのタオルはきちんと畳んであり、脱いだ服は洗濯機の中に入ったままだ。

見慣れた日常風景を、見れば見る程混乱して来た。

（・・・これは夢？ 現実？ 私どうやって戻って来たの？）

「ろ、ロゼ！」

道子は焦ったように声を上げた。応える声はない。

「ロゼ、いる？」

周囲を見渡してもロザリアの影すら見当たらない。

（一緒にいるんじゃないかった？ どうなってるの？）

背筋を寒いものが駆け抜けて、道子はバタバタと外へ飛び出した。冷たい朝の空気が肺に入り込んでくる。吐く息が白い。これが夢とはとても思えなかった。

（落ち着いて、落ち着いて……。夢じゃない、帰って来たんだ）

道子は腕につけたブレスレットを見下ろして、ほっとため息を落とした。

（アシレイからもらったブレスレット、ちゃんとある……。あれも夢じゃない。本当にあった事なんだ。どうしてロゼからの反応はないんだろう。何か……。）

「あっ」

道子は閃いて、心の中で必死にロザリアの名を呼んだ。

”大丈夫。聞こえてるよ、トウコ”

”ロゼ！！！！ 良かった”

道子は脱力したように手すりを掴んだ。

”大丈夫、ちゃんとトウコが精霊界へ来た日に戻って来たんだよ。  
全部元通りだよ。慌てないで。寒いから、お部屋に戻った方が  
良い”

”うん”

道子は部屋に戻ると、コートを脱いで鞆を置いた。そしてようやく、精霊石のつまった小物入れがベッドの傍に置いてある事に気がついた。

「全然気付かなかった・・・」

煌く宝石を幾つか手に取り、道子はようやく息をついた。

（帰って来たんだ）

『行ってしまったわれましたね』

『・・・・・・・・』

シェヘラザードの呼びかけにアシュレイは応えなかった。直ぐにまた手中に出来ると分かっている。そうは思っている、今、消えてしまった腕のぬくもりが恋しい。

『寂しくなるわね』

いつの間にか、アンジェラが傍にいた。氣遣うような眼差しを向けられて、アシュレイの心は僅かに軋んだ。昔、今のアシュレイと同じようにアンジェラが恋人と離れた時、別れを惜しむアンジェラに、心無い言葉をかけた事がある。人間の恋人を想う彼女の気持ちケブラーホーンが理解出来ず、天下始祖精霊の責務を説いた。

『アンジェラ、貴方に随分と酷い言葉をかけた事を、どうか許して欲しい』

アンジェラはくすりと笑った。

『怒ってなんか、いないわ。私達は対の天下始祖精霊ケブラーホーンなのだから。いつか貴方にも分かる日が来ると、知っていたわ』

『・・・・どうやら、その通りです』

アシュレイは道子からもらったストールに唇を寄せた。

『大丈夫、彼女は戻って来るわ』

アンジェラはそつとアシュレイを抱きしめた後、ふわりと姿を消した。

『・・・我が君、<sup>ハロリアン</sup>地上では間もなくラナ季が過ぎ去ります』

シエラザードの言葉に、今度はアシュレイも反応した。

『分かっています。・・・ラナ季を過ぎれば下界へ降ります』

アシュレイは冷たい声音で呟いた。押さえ切れない覇気を感じて、周囲に控える精霊達が身を震わせている。

『ミネルヴァスの報告によれば、期限も間近だと言うのに、キルディアス皇子が外へ出る気配が見られないとか。ガロの皇太子は相変わらず人柱として不動だそうです』

『ユリーシエラは何と?』

『以前よりもダレイがガロを押しているそうです。キルディアス皇子が指揮を離れているので、守備を固めているのでしょう。いずれにしても、期限内に決着はつかないでしょう』

『もとより分かっていた事です。<sup>ローズ・ガーデン・パーティー</sup>薔薇祭を道子とのんびり過ごす良いい口実にはなっていましたか・・・』

『しかし我が君、幽玄の君はお許しにならないのでは?』

『アンジェラは秩序を保つ為ならば、実はダレイを滅ぼしても構わ

ないと思っている。もちろん、選択肢の一つとしてですよ。平和的な交渉を一番に望んでいる事でしよう。

私はキルディアスとアブリエルの首を取り替えて、小賢しい研究施設は壊せば良いと思うのですが……。今回はアンジェラに任せ  
てみようかと考えています』

思案気に呟くアシュレイに、シェヘラザードは短く『御意』と応えた。

+++++

ダナ・サハディ120期、恵みの精霊パールトが加護を与える、ラナ季。

ハレイイスフィア  
精霊界の皇帝、ケブラーホーン  
天下始祖精霊は長い時を経て失われた半身を取り戻した。

ラナ季が過ぎ去る頃、ガロセルヴァ・クロウ王国とダレイ・ソロス帝国間の争いは熾烈を極めていた。

エーヘルヴエスト  
”ガロ暗黒史”時代、「聖戦」の最前線となったパールホーンを境に両軍は陣地を形成し、間もなく決戦の時を迎えようとしていた。

ケブラーホーン  
天下始祖精霊がガロの第二皇子に告げた約束の期限まで、残り僅か数日の事である。

ロアノス大陸史より抜粋

+++++



ハイレイスファイア  
精霊界から帰還して、10日後―。

道子は戸惑いながらも、楽しくロザリアと共同生活を送っていた。

”トウコー、今日は雨降るよ”

（そう？ 晴れてるけど）

ロザリアの声なき囁きを聞いて、道子はベランダから晴れ渡る青空を見上げた。とても雨が降るようには見えない。

”うん。夜には降り出すよ”

天気予報も雨が降るとは言っていないが、ロザリアが言うのならそうなのだろう。薔薇の精霊であるロザリアには、天候の行方は呼吸をするが如く、当たり前のように分かるのだから。

（折り畳み傘持ってくか。ありがとう、ロゼ）

道子はそつと耳に留めたルビーのピアスを撫でた。ロザリアからもらったピアスには、彼女の魔力の結晶である精霊石<sup>エーテル</sup>が埋め込まれており、この世界でロザリアが身を隠す依代になっている。ピアスを身につけている限り、姿は見えないがいつでもロザリアと思念を交わす事が出来るのだ。

”どういたしまして”

脳内でやりとりする会話――すなわち思念は、声に出すよりも流暢に言葉を扱う事が出来た。あちらでの生活でヒアリングは大分鍛えられた道子だが、話すとなると別だ。ぎこちない片言になってしまふ。けれど思念では比較的すらすらと話せるから不思議だ。思念だと何となく映像イメージや感情のニュアンスが伝わりやすいからかもしれない。

朝の身支度を終えて玄関に向うと、ロザリアが囁いた。

”トウコ、でーぶいで持つて行かなくて良いの？”

「あ、そうだ」

レンタルしていたDVDを返そうと、せっかく袋に入れて鞆の傍に置いておいたのに、危うく忘れるところだった。

（ありがとう、ロゼ）

”どういたしまして”

ロザリアが嬉しそうに笑う。道子も笑みを浮かべて今度こそ玄関に向った。廊下と玄関には、ロザリアの魔力を秘めたクイーン・ルビーの鉢植えが置かれている。更に扉の内側には、クイーン・ルビーの生花で編んだリースが掛けられていた。魔除けだとロザリアは話していたが、道子は単純に綺麗だと喜んでいた。

「行ってきます」

扉を閉める前に「留守番よろしく」と気持ちを込めて室内の薔薇達に声を掛けると、まるで応えるかのように薔薇達は仄かに煌いた。

「宮田さん、明日飲みに行きませんか？ 総務と営業二課のメンバーで」

定時後、更衣室で着替えていると同僚に声を掛けられた。

「うーん、ゴメン。ちょっと用事があるから、また今度」

「そうですか、残念。それじゃあ、また今度」

気のいい同僚は、あっさり引いてくれた。飲むのは好きな方だし、普段なら二つ返事の道子だが、今はロザリアと過ごす時間を優先したかった。

こちらへ戻った直後は、二十年来の友人達と飲み明かしたり、実家で寛いだりと羽を伸ばしていたが、帰郷による浮かれたテンションが落ち着くと、逆に精霊界を離れて孤立してしまったロザリアの事が気になりだしたのだ。

以来、道子は仕事が終わると真っ直ぐ家に帰るようにしていた。外では反応の薄いロザリアだが、道子と二人きりで家にいる時は、ハイレイスイア精霊界で過ごしていた頃のようによく喋ってくれるのだ。

”・・・トウコ、良かったの？”

（うん、家でのんびり過ごしたいから）

同僚の誘いを断った事を、どうやらロザリアは気にしているようだ。道子は柔らかな笑みを浮かべると、「ゴロゴロしたいから、良いの」とこっさり呟いた。

帰り道にDVDレンタルショップに寄り、DVDを返すついでに新作を借りた。ロザリアがアニメや映画を気に入っているの、ここ最近マメにレンタルショップに通っている。もういっそ、月額課金のストリーム配信サービスに加入しようかと考えているくらいだ。

（・・・昨日作っておいたカレーあるし、野菜もあるし・・・。何も買わなくていいか）

買い忘れがないか思案しながらコンビニの前を通り過ぎたところで、ポツと雫が頬に落ちた。

（あら、雨）

ロザリアの予報通り、と道子は感心しながら折り畳み傘を取り出した。本降りにならないうちにさっさと帰ってしまおうと、小走りで家まで急いだ。

「ただいまー」

家に帰ると、いつものように薔薇達に声を掛けた。暗い室内の中でも、彼等は神秘的に煌いている。ロザリアは己の存在が周囲に漏れないよう、家中でも姿を消す程神経を尖らせているが、この薔薇の存在は道子的にアウトだと思う。ロザリアを刺激したくないので黙ってはいるが、人を招く際は薔薇は片付けなくてはいけないだろう。

食事を摂りながらテレビを点けて、適当にニュース番組にチャンネルを合わせた。ロザリアの意識がテレビに集中するのが何となく分かる。言葉は理解出来なくても、動きのある映像に興味を引かれ

るようだ。

『美味しそうなお菓子だね。ロゼに今度、チョコレートをあげる』

デパ地下商戦のニユースを見ながら、トウコは明るく声を掛けた。

”トウコ、思念で話して”

「もー、いいじゃない、誰もいないんだから」

”ダメ！”

道子は面倒臭そうにため息を落とした。

（分かった分かった・・・）

”・・・トウコ、怒ってる？”

（怒ってないよ）

言葉にはしなかったが、「面倒臭い」という感情が伝わってしまったようだ。

道子の苛立ちを感じてロザリアは怯んだ。人智を超えた精霊でありながら、道子を慕うあまり普段からは想像もつかない程臆病になっってしまうのだ。こちらの世界へ来てからは特にそうかもしれない。不慣れな環境に戸惑っているのだから気をつけてあげなくては、そう思いつつ道子もまたロザリアへの気配りが時折欠けてしまうのだ。

（ゴメン、ロゼ。言い過ぎた。・・・思念、使うね）

”ごめんなさい・・・”

ロザリアはしゅんと落ち込んでしまい、その後道子が話しかけても、ぼつぽつとしか返事をくれなかった。

道子は気分転換がてら家事に没頭した。洗い物と掃除を終えると、精霊石のはめ込まれたピアスとブレスレットを外した。入浴と就寝時に外す事をロザリアは当初渋ったが、代わりに魔力を秘めた薔薇を室内に飾る事で、妥協してもらったのだ。

雑誌を持ち込んでのんびり入浴を楽しんだ後、再びピアスをつけた。ロザリアはまだしよげているようだ。道子はコーン茶をマグカップに注いでテーブルに置くと、濡れた髪を拭いながら借りてきたDVDを再生した。ロザリアの意識が浮上するのが分かる。

（さーて、DVD観ようかな）

誘うように思念を送ると、ロザリアはふわふわした感情で応えた。

”ガンダルフ~~~~！！！！”

ロード・オブ・ザ・リング、第二部「二つの塔」のクライマックスで、ロザリアは感激の悲鳴を上げた。まさに白きガンダルフが救世主の如く戦場に駆けつける有名な某シーンである。このシーンは道子も大好きだ。何度見ても興奮する。この攻城戦では長髪の美しいエルフ、レゴラスの華麗な弓撃も見応えがあって素晴らしい。

”行け行け~~~~っ！！”

ロザリアは興奮のあまり、魔力が少しばかり漏れているようだ。

道子の寝そべっているベッドが少し浮き上がった。

（ロゼ、落ち着いて・・・）

道子の声は聞こえていないようだ……。ロザリアが興奮気味に喚いている間、ベッドはふわふわと浮かび上がっていた。エンディングロールが流れる頃、ようやくベッドは定位置に納まった。

”面白かったあ。トウコ、続きは？”

（また明日ね）

”えーっ！！”

道子は苦笑しながらピアスを外した。不満そうにピアスが明滅する。

「もう寝ないと」

携帯のタイマーを確認してから、いつものようにカメラロールを開いた。サンルームでアシュレイと並んで撮った写真を眺める。

「・・・・・・・・」

切なくて、愛しい気持ちが溢れて来る。そっとブレスレットを外すと、ピアスと一緒に並べて置いた。

瞳を閉じると、瞼の裏にアシュレイの姿が浮かんだ。寄り添って踊った、幸せな薔薇祭の夜。間近で見上げた煌くロイヤル・ブルーの瞳。風に揺れる銀系の髪……。

『好きですよ、道子』

アシュレイを思い浮かべていると、甘い囁きまで聞こえて来た。  
道子は幸せそうに口の端を上げて、眠りに落ちた・・・。

就寝前の映画鑑賞が、すっかり定着してしまった。

「ロード・オブ・ザ・リング」「ハリー・ポッター」「パイレーツ・オブ・カリビアン」と連日観続けた後、ミシェル・ファイファー、ソフィー・マルソーの演じる「真夏の夜の夢」を借りて来た。  
ローズ・ガーデン・パーティー  
 薔薇祭で道子がタイターニアに扮した元ネタはコレだ、と教えたかったのだが・・・、ロザリアはあまり興味を示さなかった。

（妖精出て来るし、興味あるかと思っただけだなあ）

ロザリアは映像の派手な映画、或いはミュージカル映画が特に好きらしい。ジブリとディズニーのアニメーション映画も好評だった。「となりのトトロ」では迷子のメイが泣きながらサツキの名を呼ぶシーンで号泣し、「モンスターズ・インク」ではサリーがブーと別れるシーンで号泣した。更に言うところ「ライオンキング」ではシンバを助けてムファサが倒れるシーンで号泣した。そして「ラピュタ」ではパズーとシータが破滅の呪文を叫ぶシーンを固唾を呑んで見守っていた。正直、映画よりもロザリアの反応の方が遙かに面白い。元々インドア派だが、ここ最近ではロザリアと過ごす毎日が充実していて、尚更引きこもっていた。

青空の爽快な週末。その日、道子は家でホラー・ゲームに興じていた。「サイレン」をプレイ中だ。

” トウコ、早く隠れようよ・・・。見つかったらうよ・・・ ”

ロザリアが怯えたように思念で話しかけてきた。

『ライト消したから、大丈夫・・・』

”あの敵、あつという間に来るよ。早く~~~~っ!!”

『あー、間に合わない。隠れよう』

夢中のあまり声に出して喋っている事に、道子もロザリアも気付いていなかった。

”早く!!”

クリア出来ずに何度もやり直しているステージだが、今回はいい線行っている。次第に道子もロザリアも緊張が増してきた。

”やった!! 今なら逃げれるよ! トウコ、早くーっ! 早くーっ!”

『分かってる!』

間一髪で逃げ切った。クリア後のムービーで敵のドアップが映ると、ロザリアが甲高い悲鳴を上げて、テーブルをガタガタと揺らした。

『わああっ!!!!』

”きゃああああ!!!!”

タイムリーなロザリアによる怪奇現象に思わず道子が悲鳴を上げると、釣られてロザリアも悲鳴を上げた。互いに心臓がばくばく音

を立てている。・・・驚きが去ると、どちらからともなく声を上げて笑った。実に愉快的気分だ。

”危なかったね～～！”

（難しかった～～）

一つのステージにやたら苦戦してしまった。気付けば数時間プレイしていたようだ。

（疲れたー。休憩しよう）

”え～～、続きやろうよー”

（ロゼ、やって良いよ）

”え～～・・・？”

ロザリアの躊躇いに、道子はおや？と首を傾げた。ひょっとして具現化してプレイするか迷っている？

（誰もいないし、少しくらい平気だよ。ロゼも遊んでみたいでしょ？）

誘惑するように囁くと、ロザリアはぐらぐらとかなり迷い始めた。道子はニヤニヤしながら更に誘惑の言葉を掛けたが、結局ロザリアは諦めた。

（・・・頑固だなあ。誰もいないんだから、好きに過ごせばいいのに）

” 油断大敵なの！”

道子は苦笑した。まあそのうち、具現化してくれるようになるかもしれない。そうすれば協力プレイ型のゲームも出来る。きっと楽しいだろうなと考えながらカーテンを開けた。

（あー、いい天気……。最近引きこもり過ぎかなあ。たまには外行く？）

”・・・”

（ロゼ？）

” トウコの好きに過ごしていいんだよ。ロゼは映画もゲームも大好きだけど、トウコが楽しく過ごしてくれるなら、何だって嬉しいんだから”

（私もロゼと遊ぶのが楽しいんだよ）

” 本当？”

（本当だよ。ロゼこそ、いつも私に付き合ってくれるけど、退屈じゃない？）

” そんな事ないよ”

（精霊界ではいつも転げまわってたじゃない。此方へ来てから、随分我慢してるでしょ）

”そりゃ、精霊界と此処は違うもん。怖くて走り回れないよ。けど、ロゼは何よりも道子が大切な。道子の傍にいられるなら、具現化出来ないくらい、どうって事ないよ”

（精霊界のようにには行かないけどさー、外を歩くくらいどうって事ないよ？ ロゼを連れて歩いたら目立つとは思っけど、誰もロゼを精霊だとは思わないよ）

”うん……。そうとも言えないよ。中には見抜く人間もいると思う。微量だけど魔力を秘めている人間、結構いるよ”

（えっ、そうなの？）

”うん。でんしゃに乗ると、数人はいる”

（いまいち魔力<sup>エーテル</sup>ってよく分からない。靈感みたいなもの？）

”トウコにだって少しはあるよ。自然界に働きかける力って言うのかなぁ……。上手く説明出来ないや。今度ヴェルグハルト様にお尋ねしてみたら？”

（今度っていつよ）

”トウコが望むなら、今直ぐにでも戻れるよ”

（帰って来たばかりだよ。そんな直ぐ戻らない）

”どうして？”

ロザリアの純粋な問いかけに、道子は返答に詰まった。飲み物に

気を取られたフリをして、冷蔵庫を開ける。コーン茶をマグカップに移してレンジで加熱し始めた。

”我が君のこと、好きなんですよ？ 傍にいたいって想っているのに、どうして離れてるの？”

（どうしてって・・・、どうして何の疑問も抱かないのか、逆に聞きたいよ）

”疑問？”

（アシュレイの事は好きだけど・・・、正直、それだけじゃ今の生活を捨てられない、かなあ。例えば今は両思いでも、気持ちが離れたらどうする？ その時私は何歳？ 別れてから此方へ戻る事が出来たとしても、年を取り過ぎていたら元の生活をやり直すのも厳しいじゃない）

”我が君はトウコに所有印を与えて、精霊石まで下さったんだよ。気持ちが離れるなんて、ありえない”

（じゃあ、仮に気持ちが離れなかったとして、どういう道がある？ 私の感覚では結婚式を挙げて、一緒に暮らして、子供を育てたいわけよ。でもアシュレイは王様だし、此方には来れないし、子供も・・・産めるのかよく分からないし、やっぱり私が向こうに行くしかないじゃない？ その時、友達や家族には何て言えば良いの？）

”一番大切なものを選ぶしか、ないんじゃない？”

（・・・そう簡単に、選べない。ハイレイスフィア精霊界で過ごした時間より、此方で過ごした時間の方が遥かに長いんだから。仕事をしてお金を稼い

で、地に足のついた身の丈にあった生活って、凄く安心するのよ)

チン。

ロザリアが不満そうに沈黙する中、道子はレンジからマグカップを取り出した。

”我が君は、トウコが精霊界へ戻る日をずっと待っているよ”  
ハイレイスファイア

(けど、選択肢を与えてくれたのはアシュレイだよ。思うようにすれば良い、って言うてくれた)

胸の奥がちりりと痛んだ。アシュレイは甘い言葉はたくさんくれたけれど、最後の最後で道子を引き止めなかった。帰りたいと願ったのは道子なのに、心の何処かで強引に引き止めてくれる事を願っていた。自分勝手にも程がある。そのくせ、いざ引き止められたら、きつと頑なに断ってしまうのだろう。

”それはどうでも良いっていう意味じゃなくて、トウコが本当に大切だから、傍に置くことを強制したくないっていう意味だと思っよ。トウコは凄く大切にされているよ。そうでなければ、ロゼをトウコと一緒に送り出すなんて、ありえない”

(.....)

”トウコは何を選べば良いか、迷っているんだよね？ 此方へ戻って来たのは、そこら辺考える時間が欲しかったからでしょ？ なら、ゆっくり考えれば良いんじゃないかな。ロゼはトウコの味方だからね。精霊界でも、此方の世界でも、トウコが幸せならそれで良い”

（・・・選べなかったら？ どうしようか）

”うーん・・・。あんまりのんびりしていたら、我が君が迎えに来るかも”

（えっ、そうなの？）

”言われてみると、自主的に傍にいるか、強制されて傍にいるかの違いしかないのかも・・・”

（アシュレイの傍に？ 強制して？ それはないでしょ）

” どうして？”

（優しい人だもの）

”・・・・・・”

何故か沈黙するロザリアに、道子は首を傾げた。

（何？ 違うの？）

”・・・トウコは特別なんだよ。我が君は、森羅万象を掌握する天<sup>ケ</sup>  
下始祖精霊だよ。我が君の上位精霊<sup>ブラーホーン</sup>つて、世界樹たる天上始祖精霊<sup>アンフルラージュ</sup>  
ただ一柱なんだから。怒らせたら冗談じゃなく、大地が割れて地上  
が沈むよ。トウコ以外の人間には容赦ないし・・・その辺りきちんと  
理解しておかないと、この先傍にいるにしても危険だと思う”

（そんな事言われたら、引いちゃうじゃない・・・。ロゼは私とア  
シュレイに上手く行って欲しいの？ 欲しくないの？）

”上手く行つて欲しいけど、トウコが望まないなら、意味がないと思つてゐるよ”

(・・・・・・・・)

”けど、トウコの世界って凄く楽しいから、当分このままでも良いや。ゲームしようよー!”

ロザリアは話し飽きたようだ。無邪気に誘われて、道子は疲れたようにため息をついた。

ロザリアとの共同生活は楽しいが、アシュレイが恋しい……。。

はあ。

ため息で電車の窓が白く曇った。ぼんやりと流れ行くネオンを眺めながら、アシュレイを想う。

（会いたいなあ……。）

会いたい。寂しい……。けれど、アシュレイとの間には数え切れない程障害があつて、どうしても前に踏み出す一步を躊躇つてしまう。会いに行く勇氣もないくせに、離れているとアシュレイが心変わりしてしまわないか、心配になって来る。気持ちが何処にも行けずに苦しい、早く楽になりたい……。このまま我慢していれば、そのうち忘れられる？ 気持ちが薄れるまで、あとどれくらい？

――結局、自分の事しか考えていない。そんな自分を思い知る度、嫌気がさした。

――アシュレイは今、何を想っているんだろう？

”早く精霊界へ戻れば良いのに”

帰宅するなり、ロザリアは思念で囁いた。その能天気な発言に道

子はカチンと来て、コートと鞆を乱暴にベッドに投げつけた。

（言うのは簡単だよ）

”簡単な事じゃないの？”

（決め付けないで。簡単じゃないから、こんなに悩んでるんだってば）

”我が君の事で悩んでるんでしょう？ そんなに苦しいなら、我が君に相談してみれば？”

（・・・・・・）

道子は携帯で撮影したアシュレイの写真を眺めた。感情の渦が、熱を持って瞳に集まる。

”トウコにはいつでも笑っていて欲しいよ。泣かないで・・・・”

携帯の液晶に、ぼたりと涙が落ちた。視界が滲んで、アシュレイの顔がよく見えない・・・・。

（会いたい・・・けど、怖い）

”怖い？”

（住む世界が全然違うから、アシュレイを真っ直ぐ想い続ける自信がない）

”我が君は、トウコを不安にさせたりしないよ”

（既に不安しかないよ。アシュレイ、年取らないんでしょ？ あんな綺麗な彼の隣で、私だけ老いて行くの？ 悲し過ぎる。それで彼の気持ちが冷めたりしたら、どうすれば良い？ 今感情に負けて会いに行つて、後で後悔して傷つきたくない。・・・凄く怖い）

” 老いは自然現象だし、気にする事ないと思うけど ”

（いやいや。もう・・・。ロゼには分からない）

トウコはピアスに手を伸ばした。

” 待つて！！ ・・・何か嫌な感じがする。外さないで ”

（嫌な感じ？）

” ・・・うん ”

（・・・何だか、疲れた。今日はもう、お風呂に入つて、眠つていい？）

ロザリアはまだ何か喚いていたが、道子は無視してピアスとブレスレットを外した。シャワーが湯に変わる間に、素早く服を脱いで、歯ブラシを咥えてバスルームに入った。

無心で髪を洗っていると、何か物音が聞こえた気がしたが、考えるのも煩わしくてぼんやり湯を浴び続けた。

パタンと音を立てて、バスルームの扉が開いた。道子は小さく悲鳴を上げて振り返った。

『見つけた』

異様な格好をした男は何か呟いたが、驚愕する道子の耳には届かなかった。身体を小さくして後じさると、大きな一歩であつという間に距離が無くなった。

『トウコ』

「え？えっ！？」

道子は強引に腕を引かれて、裸体を隠す間もなく立ち上がった。銀紫の瞳が全身を舐めるように這う。道子が悲鳴を上げるよりも早く、男によつて口を塞がれた。滑る足場で必死にもがくと、両手を頭上でまとめられて、痛みに涙が滲んだ。

（誰！？ 見た事ある、誰！？）

「んん・・・っ！」

口付けが深まる。容赦なく舌を入れられて、啞内を蹂躪される。全てを奪うような、攻撃的なキス。男の手が首筋を滑り、心臓の上を撫でた。思わず身体が強張る。しかし性的な触れ方ではなく、痛いくらいの力で心臓の上を指で押された。

（やだーっ！ ロゼ！）

咄嗟にロザリアに助けを求めて、ピアスを外している事に気がついた。同時に、男の事を思い出した。あちらの世界、地上のガーデ

ハロレアン

ンでティルノイゼに酷い事をした男達のリーダーだ！

（何で此处に！？）

「んうっ！」

噛み付こうとすると、冷たい指が胸の先端を掠めて、びくりと反応してしまふ。次第に身体が熱くなって来た。特に心臓が燃えるように熱い――。

（口ゼ、何処！？ 助けて！）

鼓動が煩い。心臓が燃えるように熱い。まるで炎で焼かれているようだ。

「はぁ・・・っ」

ようやく口付けから解放されて、道子は深く息を吸い込んだ。むせるような蒸気が肺に流れ込む。慌てて男を押しつけようとすると、両腕を壁に縫いとめられて、心臓の上に口付けられた。

「――っ！？」

声にならない悲鳴が、ひゅっと喉の奥で鳴る。まるで心臓が燃えているようだ。身体中が熱い。全力でもがいているのに、男の腕はびくともしなかった。やがて抵抗する力も失せ、なすがまま身を任せていると、男は唐突に身を起こした。崩れ落ちる柔らかな身体を、逞しい腕が支えた。

『俺の命を対価に、お前の心命を縛った』

「え？」

男は、トン、と道子の胸を押した。つられて視線を下ろすと、左胸に複雑な紋様が浮かび上がっていた。痺れた腕で恐る恐る触れる。痛みや熱は感じなかった。

（何コレ！？）

意味が分からず、ぽかんと男を見上げる。男もじつと道子を見つめてきた。怜悯な印象が強いが、端正な顔立ちをしている。冷たい表情からは感情が読み取れなかった。精一杯腕で身体を隠し、不安そうに眉を寄せる道子に、男は肩にかけているマントを外してかけてくれた。身体を隠す事が出来て、道子の口から安堵のため息が落ちる。

『互いの死は連鎖する。俺の死はお前の死だ。・・・お前に恨みはないが、天下始祖精霊<sup>ケブラーホーン</sup>への切り札として利用させてもらっ』

『私を、どうするの？』

道子のぎこちない片言を聞いて、男は少し目を瞠った。

『話せるのか』

『少しだけ』

『つくづく大そうな精霊石に恵まれているな。これも、お前が使役しているのか？』

男は手の平を開いて見せた。透度の高い氷の塊が乗っている。その中にロザリアの宿るピアスを見つけて、道子は声を上げた。

『ロゼ！』

（ロゼ！ 聞こえないの！？）

『封じているだけだ。王宮光魔研究所への手土産にしようかと思っ  
フリスアカデミー  
たが、選ばせてやる。身につけるか、今此处で手放すか』

『身につける』

氷の塊に手を伸ばすと、男はぐつと手を閉じた。道子が問いかけるように顔を上げると、銀紫の双眸が道子を射抜いた。

『・・・何も知らぬのか。お前には今、重い従属の呪いがかけられている。身に纏うものは全て呪いの対象になるが、それでも良いか？』

『呪い・・・？ 何？』

『その胸に刻まれた呪いは、死ぬまで解けぬ。俺が死ねば、お前も死ぬ。逆にお前が死ねば、俺も死ぬ。ただし、魔力エーテルの強い方に引力が働く。お前はもう俺に逆らえない。お前が身につける精霊石も同じだ』

（・・・この人が死んだら、私も死ぬ？ ロゼのピアスをつけたら、ロゼも巻き添えをくらうって事？）

道子は混乱して沈黙した。

『どうした？』

『身につけない場合、どうなる？』

『ブライスアカデミー王宮光魔研究所に下げ渡す。幾らでも用途はあるからな』

『・・・・・・・・』

（どうしよう。アカデミーって意味不明だけど、嫌な予感しかない）

『身につけても、取り上げない？』

『勿論。むしろ身につけるなら、決して外せない』

（どうしよう）

『・・・分かった。身につける』

『良いだろう』

男の手の上で氷は音も無く溶けた。ピアスは紅く光り、男の周囲をあっという間に茨がぐるりと取り囲んだ。同時に、怒りの咆哮を上げてロザリアが姿を現した。腰まで届く金髪がゆらゆらと揺れている。髪一筋にまで魔力が漲エナジーっている様子が、道子の目で見ても分かった。

『ロゼ』

弱弱しく道子が呼ぶと、ロザリアは泣きそうな顔で振り返った。

そして男の手から悔しそうにピアスを奪うと、道子の手に握らせた。

『ロゼ・・・』

道子がロザリアの頬を撫でると、紅玉の瞳からぼろりと涙が零れた。ロザリアの頬には、道子の左胸にある紋様と同じものが浮かび上がっていた。

『俺を殺せばトウコが死ぬ事を、よく頭に刻んでおけ。俺には敵が多くてな、しっかり守らないとトウコも死ぬぞ』

『ふざけるな・・・っ！』

ロザリアの魔力により、バスルームの壁面にヒビが入った。

『ロゼ！』

慌てて道子はロザリアを背後から抱きしめた。強張った身体から力が抜けるのが分かる。ロザリアは背後に道子を庇うと、挑むように男を睨み上げた。

『よくも・・・！　どうやって此処へ来た？』

男が無言で取り出したコンパクト・ミラーを見て、道子は目を丸くした。無くしたと思っていた、お気に入り入りのジル・スチュアートのコンパクトだ。ティルノイゼと地上へ降りた際に落としたのだろうか。

『トウコには我が君の加護がある。ガロへ行けば一瞬で灰にされる

ぞ  
』

『トウコを失っても良いならな。心命の鎖は、互いの死でしか外されない。たとえ天下始祖精霊でも、そう簡単には断ち切れまい。時間が惜しい。ガロへ連れて行く。ロザリアは石に戻れ』

ロザリアは唸り声をあげて、悔しそうに姿を消した。男は困惑する道子を引き寄せると、コンパクトを手に取り魔力を流し込んだ。バスルームの先に、何故か重厚な石作りの広間が見える。男は躊躇いなく前に進むので、道子は足に力を込めて反発した。

『・・・ちよつと!』

『さつさと歩け』

引きずられるように景色の境目を越え、とうとう重厚な広間に足を踏み入れると背後のバスルームはふつりと消えた。

「え？ えっ？」

道子は展開について行けず、呆けたように瞬きを繰り返した。男に腕を引かれるまま、ひたひたと裸足で広間を進むと、直ぐに数人の男達が近寄ってきた。

『殿下！ ご無事でしたか』

『当然です。この私が扉を開いたのですから』

『お待ちしておりました』

三人の壮年の男達は、それぞれほっとしたように一斉に声を掛けて来た。いや、一人だけ興味深そうな眼差しを道子に向けている男がいる。銀縁フレームの眼鏡の奥で、冷たいアイス・ブルーの瞳がきらりと光った。思わず萎縮して後退しかける道子を、殿下と呼ばれた男が腰に腕を回して、容赦なく彼等の前に立たせた。

『トウコだ。ようやく見つけた。どれくらい経過した？』

『半刻程。殆ど時差はありません。ジークベルト殿に、流石というべきでしょうな』

『当然です』

『しかし殿下、本当にその女性が？』

上背のある男達の視線が、一斉に道子に突き刺さる。

(コワッ!ー!)

道子は顔を引きつらせて、どうにか視線に耐えた。

『・・・想像と大分違いますな』

『・・・確かに髪も瞳も黒いが』

『素晴らしい。彼女の手をしているピアスから、迸るような魔力を感じます。この方の一体何処に、精霊の守護を受ける理由が?』  
エーテル

道子は「あ」と声に出して、握り締めていたピアスに視線を落とした。慌てて耳につけると、つけた途端、ぱちつと静電気に触れたかのように手が痺れた。

「つつう・・・」

『従属が成ったようだな』

男はようやく道子の腕を離すと、道子の左右にこぼれた髪を耳にかけながら、確かめるように両耳に触れた。銀紫の瞳でじつとピアスを見つめる。間近に顔が迫り、道子は気まずそうに視線を逸らした。

『従属って?』

『ロザリアも、完全に俺の支配に下ったということだ』

『・・・？』

道子は怪訝そうに眉を顰めたが、男はそれ以上の説明はせずに、身体を起こして道子の腕を掴んだ。

『こんな外見だが、ケブラーホーン天下始祖精霊の守護を受けていることは間違いない。ケブラーホーントウコを連れてくる時、この目で確かにケブラーホーン天下始祖精霊の精霊石を見た。流石に触れることは叶わなかったが、他にも山程精霊石を見つけて来たぞ』

（こんな外見って何だよ）

道子はむっとして男を見上げた。男は道子を視界にちらとも入れず、腰に結んでいた袋を外して銀縁眼鏡の男性に手渡した。手渡された男は袋を開けるなり、嬉しそうに頬を緩めた。

『素晴らしい！ 一体何処で手に入れたのです？』

『トウコが所有していた』

『あっ！ それ、皆からもらった、精霊石！ いつの間に・・・』

道子が不満そうに声を上げると、男達は、信じられないという顔で道子を見下ろした。

『・・・精霊の守護というのは、嘘ではないようですね』

『うっむ、確かに・・・。これだけの精霊石、初めて見た』

『ジークベルト、これを使って至急、強力な檻を用意しろ。帝国軍の甲殻機竜隊にも耐えうる強度が欲しい。ガブリエルは先に前線に復帰して、俺が戻るまで指揮を執れ。それからヴァルター、トウコの世話係に部下を二名調達しろ。口が堅くて、腕の立つ奴がいい。今日からトウコは、ジークベルトの部下、炎十字騎士団、デユアルフレイム第一隊魔道騎士見習いだ。強力な精霊使いとして、戦場に同行させると伝える。逃げ出さないように監視が必要だとも』

『甲殻機竜隊に耐えうる？ 一体何を入れて何処に置くおつもりか・・・。いいでしょう。これだけの精霊石があれば、何でも作れますよ』

ジークベルトは主君への挨拶もそこそこに、颯爽と退出した。よくあることなのか、残された男達は特に文句も言わず、何事もなかったかのように会話を再開した。

『・・・畏まりました。では彼女には、第一隊魔道騎士の隊服を用意すれば宜しいですか？』

『ああ、湯浴み中に連れて来たからな。とりあえず着替えさせてやれ。部屋は俺の隣でいい』

道子の濡れた髪や裸足を見て、ヴァルターと呼ばれた灰髪の騎士はため息をついた。

『致し方ないとはいえ、褒められた振る舞いではありませんな』

（本当だよ！！ もっと言ってやって）

トウコは咎めるような眼差しで、男を見上げた。

『ふん、何を今更。心命の鎖で縛っている相手に、礼儀も何もないだろう。・・・だが、トウコ。素直に協力すれば、出来る限り待遇は考慮しよう。俺の命運もお前次第だしな』

『いや、ちゃんと説明して。分からない。あなた、誰？』

『忘れたか？ ハロヒアン 地上で助けてくれただろう』

『助けたわけじゃない・・・』

『覚えているじゃないか』

『名前、忘れた・・・』

ヴァルターとガブリエルは、忠誠を誓う主君に対して酷い暴言だと、顔を顰めて道子を見た。しかし名を問われた男は、面白そうに眉を上げた。

『キルディアス・ガロセルヴァ・クロウ。この国の第二皇子で、今日からはトウコの上官になる。名で呼んでも構わないが、目立ちたくなければ、人前では元帥か、殿下と呼べ』

『私・・・どうして、連れて来た？』

道子のもつともな質問を聞いて、顔を顰めていた男達から殺気が消えた。キルディアスだけは不適な笑みを浮かべて、よく通る声ではっきりと告げた。

『帝国に勝つ為だ』

道子は裸足のまま、ヴァルターに腕を引かれて、石作りの客間に連れて行かれた。先ほどの広間といい、廊下や客間は全て堅牢な石壁で作られていた。意外にも洗練された空間で、上品な内装をしているが、扉を守る重々しい騎士達や、キルディアス達の勇壮な格好を見る限り、此処はお城というよりも、戦に備えた要塞のようだ。

道子は部屋で一人になると、手渡された深みのある紅蓮の隊服をしげしげと見つめた。先ほどの男達よりも、デザインがシンプルだ。階級の差だろうか。胸元に施された双剣の意匠を指でなぞりながら、そういえば彼等も同じ紋章だったなと思い出した。きっとこれが、彼等のトレードマークなのだろう。

「わー、ぶかぶか・・・」

両肩で留めてあるローブがずり落ちそうだ。袖も裾も長い。仕方がないので何度か折り返した。女性物の下穿きは用意してくれていたのに、隊服は手頃なサイズがなかったのだろうか。

しばらく鏡の前で、いろんな角度から格好を確かめていたが、どうにもならないので諦めることにした。次に濡れた髪をどうしようかと考えて、閃いたように手を叩いた。

（ロゼ？ いるー？）

”はい・・・”

（あ、いた。良かった。髪乾かしてくれる？）

”はい”

（元氣ないね。何かされた？）

”・・・されたよ。呪縛されたよ。あいつら許せない”

（その呪縛、って結局何なの？ あの人の話じゃ、いまいち分らない）

”命を対価にした、重い呪縛だよ。キルディアスが死んだら、トウコの心臓も止まる。逆もそう。トウコが死ねば、キルディアスの心臓が止まる。・・・さつきから解呪を試みてるんだけど、そう簡単には出来ないね。我が君ならあるいは・・・”

（その呪縛って、ずっと続くの？）

”うん。死ぬまで続く”

（・・・・・・）

”大丈夫、きっと我が君が助けてくれる”

『アシュレイ、呼んだら来てくれるかな？』

道子は淡い期待を込めて、声に出してみた。

ハイレイスフィア  
”精霊界のようには行かないよ。我が君の精霊石もないし・・・、ましてやキルディアスの支配を受けている今、トウコの気配はちっちゃいエルフ並だよ”

(えー……。せつかく戻って来たのに、アシュレイに会えないの？)

精霊界ハイレースフィアに戻って来たわけじゃないよ、ここ地上だし。ハロマンでも此処を出れば、魔力エーテルの浸透を邪魔してる障壁も消えると思う。そうすれば、我が君なら気づいてくださると思う”

(じゃあ、何とか抜け出さないかね)

”うん。でも、もう少し様子を見た方がいいね。対精霊用の魔力障壁が強すぎて、隣の部屋ですら視えないんだ。こんなに嚴重に精霊対策して、一体中で何してると思う？　ロゼ、嫌な予感しかない。絶対これ、精霊を捕まえて酷いことしてるよ”

(人体実験……。じゃなくて、精霊体実験とか？　ジークベルトって人、いかにもって感じだよ)

”うん。あの人間は間違いなく、何体も精霊を殺してる。でもそれを言ったら、あの場にいた全員、酷い死臭だよ”

(……。)

道子はふりと震えて、きつく自分自身を抱きしめた。軽口を叩いたつもりが、ロザリアに真面目に肯定されて、笑えなくなってしまうった。

(……。とにかく、いつでも動ける準備はしておこう。ロゼ、髪乾かして)

ロザリアに身支度を手伝ってもらった後、道子は早速部屋を物色し始めた。部屋の奥には大きな窓が幾つかあるが、はめ殺しの頑丈な窄があるため開閉は出来そうにない。道子は興味深そうに窓の外を眺めた。巨大な岩山が横一列に連なっており、人が出入りする為の穴が無数に開いている。此処はまさに巨大な岩の要塞だ。

窓からの脱出は諦めて、今度は壁に触れながら部屋をぐるりと一周してみた。目につくところには、特に仕掛け等はないようだ。天井はかなり高いので、とても手は届かない。床や壁には綺麗な石が埋め込まれている。そういうデザインなのかと思ったが、よく見ると床、壁の四方すべてに大きな紋様がうっすら描かれている。何か呪力めいた役割でもあるのかもしれない。道子は慌てて壁に触れた手を放した。

”・・・あんまり触らない方がいいよ”

（やっぱり？ 何かよくないものだった？）

”うーん・・・”

道子はロザリアが何か言ってくれるのを待ってみたが、歯切れの悪い返事しかくれなかった。

（そもそも、出られるのかな）

両開きの扉は、まるで鉄の塊のように重たい。しかし鍵は掛かっておらず、道子は意外に思いながら、どうにか扉を開いた。そおつと外を窺うと、キリっとした印象の少年と目が合った。ドキリとして顔をひっこめた後、直ぐに身体ごと外に出た。少年は止めたりせず、さっと後退すると、胸に手を当てて敬礼をした。

『デュアルフレイム  
十字騎士団、第一隊機動騎士、ブラッドリー・ザイオンです。ト  
ウコ殿の謙護を仰せつかりました』

道子がよく通る声に気圧されていると、反対側からも声がかかり、  
思わず身体を強張らせた。

『デュアルフレイム  
炎十字騎士団、第一隊弓騎士、隊長のフェリックス・フォックス  
です。同じくトウコ殿の謙護を仰せつかりました』

『えーと・・・、道子です。初めまして』

思わず、日本人の習性でぺこりとお辞儀をした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8423q/>

---

ガーデン

2011年11月1日04時23分発行